

磯之上十ノ坪遺跡

—府営岸和田磯之上住宅建て替えに伴う発掘調査—

2002年3月

大阪府教育委員会



磯之上十ノ坪遺跡

—府営岸和田磯之上住宅建て替えに伴う発掘調査—

2002年3月

大阪府教育委員会

はしがき

大阪南部で最も集水面積が広いと言われる横尾川流域は、古くから開発が進められたことでよく知られています。そのため牛滝川、松尾川の水量と併せて大阪湾に注ぐ大津川流域も含め、東南部の丘陵地帯から北西部の海浜部に及ぶ流域一帯には、古代に耕地を整理するために全国的規模で実施された、6丁四方を1里とする土地の区画、いわゆる条里の痕跡が今もなおよく留められています。それは、碁盤目の形に仕切られた線に沿って走る道路や、地籍に残る「坪」の呼び方の中にその名残りをうかがうことができます。

今回、府営礎之上住宅の建て替えに伴って調査を実施した磯之上十ノ坪遺跡は、ちょうどその1丁の中の10番目の区画に当たります。調査の結果からみても鎌倉時代頃の建物・井戸・溝など生活の跡がその地割りに沿って検出されました。海浜近くにこのように住まいの場を營んで、海で魚を漁っていた暮らしづくりを、発見された蛸壺や網漁の錘などから思い浮かべることもできます。

本書には、大阪湾岸の大津川と春木川の間に立地した中世の村落の一画と、そこから発見された生活用具の特徴について報告し、現在の居住地の原形がどのようにして形づくられてきたのか、それを考える材料が提供されています。

今回の調査は、地元の方々のご理解とご協力を得て行うことができました。また、関係機関の方々にも多大な協力をいただきました。今後とも、本府文化財保護行政に対し、一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成14年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 小林 栄

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府建築都市部の依頼により府営礎之上住宅建て替えに伴い実施した礎之上十ノ坪遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査地は、大阪府岸和田市礎上町1丁目地内である。
3. 現地調査は、文化財保護課調査第二グループ技師桥本哲を担当者として、平成12年10月1日着手し、平成13年3月30に日終了した。遺物整理は調査管理グループ技師山田隆一・小浜成を担当者として、平成13年4月1日から平成14年3月29日まで実施した。
4. 航空写真測量は（株）ウエスコに委託して実施した。撮影フィルムは同社で保管している。
5. 本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
6. 本書で使用した方位は座標北を示し、標高はすべてTP（東京湾標準潮位）表示値である。
7. 本書の執筆・編集は桥本が担当した。なお、第2章については調査補助員島内洋二が執筆した。
8. 発掘調査・遺物整理および本書作成に要した経費は、全額大阪府建築都市部が負担した。

目　　次

はしがき

例言

本文目次

挿図目次

第1章　調査の経緯と経過	1
第2章　周辺の考古学的環境	1
第3章　調査の方法	6
第4章　調査の結果	11
1. 基本層序	
2. 検出された遺構と遺物	
第5章　まとめ	46

挿図目次

- 第1図 調査区位置図 1
第2図 調査区周辺の遺跡分布図 4
第3図 調査区地区割り図 6
第4図 土層断面図 (1) 7
第5図 土層断面図 (2) 9
第6図 建物1平面・断面図 12
第7図 ピット134出土柱根図 14
第8図 建物2平面・断面図 14
第9図 建物3平面・断面図 14
第10図 建物4平面・断面図 15
第11図 建物5平面・断面図 15
第12図 建物6平面・断面図 15
第13図 柱列平面・断面図 16
第14図 ピット平面・断面図 17
第15図 ピット出土遺物図 18
第16図 井戸2平面・断面図 19
第17図 井戸2出土遺物図 20
第18図 井戸123平面・断面図 21
第19図 井戸123出土遺物図 22
第20図 土坑平面・断面図 24
第21図 土坑3出土板石図 27
第22図 土坑出土遺物図 27
第23図 溝出土遺物図 27
第24図 I区包含層出土遺物図 (1) 28
第25図 I区包含層出土遺物図 (2) 29
第26図 I区包含層出土遺物図 (3) 30
第27図 I区包含層出土遺物図 (4) 31
第28図 II区包含層出土遺物図 (1) 32
第29図 II区包含層出土遺物図 (2) 33
第30図 II区包含層出土遺物図 (3) 34
第31図 II区包含層出土遺物図 (4) 35
第32図 II区表土攪乱土出土遺物図 36
第33図 調査区周辺の字名 47
第34図 明治時代の調査区周辺の地形（大日本帝国陸地測量部明治18年地図に加筆） 48
付 図 検出遺構全体図

写真図版目次

第1章 調査の経緯と経過（第1図）

府営磯之上住宅建て替え事業に伴う今回の発掘調査は、平成11年度の試掘調査によって得られた知見を吟味して、実施されたものである。府営住宅敷地内に設けた4個所のグリッド調査では中世主体の遺物包含層が確認され、ほぼ敷地全域に堆積すること、また堆積状況も敷地内では必ずしも一樣でないこと、等々があきらかとなった。この結果に照らして本課は、住棟部分および付属施設部分の全面発掘調査が必要との判断を下し、本府都市建築部住宅建設課との協議を経て、今回の調査に至った。調査総面積は3038m²である。

現地調査は、地元自治会との協議を経て、平成12年10月2日より、まず調査区北半部より機械掘削を開始し、次いで人力掘削に入り、南から北にかけて層厚を増す中世遺物包含層を除去して、遺構検出に及び、比較的順調に作業を進め、12月8日に北半部と南半部の一部の航空測量を実施した。またそれに先だって、12月2日には、前もって地元自治会より要望のあった大芝小学校5・6年生全員に対する現場公開と説明を行い、午後からは地元磯上町民に対しても一般公開を実施した。公開内容は、この頃に判明してきた南半部を中心に検出された鎌倉時代の建物跡や井戸跡である。以上の地区を埋め戻した後、残る南半部の一部の調査を続行し、検出した遺構の航空測量は3月9日に実施した。航空測量後、遺構の個別補足作業を行った後、埋め戻しを行い、3月末に平成12年度の現地調査を完了した。

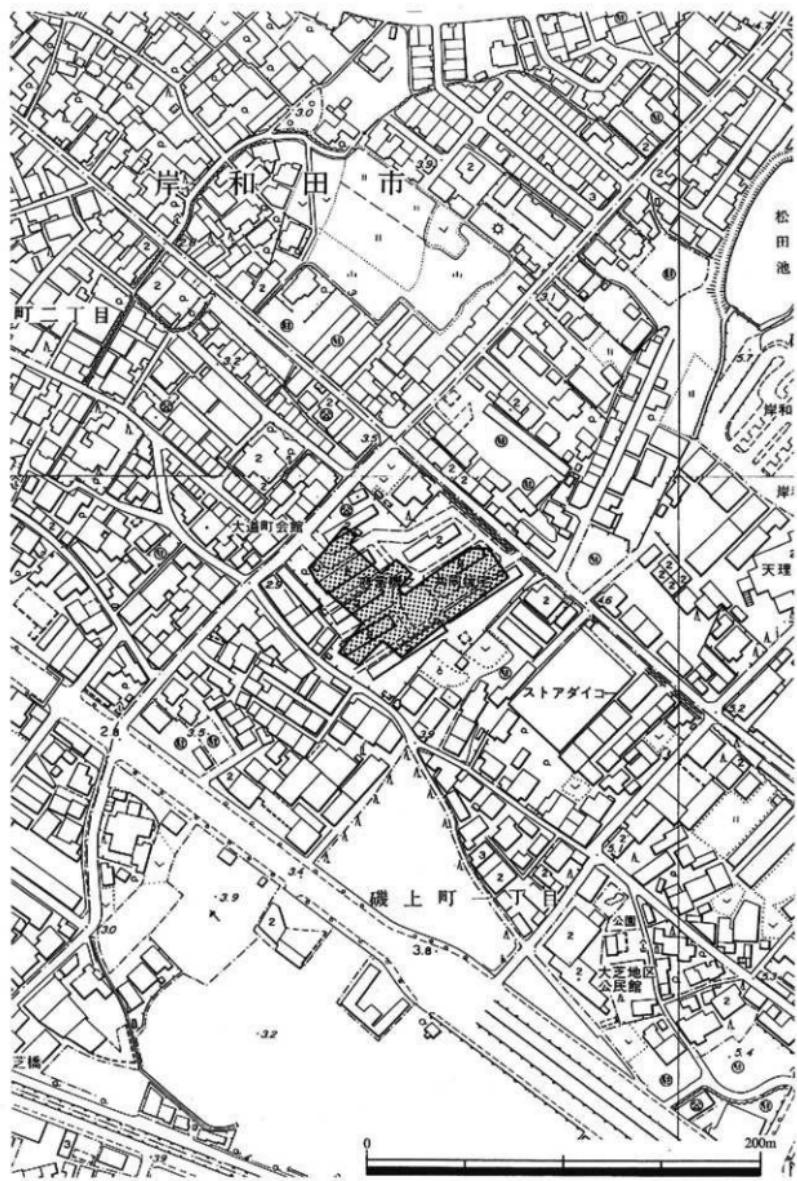
第2章 遺跡周辺の考古学的環境（第2図）

調査区周辺の岸和田市域の遺跡は、旧石器時代から近世に及び、集落に適していた平野部だけでなく、葛城山の山頂部や谷あいに至るまで散見される。後期旧石器は琴山遺跡や葛城山頂遺跡などで知られ、葛城山頂遺跡ではそれ以後縄文時代中期から後期の土器も採集されている。

弥生時代では春木八幡山遺跡が今回の調査地の西南に位置する。弥生前期を主とした遺跡であり、半農半漁の集落であり、前期の中でも古い特徴を持つ弥生土器が出土する唯一の遺跡のため、岸和田の弥生文化の発祥地とされている。ここでは縄文時代や古墳時代の土器も出土している。また隣接して古墳も3基確認されている。これらとは別に6世紀初頭を下らない須恵器の蓋杯、壺、土師器の高杯が出土し、埋葬後の供献品か、一種の祭祀遺構の可能性も考えられている。砂丘中より祭祀遺構と思われるものが2ヶ所より検出され、一方は古墳時代、他方は平安時代とされている。

岸和田及び周辺の弥生遺跡では中期後半から栄えた平野部の多くのムラが後期前半までに廃絶している例が多い。代わってその頃から高地性集落が出現する。もちろん、後期後半から末期にかけて平野にも集落が出現するが、以前より規模は小さくなるようである。

4世紀前半、摩湯町では古墳時代前期の前方後円墳として摩湯山古墳、貝吹山など久米田古墳群が形成される。貝吹山古墳は全長135m、後円部は85mの前方後円墳である。低い台地に立地し、墳丘の大半が盛土によって造営され、周溝を有している。自然地形を利用した摩湯山古墳に比べると古墳時代中期の古市・百舌鳥の大古墳に近い形をとる。そのほか古墳時代前期末から中期頃のものと思われる光明塚、女郎塚の円墳がある。礼拝塚古墳（ぬかづか）は一部しか残され



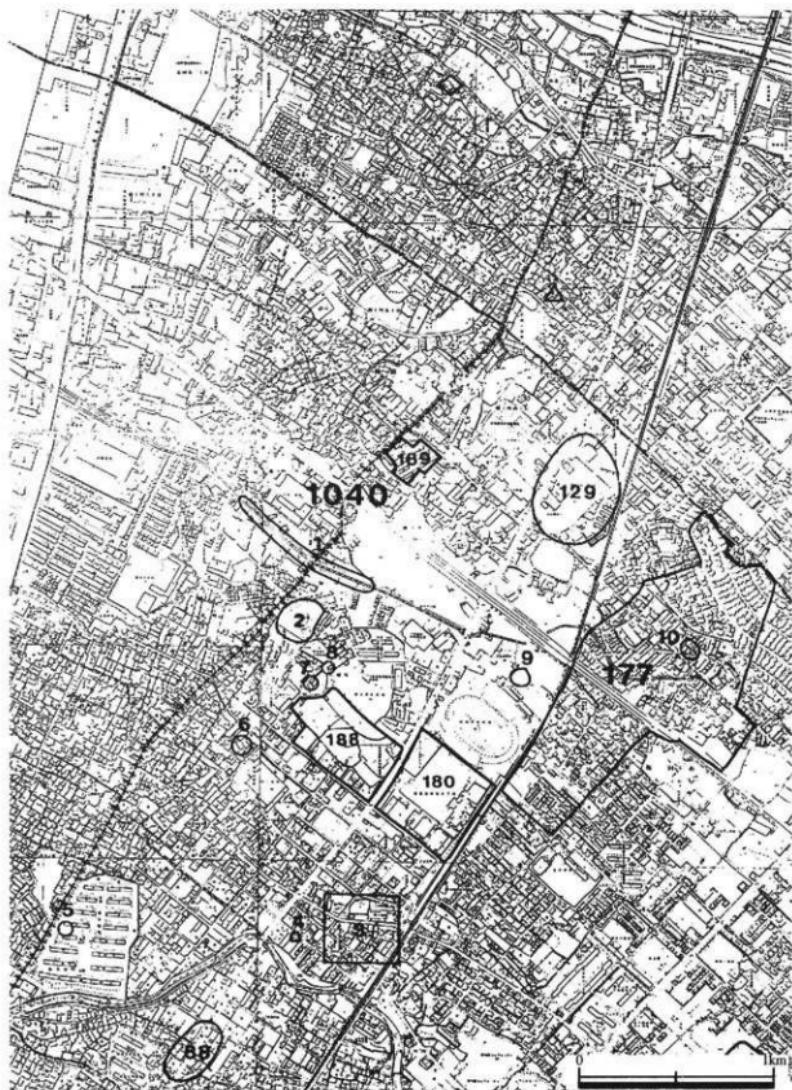
第1図 調査区位置図

ていないが、破壊作業中に金環と須恵器が出土している。内部主体は不明であるが、出土遺物より後期古墳と思われる。古くから街道沿いの聖所として、行き交う人々の礼拝の対象になっていたらしく、古墳名の由来となった。

牛神古墳は丘陵の頂部を利用する円墳で径約30mとされる。埴輪、その他の外部装飾は認められない。主体部は小石室と推し量られている。牛神の名の由来は付近の字名が牛神であるためである。牛神信仰は塚の高まりなどを利用をすること多々見られるので、古墳とは断定しえない遺跡のようである。権現山古墳は直径約30mの円墳が存在したが破壊されてしまい、今となっては詳細不明である。形象埴輪が出土している程度である。

古墳時代になると前代のようにムラ全体を取り囲む環濠集落も高地性集落も見られなくなる。海岸部には磯之上遺跡や春木天ノ川遺跡、平野部には箕土路、下池田、西大路、今木、輕部、池西、小田、土生、畠遺跡などが分布する。また山間の山直谷には山ノ内、山直北遺跡などが出現在する。但し、牛滝川の上流では山直中より小量の遺物が出土するのみで、前期から中期はほとんどが空白で、谷部の開発が遅れていたようである。山直地域は6世紀後半まで竪穴式住居が主流で、6世紀末から7世紀初め頃に平地式住居の出現をみる。磯之上遺跡は古墳時代より中世までの遺物が検出される複合遺跡として知られ、その地名からも分かるように海岸線に接していることはこの遺跡の性格に反映している。この標高5mほどの微高地では、これまで弥生式土器から中世の土器類が出土しているが、主体は古墳時代前期の遺跡である。春木天ノ川遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての遺跡であるが、縄文後期から晩期頃の土器も出土している。最盛期は5～6世紀であった。箕上路、中井、春木を通る天ノ川流域は海進・海退の繰り返しにより低湿地になった可能性のある地域で、古い遺物ほど磨滅が多く何度も氾濫があったことを示している。吉井一ノ坪遺跡は吉井町の西端、条里の一ノ坪に当たる位置に存在した遺跡である。蛸壺が多数出土し、漁村集落であったと考えられている。遺物は古墳後期と平安以後とに分かれる。「家」の墨書きがある平安中期の須恵器が出土している。岸和田市域にはこのような複合遺跡が多く、古くから集落として適した土地であったようである。それに加えて早くから海岸部・平野部とともに沿岸漁業が盛んであったらしく、蛸壺、土錐、製塙土器の出土がそれを物語っている。

古墳の造営を終え、寺院建立が活発になっていくのは、国家的に仏教に帰依してゆく時代に、地方首長達は寺院を建立することによって国家からの身分・特權を獲得し、またこれによって民衆の支配力を高めるためであった。春木廃寺跡は奈良時代前期に創建され、鎌倉時代まで存続していたようである。隣接して河岸段丘を利用した瓦窯もあった。吉井上品寺跡や今木廃寺なども同様である。小松里廃寺からは飛鳥時代の瓦、奈良時代の大型の鷹尾の破片が出土している。しかし、飛鳥・白鳳期に造られた古代寺院の多くは9世紀には規模が縮小し、荒廃するものも出てきた。



第2図 調査区周辺の遺跡分布図

平安時代初頭（9世紀末）には郡衛、寺院が建設されていた可能性が指摘されている。また地割は12世紀の終わり頃から見られ、方位は現在と変わらないものを用いていたと思われる。時期的にはやや遅るが、磯之上十ノ坪遺跡に近い遺跡としては古代～中世の古井遺跡が挙げられる。ここでは約160基の土坑のうち、ほとんどが墓と推定されている。建物跡は条里の方向に一致するものが多いことから、耕地の区画が完成して後の集落であることが窺える。1998年の報告によると条里地割が認められていない。これは旧河川の氾濫域に位置しているため、地割施行時に耕作地として適当ではなかったようである。耕作地を造成するにあたってその整地作業の一環として瓦を埋めているが、そのための瓦の供給先は吉井上品寺に求められている。

他に中世には久米田寺復興の動きも見られた。久米田寺は久米田池の傍に僧行基により造られた奈良時代の寺であり、本格的な発掘調査は行われていないが5～8世紀の遺物が池底から出ている。行基はこれの拡張作業に携わったと思われる。その久米田寺に北条家得宗の有力被官である安藤蓮聖が別当職についたことにより、和泉国の大寺院へと変わっていく。

その後、鎌倉幕府の崩壊により岸和田も戦乱の時代を迎える。その頃に岸和田城も築城されたようである。ちなみに岸和田の由来に、楠正成により代官として派遣された和田高家が岸の地に城を築いたところから岸和田と呼ばれるようになったとする説がある。岸和田城を築造したのも和田高家とされるが資料の残存状態からすると伝承とした方が無難のようである。岸和田城主は細川氏や三好氏、松平氏など城主を変えてゆき、寛永17年（1640）に岡部宣勝となり、明治維新まで岡部氏が城主として君臨する。

交通路についてみると、古代では陸路より、たくさんの荷物を運べる船を利用した海上交通が主流であった。8世紀には都と紀伊、淡路、四国を通る南海道が整備される。平安から中世にかけて熊野詣が盛んになると、道も整備されてゆき熊野街道と呼ばれる主要陸路が形成される。熊野街道は現在の大阪和泉泉州線とほぼ重なり、中世には多くの人々に使用されていた。後に小栗街道といわれるのは中世後期頃の「説教節」などが流行した際、その中の「小栗判官」の語りが広まり、熊野街道の名称を小栗とするほど有名になったためである。そして、今回の調査区の北側を通る紀州街道の前身の浜街道もこの頃利用され始めたらしい。この街道は近世に整備され現在の堺阪和線（旧国道26号線）とほぼ重なっている。

以上見たように、岸和田市域では古代から中世の遺物が出土する複合遺跡が多く存在し、それらの遺跡から銷壺や土鍤などが出土している。海からの恵みが人々の大切な食糧資源の1つであったのである。そして、中世の熊野参詣に伴って発達した熊野街道、江戸時代に整備された紀州街道は、現在も往時の「道」の姿をとどめている。

参考文献

- 岸和田市史編さん委員会「岸和田市史 第一巻」岸和田市 1979
岸和田市史編さん委員会「岸和田市史 第二巻」岸和田市 1996

岸和田市教育委員会「平成8年度発掘調査概要」岸和田市文化財調査概要22 1997

岸和田市教育委員会「平成9年度発掘調査概要」岸和田市文化財調査概要23 1998

岸和田市教育委員会「平成11年度 発掘調査概要」岸和田市文化財調査概要27 2000

豊田直「岸和田市春木八幡山遺跡の研究」岸和田市教育委員会・財団法人古代学協会 1965

財團法人大阪府埋蔵文化財協会「吉井遺跡 府営岸和田市春木第2期住宅（建て替え）建設工事に伴う発掘調査報告書」1992

岸和田市教育委員会「吉井遺跡 —都市計画道路忠岡吉井線建設に伴う発掘調査報告書—」1998

岸和田市史編さん委員会「市内出土遺物図録」岸和田市史紀要 第2号 1976

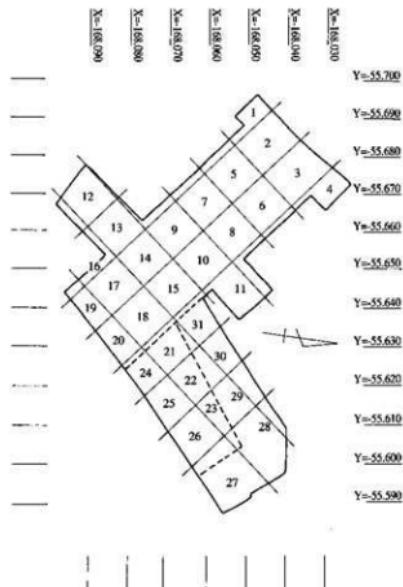
大阪府教育委員会「熊野・紀州街道 歴史の道 調査報告書第1集 調査報告編」1987

第3章 調査の方法（第3図）

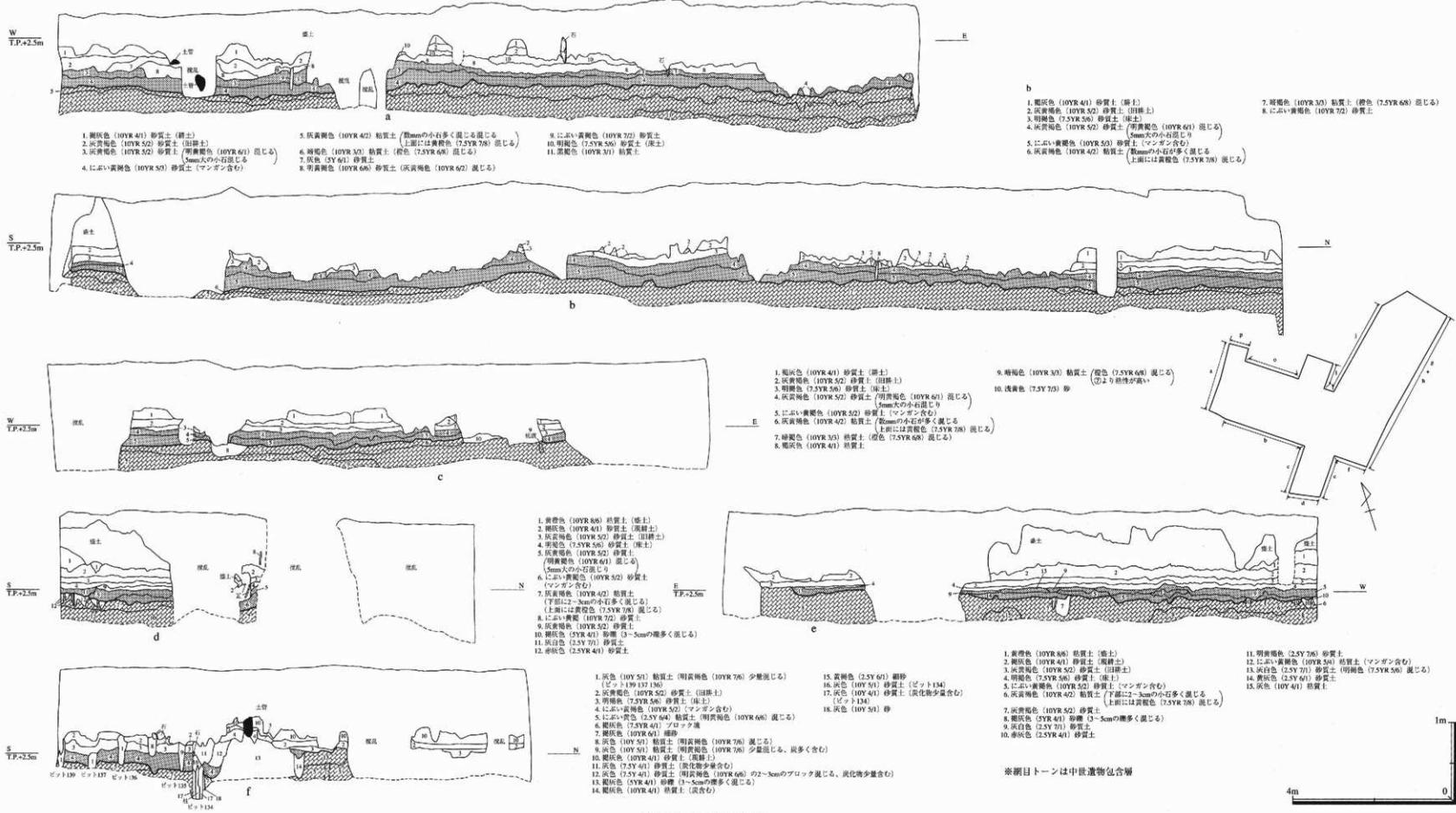
調査方法は、発掘区全体の長辺に平行する任意の軸線を予め設定し、これを基準に10m方格で区分し、原則としてその方格のそれぞれに番号を振って、遺物取り上げの便に供した。発掘を進めた順に方格の番号を付し、狭小な面積の方格は隣接する番号で取り上げ、実際的な利用を優先した。遺構番号は、遺構の種別に関係なく、検出順に1から振り、たとえば同じ溝の連続であっても搅乱等により途中で断ち切られて断続している状態であれば、それぞれに別個に番号をつけ、一連の溝として呼ぶ場合は、それぞれの番号

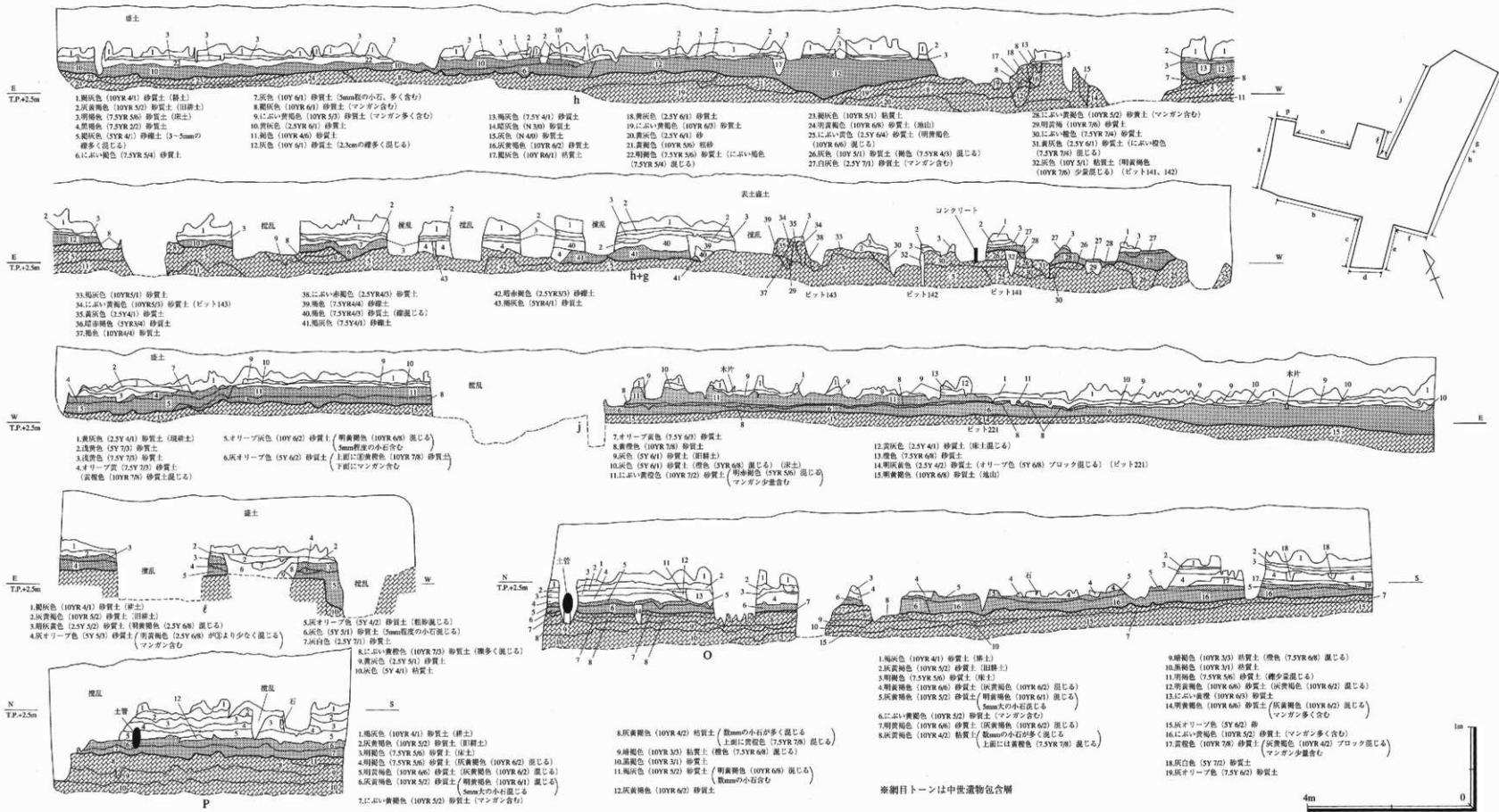
を並記してひとつの溝であることを示した。

調査は住宅の建設時の盛り土や住宅撤去時の瓦礫、それらの下に残る耕作土を機械で掘削した後、以下の包含層を人力にて掘り下げ、遺構・遺物の検出に努めた。この包含層出土の遺物の取り上げは原則として10mメッシュ毎に取り上げたが、狭小なメッシュになる場合はその隣接メッシュに吸収させて取り上げた場合がある。検出された遺構の実測は国土座標の区画大D-4-13を基本にした10m区画を用いた。



第3図 調査区地区割図
(I区…1~15、II区…16~31)





第5図 土層断面図 (2)

第4章 調査の結果

1. 基本層序（第4、5図）

調査区全体は南東から北西へ低くなる地形で、現地表面の地盤高では南東の住宅入り口付近でTP + 3.3m、北西の敷地隅でTP + 2.8mを測る。住宅建設以前の耕作土上面レベルでは、それぞれTP + 3.0m、TP + 2.6m、遺構検出面レベルではTP + 2.4m、TP + 1.8mの数値を得る。つまり、中世遺構が検出される地盤と近現代の地盤の傾斜の度合いにはそれほど大きい差ではなく、旧来の地形に従った土地利用が続けられてきたと考えられる。違いは中世包含層の堆積とその上にさらに盛り上げられた耕作土そして現住宅敷地の嵩上げ分に現れた約1mの厚みである。

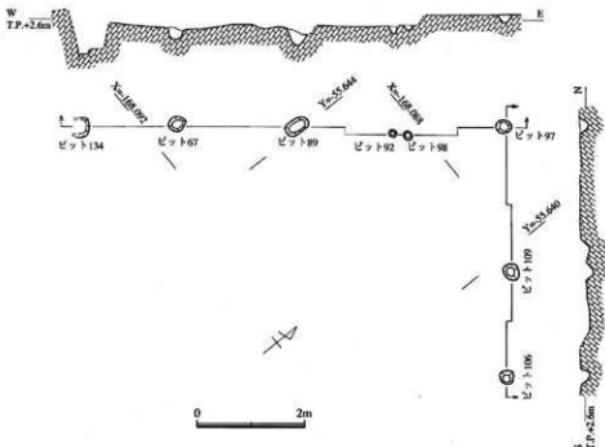
中世包含層の層厚も上記の地盤の高さに応じて、北西に厚く、南東に薄い。基本的に中世の耕作土の床土とみられる細い黄色帯とその上に重なる灰褐色系の粘質土のセットによって数層に分層されるが、大きな時期差はほとんど認められない。建物遺構や井戸跡その他の遺構が検出された南半部では、府営住宅建設時の搅乱が激しく、遺物の多くがこの搅乱土に紛れて出土している。そのため中世包含層はかなり乱されているが、それでも12～14世紀の瓦器・陶磁器・土錘・婧壺等々以外に、弥生時代の石鎚や不定形刃器、6～8世紀の須恵器・婧壺・土錘といったそれ以前の遺物も目立っている。このようなありかたには海浜に面して営まれた、この調査地点の土地利用のありかたが間接的に投影されているようである。なお、遺物の観察は土器・土錘・婧壺については一覧表にまとめ卷末に示した。その他の遺物については本文中に触れている。

2. 検出された遺構と遺物（付図）

建物、井戸、柱列、溝、上坑などを検出した。検出面は中世遺物包含層を除去した面となるが、このような生活遺構は16～21・24区（II区）に集中し、これより海側の1～15区（I区）にはみられない。この遺構の分布密度の違いは、検出面となる地山層の違い、すなわち前者の礫層と後者の砂層の違いによる。したがって居住区とそうでない空間との住み分けには、この地山の土質の変化点を境にして土地利用のしかたに非常にはっきりとしたコントラストが認められる。以下、各遺構の特徴や規模について述べる。出土遺物のうち、土器・婧壺・土錘については表にまとめ、その他は本文中に触れている。

建物 検出されたピットで建物を構成すると考えられるものとして以下の建物をあげておきたい。しかし全体が検出されたものは少ない。軸の振れは必ずしも一致せず、若干の差がある。ただどの建物も調査区南西部の約500m²以内におさまり、それは同時に居住区でもあって、今回の調査区全体の面積の16%にすぎない。

建物1（第6図） 17・19区で検出された南北2間2.35m、東西5間7.9m以上を測る建物である。面積は18.5m²以上になる。建物の東西方向はN41°-Eである。柱穴間は東西で1.80～2.20m、南北で1.00～1.34mを測る。検出面で搅乱を受けていない柱穴の堀り方は径0.25～0.30mのほぼ円形であり、深さは0.15～0.20mに集中するが、ピット134は深く0.52mまで掘り込んでいる。埋土は灰黄色（2.5Y6/2）粘質土がほとんどであるが、ピット106ではその下にさらに灰色（5Y6/1）粘質土が認められる。またピット134は調査区の壁面にかかるが、このピットには柱根が残っており、柱の掘立て状態が断面によってよく観察された（第7、14図6、図版3）。



第6図 建物1 平面・断面図

柱根底面および下部側面には四方からの斧による切断の痕跡を留める。底面径は15~16cmを測る。ピット97より土師器片、106より土師器片、109より土師器片が出土しているが、器種は不明であり、図化は不可能であった。

建物2（第8図）やはり部分的に、東西3間分5.7m、南北1間分2.0mを検出した。東西方向はN41°-Eを測る。柱穴間は1.6~2.2mである。検出面で搅乱を受けていないピット77では柱穴径は0.30~0.35m、深さは0.28mを測る。柱穴底面はピット126がやや深く、他はほぼ一定で目立った差はない。柱穴埋土は灰黄色（2.5Y6/2）粘質土がすべてのピットにみられるが、ピット126ではその下に地山と思われるオリーブ褐色（2.5Y4/4）粘質土がブロック状に混じり、さらに底面には灰黄色（2.5Y7/2）砂質土が堆積していた。ピット74や78でも灰黄色粘質土の下に灰色（5Y6/1）砂質土が堆積している。また灰黄色粘質土に炭の混じるのが認められるピットには74、78、126がある。ピット74から土師器片、瓦器挽口縁部片、土師質蛸壺片、ピット77（第14図3）から土師器皿口縁部片、同皿完形品、ピット126（第14図5）から土師質蛸壺片、土師器片が出土したが、図上復原できたのはピット74の瓦器挽（第15図13）と土師器皿（同図14）、ピット126の蛸壺（同図23）だけであった。蛸壺は真蛸用で胴部の輪積み成形の剥離した部分である。またピット140では埋め戻しの際の石（10~15cm大）が投棄された状態（第14図8）で出土した。

建物3（第9図）東西部分の3間分6.05mが調査区内で捉えられた。この柱列の方向はN45°-Eである。柱穴間は1.75~2.2mを測る。柱穴埋土は径0.30~0.33のほぼ円形であるが、ピット100はやや歪で長径が0.41mになる。柱穴の深さは0.10~0.30mとややばらつきがある。ここで

も比較的浅い擾乱のため検出面レベルは一定していない。柱穴埋土は灰黄色（2.5Y6/2）粘質土がすべてのピットに認められ、これにピット103では炭が混じる。またピット80（第14図4）ではさらに下位に灰オリーブ色（5Y4/2）粘質土があり、この土にも炭が混じっていた。ピット80より土師器片、100より土師器皿片、103より土師器片、瓦器口縁部片、他破片が出土した。うち図化できたものとしては、ピット100の上師器皿（第15図21）、ピット103の土師器片、瓦器皿（同図22）がある。瓦器皿は内外面を密にヘラミガキを重ねている。

建物4（第10図） 東西2間4.32m、南北2間4.0mで、面積17.28m²の方形の総柱式建物の、北側にさらにやや歪な1間四方約2.4m²の施設が付く。ピット177、203、208は溝176の底面で検出された。主屋の東西方向はN-41°-Eを測る。柱間は東西の通りで1.65～2.28m、南北の通りで1.70～2.30mにおさまり、平均値は東西2.03m、南北2.11mとなる。柱穴径は大きいもので0.40m、小さいもので0.20m、深さは0.18m～0.22mを測る。柱穴埋土にはいずれも暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土に明黄褐色（2.5Y6/8）粘質土が混じる。ピット171から瓦器碗、土師器片、ピット172から瓦器碗、土師器皿高台片、須恵器盤片、ピット173から瓦器碗高台片が出土した。そのうち図化できたのはピット171の瓦器碗3点（第15図24～26）とピット172の瓦器碗4点（同図27～30）、土師器高台付き皿（同図31）である。

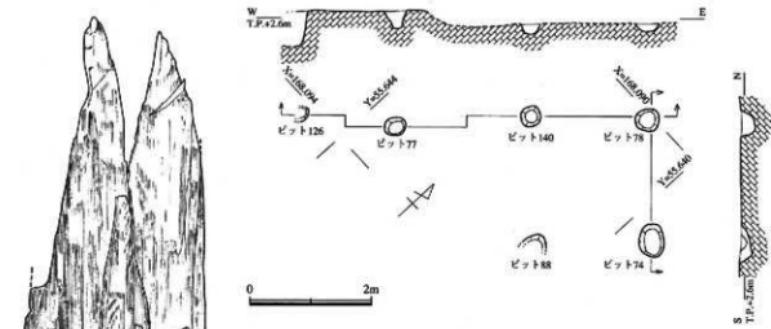
建物5（第11図） 東西1間1.96～2.00m、南北1間1.8～1.9m、面積3.6m²程度の建物である。東西方向はN-37°-Eを測る。柱穴径は検出面の削平がみられなかつたピット165では0.38m、深さは0.22mを測る。柱穴埋土は暗灰黄色（2.5Y5/3）砂質土で、ピット169ではこれに明黄褐色（2.5Y6/8）砂質土が混じる。どのピットからも出土遺物はなかった。

建物6（第12図） やはり削平されて検出面は一定でない。東西2間3.38m、南北1間1.70m分を部分的に検出した。東西方向はN-50.5°-E。柱穴径は検出面で削平を被っていないピット160、167、168では0.20～0.30m、深さは0.20～0.24mを測る。柱穴埋土は黄灰色（2.5Y5/1）～黄褐色（2.5Y5/3）砂質土である。どのピットからも出土遺物はなかった。

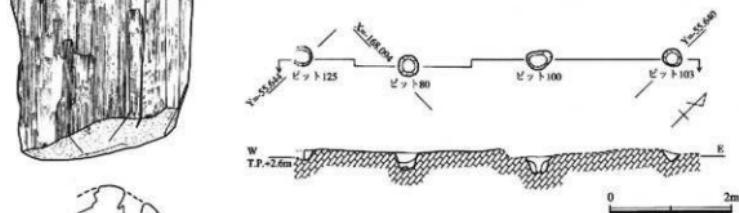
柱列（第13図） 上記の建物群の集中する区域の北西を仕切るような形で検出された柱穴列である。居住用または倉庫用とみられる上記の建物の柱列とは区別して、ここに別個に取り上げた。削平のために検出面が一定せず、消失したピットもあったと思われる。計3列を挙げておきたい。

柱列1 ピット4、8、12、17を結ぶラインで捉えられる延長6.85m分の列。軸方向はN-40°-E。柱と柱の間隔はピット4からピット17に向かって、2.2m、1.95m、2.7mを測る。柱穴径は0.24～0.30m、深さにはばらつきがあり、浅いピット（17）で0.17m、深いピット（4）で0.45mを測る。柱穴埋土は灰黄色（2.5Y6/2）粘質土や黄灰色（2.5Y5/1）粘質土で、ピット4ではその下に灰色（5Y6/1）粘質土がみられた。ピット4より土師器、ピット8より土師器片、ピット12より土師器碗底部片、口縁部片、瓦器碗の出土をみた。そのうちピット12出土の瓦器碗2点（第15図1、2）を図化できた。

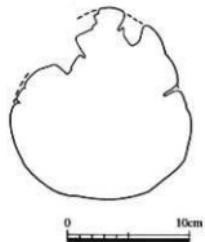
柱列2 ピット51、52、65を結ぶラインで捉えられる延長5.8m分の列。軸方向はN-48°-E。ピット51と65との間は大きく擾乱されている。この部分にもうひとつピットがあったとすると、



第8図 建物2 平面・断面図



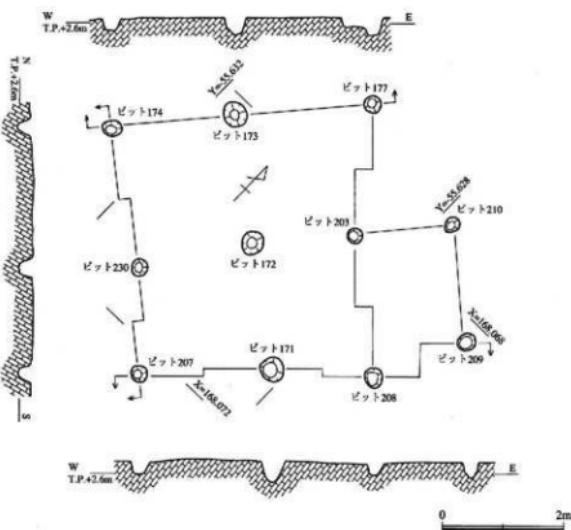
第9図 建物3 平面・断面図



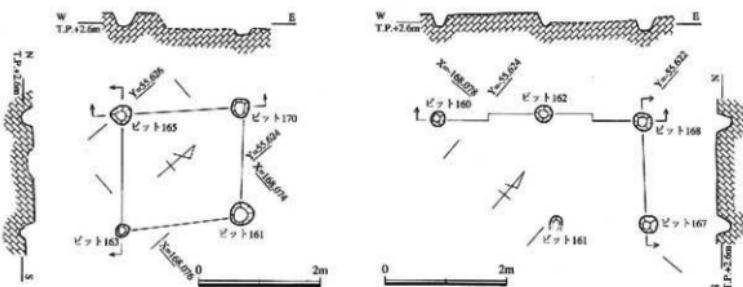
第7図 ピット134出土柱根図

柱間は1.8~0.2mになろう。柱穴径は0.28~0.34m、深さは0.29~0.31mを測るが、ピット52はきわめて浅く0.06mであった。ピット51からは土師器片、瓦器片、ピット65から土師器片が出土した。そのうちピット65の土師器皿（第15図9）を図化できた。

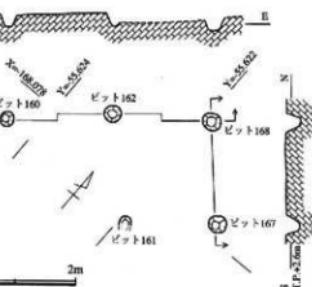
柱列3 ピット94、124、46、47、14、16を結ぶラインで捉えられる延長31.9m分の列。軸方向はN47.5°-E。ピット124の位置はやはり搅乱され、底面のみかろうじて残った状態であった。柱間は1.9~2.4mの幅がある。形状はやや歪な円形を呈し、柱穴径は0.30~0.53mの幅がある。搅乱を受けていない検出面のピットで見た深さは0.20~0.33mを測る。柱穴埋土は灰黄色（2.5Y6/2）粘質土を主体とし、一部のピット（14）ではその下に灰色（5Y6/1）粘質土の堆積が認められた。ピット14以外すべてのピットから遺物が出土し。ピット16では土師器片、瓦器片、ピット46では土師器皿片のほか土師器片、土師質壺口縁部片、ピット47では土師器片、ピット94では土師器片、須恵器甕片その他の須恵器片、土師質壺口縁部片その他の破片、ピット124では須恵器甕脚部片が出土した。図化できたのはピット46の土師器皿（第15図6）、ピット94の土師器高台付き皿（第15図19）と土師器壺頸部片（第15図20）である。



第10図 建物4 平面・断面図



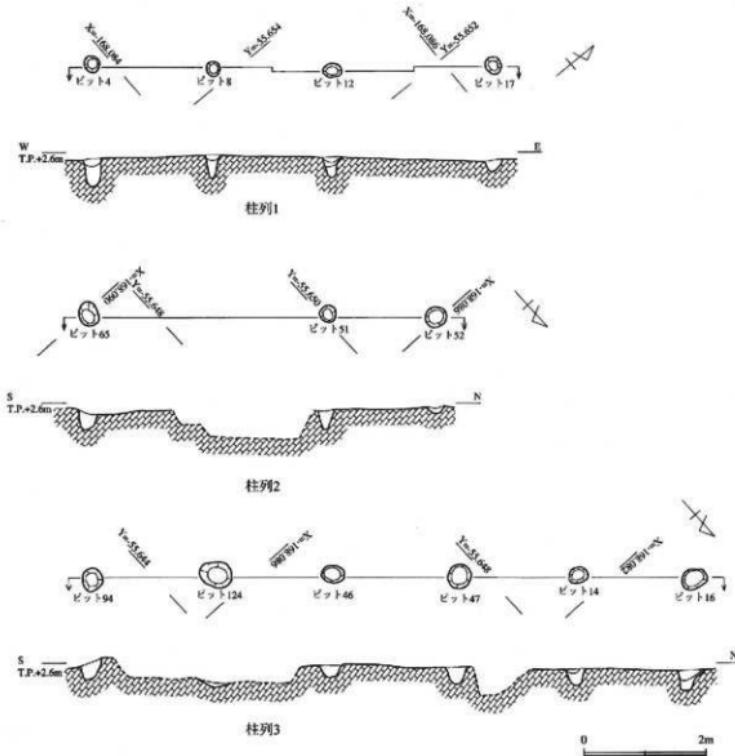
第11図 建物5 平面・断面図



第12図 建物6 平面・断面図

その他のピット 上記の建物や柱列のように一定の平面形をなすもの以外に、多くのピットが検出されている。しかしそれらがどのように組み合うか検証は難しいが、建物として捉えられる遺構の周辺に集中するのもまた事実である。したがって単独にしろ組み合うにしろ、住生活区域での必要があって掘り込まれたに違いなく、それらの中に土器や石などが投棄された状態が観察されるのも、土地の利用と廃絶の現象の証跡である。ここでは特徴的な出土状態の観察されたその他のピットについて説明をくわえておきたい。

ピット71 (第14図1) 径0.26~0.27mの円形ピットで、灰黄色(2.5Y6/2)粘質土を埋土とする



第13図 柱列 平面・断面図

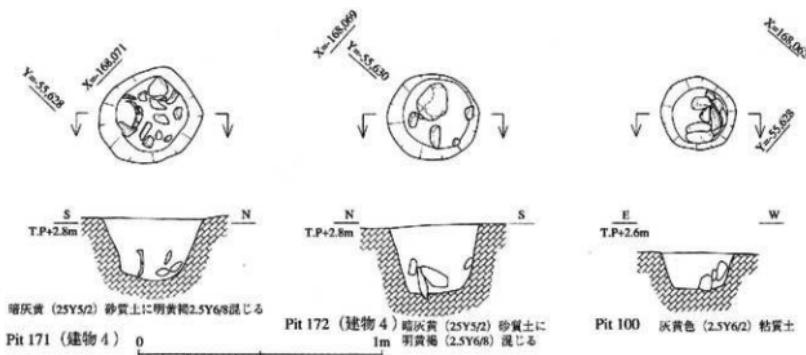
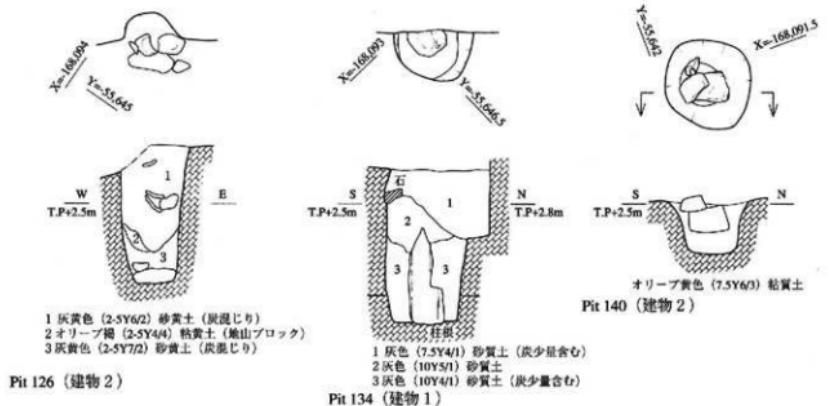
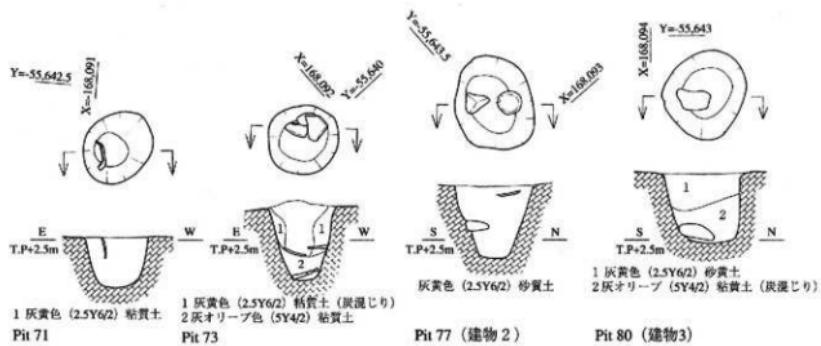
る。埋め戻しの際に南西方向から投棄された状態の土師器皿（第15図10）が出土した。

ピット73（第14図2）径0.28mの円形ピットで、埋土は灰黄色（2.5Y6/2）粘質土と灰オリーブ色（5Y4/2）粘質土の2層に分層でき、いずれにも炭が混じっていた。両層の境目で須恵器壺片と瓦器楕円口縁部片（第15図11）が出土した。

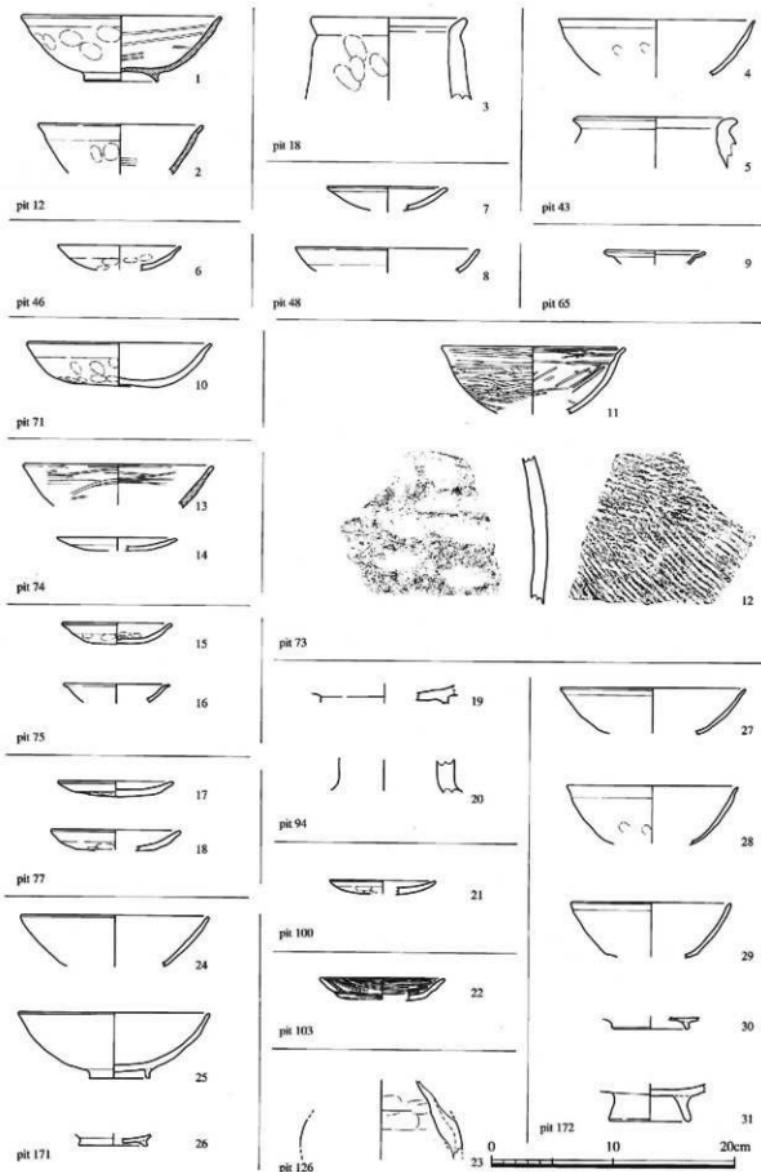
ピット180（第14図10）建物4の東側の旧住宅の搅乱坑の底面で検出された径0.30m、深さ0.15mのピットである。西側から6~10cm大の石が一括投棄された状態で出土した。石のほかに出土遺物はない。周辺は搅乱が激しく、このピットが本来何らかの建物を構成したものであったかどうかは確認しようがない。

井戸 中世の井戸2基と近現代の井戸1基が検出された。ここでは中世井戸を中心に規模、出土遺物を説明する。この時期の井戸は建物のある位置に近接して掘り込まれ、どの建物と組み合うかは容易に決めがたいが、屋敷の重要な構成要素であることに変わりはない。

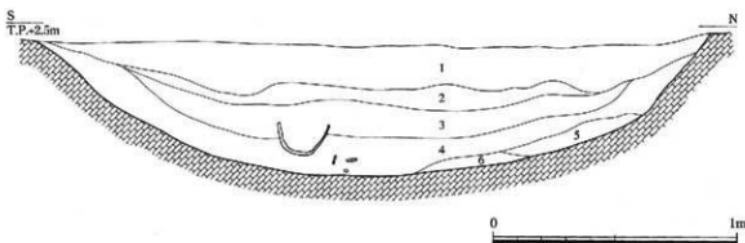
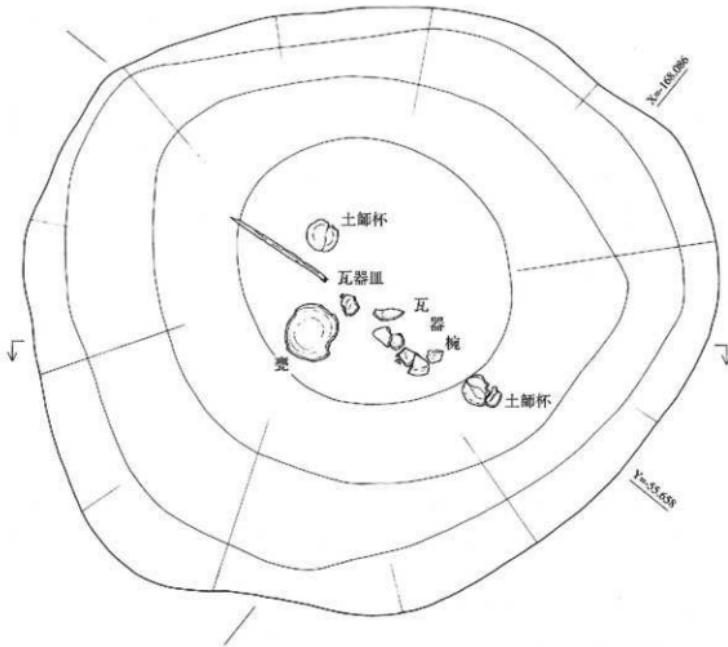
井戸1 現耕土直下、床土上面で検出された。1辺約1.0mの木枠井戸で、堀方は2.5mで、1辺



第14図 ピット 平面・断面図

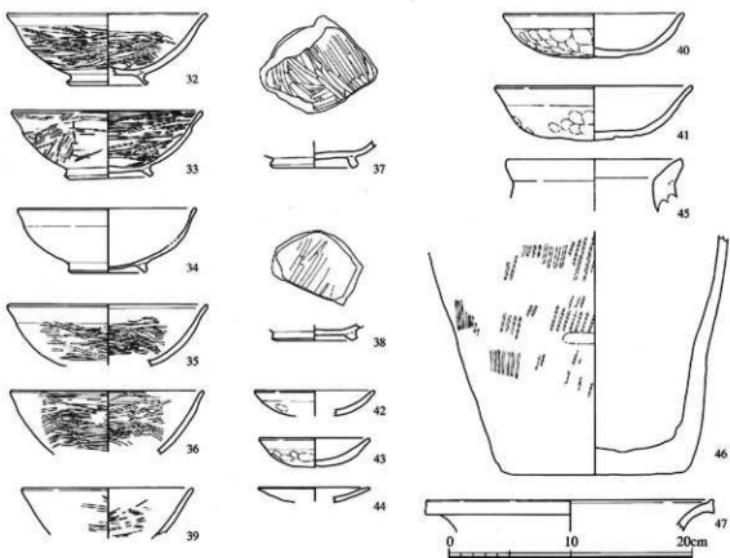


第15図 ピット出土遺物図



1. にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 砂質土
(炭、雜混入)
2. 明黄褐色 (10YR 7/6) 粘土
3. 褐灰 (10YR 4/1) 粘土 (木葉、枝混入)
4. 褐灰 (10YR 6/1) 粘土 (木葉、枝混入)
5. 灰白色 (2.5Y 8/1) 腐葉砂
6. 黃灰色 (2.5Y 5/1) 粘土

第16図 井戸2 平面・断面図



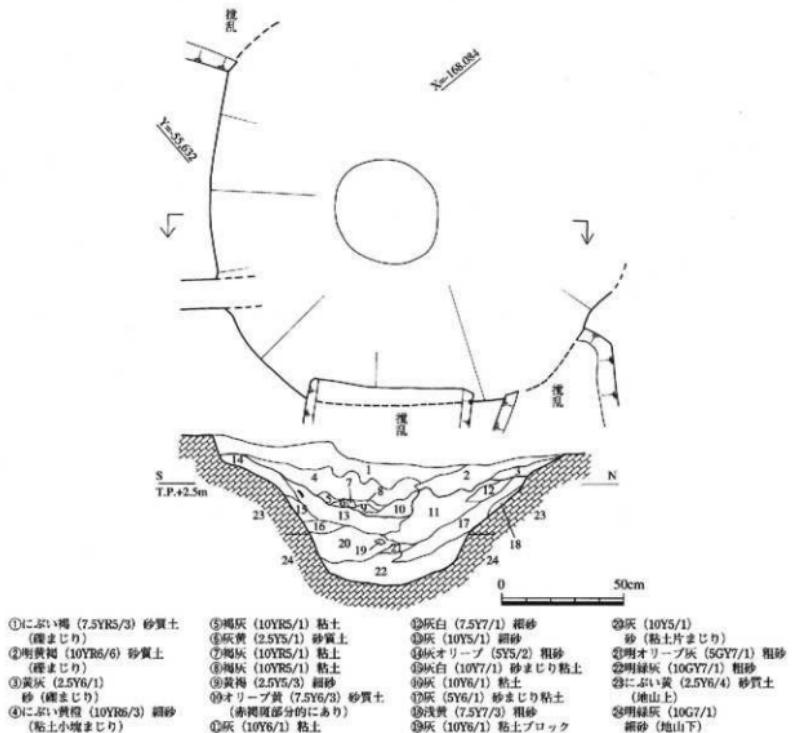
第17図 井戸2 出土遺物図

10~15cmの角材を四隅にして設置し、ほど孔をつけてこれに横木を挿入し、この横木に幅15~20cm、厚さ約1cmのスギ板を井戸の1辺当たり5~6枚を縦に据えるものである。検出面からの深さ2.8mまで掘削されている。底面には泥土が溜まり、出水が激しい。陶磁器片や瓦片が埋め戻しの土から出土したが、すべて近現代のものである。

井戸2（第16図）柱列1の南西に掘り込まれ、建物群の北西部にあたる。やや歪な円形の掘り込みで、径2.50~2.70m、深さは検出面から0.53mまで掘り鉢状に掘り下げている。埋土はわずかに粗砂が流れ込んだ後、粘土が順次レンズ状に堆積し、最終的に炭や礫が混入する砂質土を以て完全に埋没した状況がうかがわれ、それらの堆積土は6層に分層できた。そのうち第3から4層にかけて、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器などの比較的まとまった遺物が、樹枝の破片・木の葉などとともに出土した。

出土遺物（第17図） 瓦器椀（32~39）、土師器椀（40~41）、土師器皿（42~44）、真蛸壺（45）、須恵質甕底部（46）、須恵器甕口縁部（47）などが出土している。

井戸123（第18図）建物ピット群の集中個所の北東部で検出された。府営住宅建設時の擾乱が激しく、同一検出面レベルで掘り込みの肩のラインを追うことはできない。溝233と重複関係にあり、井戸の埋没が先行する。地山の第23、24層の2層にわたって掘りさげている。埋土は22層に区分した。井戸底面には粗砂の堆積がみられ、その上には粘土もしくは粘土塊を含む数層が堆積し、それより上に砂、砂質土、粘土塊混じりの砂質土が被る。遺物は底面の粗砂より上位の各層全体にわたって出土している。土質や堆積状態からの変化によって、第1~10層など砂質



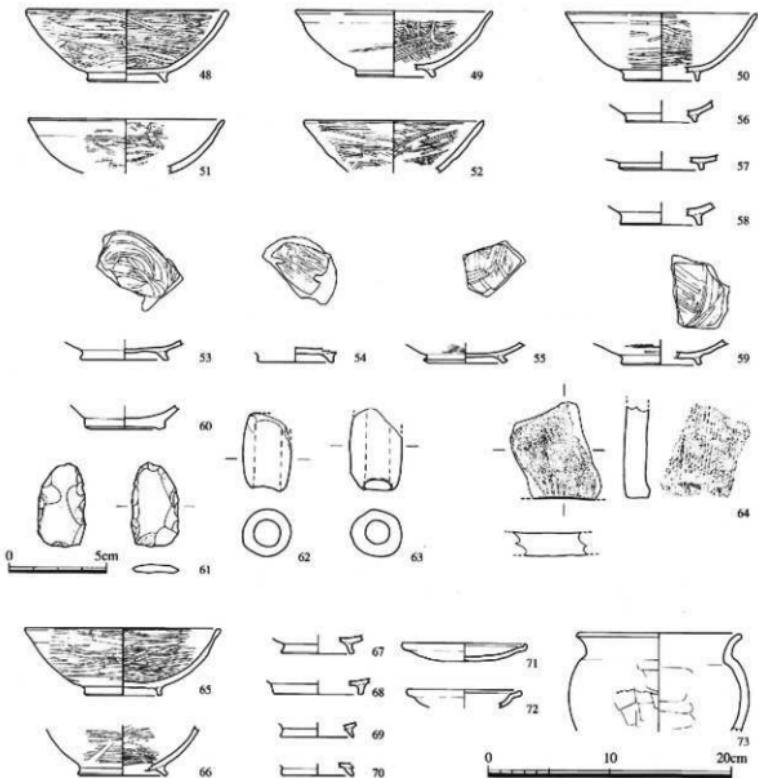
第18図 井戸123 平面・断面図

土主体の堆積層とそれ以下の第11～17層を下層とし、遺物を取り上げた。前記の井戸2の堆積状況と違い、緩慢な堆積過程はうかがわれず、井戸として使用されなくなつて直ちに埋め戻されたような印象を受ける。出土遺物は上層・下層とも瓦器梶の破片が多く、下層ではこれに瓦片、土錐、土師器皿、また石器や土師器壺の破片も混入している。

出土遺物（第19図） 瓦器梶（48～59、65～70）、白磁梶（60）、石器（61）、土師質土錐（62～63）、瓦（64）、土師器皿（71～72）、土師器壺（73）が出土している。石器はサヌカイト製、3.3×1.9cm、厚さ0.4cmの片面調整の弥生時代の刀器と思われる。

土坑 人為的に掘り込まれたり、自然地形の凹凸の結果生じたと思われる落ち込み状となったものも含め、出土遺物をみたものを中心にしてここでは土坑としてとり挙げておきたい。

土坑3（第20図1） 井戸2の北西1.5m隔てたところで検出された。1.15m×0.78m、深さ0.18mの深い不定形土坑で、埋土は黄灰色（2.5Y5/1）砂質土、これに黄色（2.5Y7/8）砂質土ブ



第19図 井戸123 出土遺物図

ロックを含む。一度に埋め戻した堆積状況がうかがえる。この土坑には中央に厚さ6~7cmの板石が立てられていた。両側から打ち欠いて板石としたもので、端面にも両方向からの打ち欠きが認められる。平面形では縁が円弧状となる部分があるが、それ以外はすべて割れ口があるので、割れた板石を用いてこの土坑に立てた可能性がある。この土坑の位置は十ノ坪の1町四方を10等分した場合の分割個所に当たっていること、建物群や井戸のある屋敷地のコーナーに相当することが注意される。

土坑66（第20図2）建物1のピット67北西に接して掘り込まれた土坑であるが、擾乱によつて南辺の一部がかろうじて残ったものである。深さ0.32mまで残り、埋土は灰黄色（2.5Y6/2）粘質土、その下に灰色（5Y6/1）砂質土であった。土師質の真蜻蛉の破片が南側から投棄された状態で出土した（第21図）。これに紛れて土師器の細片も出土している。このうち土師質蜻蛉の各部片を図上復原できた（第22図74~78）。

土坑96 建物1の北東コーナーに近くに掘り込まれた楕円形土坑であるが、擾乱によって半分ほどが残った状態である。0.76×0.30mで、深さは0.16m、灰黄色（2.5Y6/2）粘質土を埋土とする。土師器皿、瓦器片が出土している。このうち土師器皿を図上復原できた（第22図79）。

土坑132（第20図） 調査区北西部（5区）で検出された、1.30m×0.88m、深さ0.26mの楕円形土坑である。埋土は、黄灰色（2.5Y6/1）粘土ブロックを含んでレンズ状に堆積する厚さ10cmの灰色（7.5Y6/1）砂と、その下の底面に溜まる灰色（5Y4/1）粘土からなるが、その間に部分的に灰白色（2.5Y4/2）微砂が間層として入る。灰色砂から瓦片（第22図80・81）が出土した。

土坑133 上記の土坑の西側に掘り込まれた土坑で、1.18m×0.82m、深さ0.24mの楕円形土坑である。埋土は灰色（7.5Y6/1）砂のみである。規模、埋土ともに上記の土坑と似ているので、同じ意図のもとに掘り込まれた遺構と考えてよいかも知れない。

土坑195 調査区北西部（26区）で検出された楕円形土坑で、0.90×0.40m、深さは0.03mを測る。埋土は黄灰色（2.5Y4/1）砂質土、その下に黄褐色（10YR5/6）砂質土である。埋土中より須恵器杯蓋が出土した（第22図82）。

土坑198 前記の土坑の北側で検出された溝状の土坑である。5.30×1.10～1.13m、深さは0.15mで、埋土は上記の土坑と同じく、黄灰色（2.5Y4/1）砂質土、その下に黄褐色（10YR5/6）砂質土である。長軸はN-50°-Eの振れである。埋土中より須恵器杯身、同壺口縁部、同飯蛸壺が出土した（第22図83～85）。また図上復原はできなかったが、土師器片も出土している。

土坑213（第20図4） 不定形な土坑が無秩序に検出された調査区北東部の、溝217、221南西側で検出された。埋土は砂質土である。出土遺物はなく、自然の落ち込みとも考えられる。

土坑229（第20図5） 上記と同じ不定形土坑のひとつで、埋土はやはり砂質土で出土遺物はない。

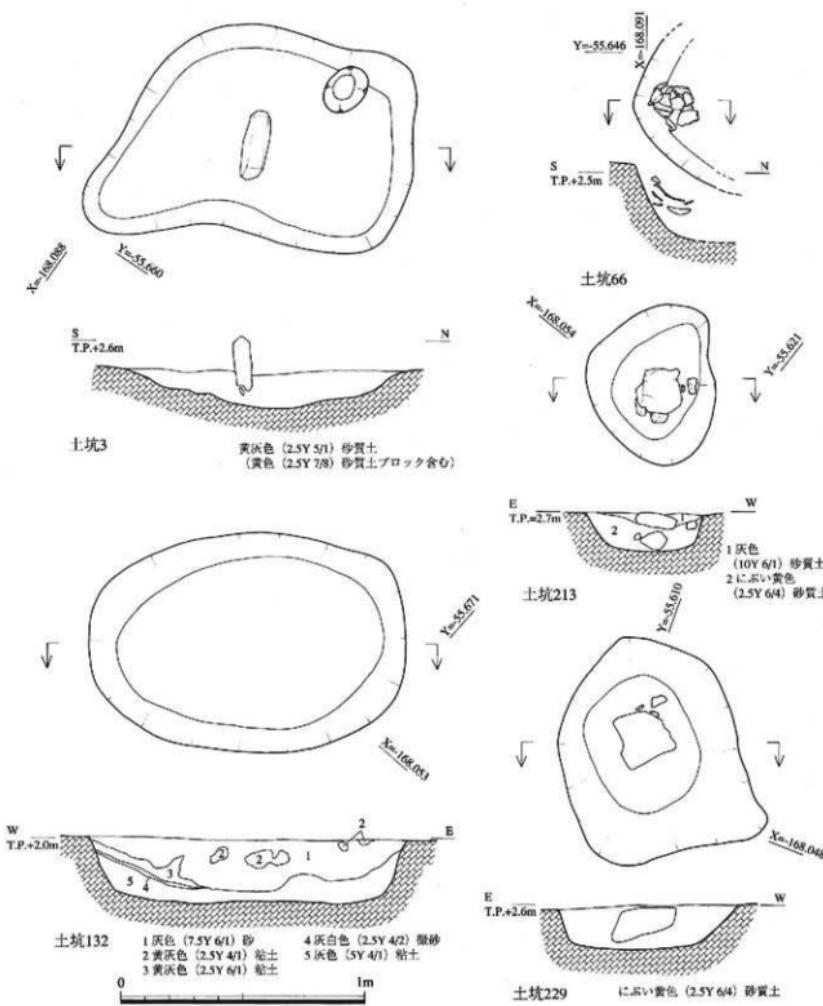
溝 溝は建物や柱列の軸方向とほぼ揃う溝、つまり地割りに規制された溝と、これに因わりなく、旧来の自然地形に沿った溝がある。これらの溝の中には他の遺構との重複関係で捉えられるものもある。

地割りに即した溝群

溝131 建物1の東側に2m隔てたところで検出された溝で、擾乱により調査区内で一部が検出された。ピット112と重複関係にあり、ピットの掘り込みが先行する。幅0.80～0.90m、深さ0.05m、埋土は灰黄色（2.5Y6/2）粘質土である。方向はN-50°-Wを測る。

溝176 溝233から約13m隔てた北東で、それとほぼ平行する形で検出された。上記の2条の溝に比べて幅広く深い掘り込みである。建物4のピット177、203、208と重複関係にあり、これらのピットの埋没後に掘り込まれている。幅0.70～0.90m、深さ0.03～0.06mを測り、埋土は暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土に明黄褐色（2.5Y6/8）粘質土が混じる。方向はN-47°-Wを測る。出土遺物には土師器、須恵器、瓦器の破片があるが、このうち図上復原できたのは瓦器碗と土師器皿である（第23図90～91）。

溝211・218・232 府営住宅の埋設管坑により断ち切られて断続的に検出された一連の溝である。溝176から約19m北東に隔てたところで検出された。幅0.20～0.25m、深さ0.03～0.07m



第20図 土坑 平面・断面図

の細溝である。埋土は暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質土にオリーブ色（5Y6/8）粘質土が混じる。方向はN-57° -Wを測る。

溝222 前記の溝の北東に約3.5m隔てて平行して掘り込まれた溝である。規模、埋土も前記の溝と同様である。方向はN-50° -Wを測る。

溝233 溝131から北東に6.5m隔てて、それと平行する形で、やはり擾乱により一部が検出された。井戸123と重複関係にあり、井戸の埋没後の掘り込みである。幅0.30m、深さ0.11mを測り、埋土は灰黄色（2.5Y6/2）粘質土である。方向はN-54° -Wを測る。

自然地形に沿った溝

溝151 調査区北東部で検出された幅0.08～0.12m、深さ0.05～0.16mを測る細溝で、埋土はにぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土である。方向はN-70° -Wを測る。

溝166 建物5と同じ位置で検出された幅0.30～0.40m、深さ0.12mを測る溝で両端が擾乱によって断ち切られ、一部が残ったにすぎない。埋土は黄褐色（2.5Y5/3）砂質土である。方向はN-50° -Wを測る。出土遺物には瓦器楕、土師器皿の破片がある（第23図86～89）。

溝184・188・189 調査区南東部東側（25区）で検出された一連の溝である。埋設管坑その他の擾乱により数カ所で断ち切られている。直線的でなくやや蛇行しつつ北西に向かっている。幅0.20～0.60m、深さ0.05～0.13m、埋土は188・189で灰黄色（10YR4/2）砂質土、184でにぶい黄色（10YR3/4）砂質土である。方向は188でN-50° -W、189・184でN-75°～77° -Eを測る。189の部分より内黒土師器片が出土している。

溝201 これも溝の痕跡の一部と考えられる。前記の溝の南で検出された幅0.35～0.40m、深さ0.06mの溝である。埋土は黄灰色（2.5Y4/1）砂質土に黄褐色（10YR5/6）粘質土が混じる。方向はN-54° -Eを測る。

溝206 前記の溝の東側で検出された。溝の痕跡の一部として取り上げた。幅0.50m、深さ0.07mを測る。埋土は前記の溝と同様、黄灰色（2.5Y9/1）砂質土に黄褐色（10YR5/6）粘質土が混じる。方向はN-14° -Eを測る。

溝217・221 前記の溝の北側で検出された一連の溝である。幅0.40～0.90m、深さ0.07～0.15m、埋土は217で暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質土にオリーブ色（5Y6/8）粘質土ブロックを含み、その下に褐灰色（10YR4/1）砂質土が溜まっている。また221では底面に溜まった褐灰色砂質土がみられなかった。他の溝に比べて幅広い。方向はN-27° -Wを測る。217部分より土師器片、瓦器片が出土している。

溝220 調査区東南端で検出された幅0.20～0.50m、深さ0.06mを測る溝である。埋土は黄灰色（2.5Y9/1）砂質土に黄褐色（10YR5/6）粘質土が混じる。方向はN-5° -Wで、前記の溝の方向に近い。

包含層の遺物（第24～31図）

今回の調査区全体に堆積する遺物包含層は層厚の違いはあっても、すべての土層で中世遺物が出土した。しかしそれに混入する中世以前の遺物には、海側の1～15区（Ⅰ区）と山手側の16～31区（Ⅱ区）の大きく2つの区域で出土遺物の内容に差がみられる。両区域の境は地山での遺

構検出面標高値ほぼTP + 2.5mのラインに相当する。そして層序のところで既に述べたように、このラインを境にして北西の海側と南東の山手側で地山の土質も変化する。海側の砂・砂質土と山手側の砂礫土がそれで、前章に説明した建物・井戸など生活遺構はすべてこの砂礫土面で検出された。山手側に向かって漸次隆起するこの砂礫土上に堆積する中世包含層には、須恵器の破片の混入が目立ち、また須恵器を出土する中世以前の数少ない遺構である土坑195、198もⅡ区のこの砂礫土面で検出されている。このような遺構の分布、包含層の堆積状況、基盤となる地山層の拡がりは、すべて調査対象区域の土地がどのように利用されてきたかに連動して生じた一連の現象と捉えられる。個々の遺物の内容は巻末の表にまとめたので、ここではそれらに基づいて包含層の内容のあらましを述べておきたい。

包含層の大半は中世遺物であり、12～14世紀におよぶ瓦器椀・皿・土師質皿・釜などの日常雑器類が主体で、青・白磁も若干見られる。中世以前では6～8世紀の須恵器類の混入が目立っている。その時期の遺構としては先に説明した土坑195や198が挙げられる。また弥生土器(121)や形象埴輪の破片と思われるもの(392)も認められる。さらに弥生時代の尖基式石鑿(284)をはじめ不定型な刃器の破片(210～212)、石槍片(209)もある。石器はいずれもサヌカイト製である。漁具では蛸壺や上鍤に中世以前のものがわずかながらみられ、海浜部の生活環境は古代以来変わりなかったようである。真蛸壺には土坑66で出土している張りのある胴部に短く外反する口縁部がつくもの(74～78・339～341)と、縦長の胴部に斜め上にのびる口縁部がつくもの(337・338)がみられ、口径にも大小がある。飯蛸壺は土師質・須恵質両方がみられ、古墳時代後期以降の釣鐘形が多いが、弥生時代から古墳時代前期とされるコップ形で有孔のもの(181)が1点出土している。土鍤は土師質がほとんどで、1点瓦質のもの(345)がある。管状の大型品(190)や有孔のもの(191)、有溝のもの(342)がわずかに認められるが、大半は中世以降のものである。一部は表土の耕土直下で出土したものもある(398～409)。

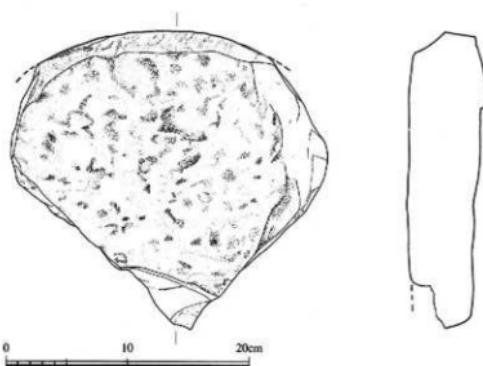
地山の構成上と地形の変換線(TP2.5m)を境にⅠ区とⅡ区に大別して示した包含層の内容を比べてみると、南西部、つまり山手にあたるⅡ区に須恵器の出土が目立つ。その一方で中世遺物の内容は似たようなものである。このことは山手の山間部から海浜部に向かって開発が進んできた結果によるものだろうか。

表土・擾乱土出土の遺物（第32図）

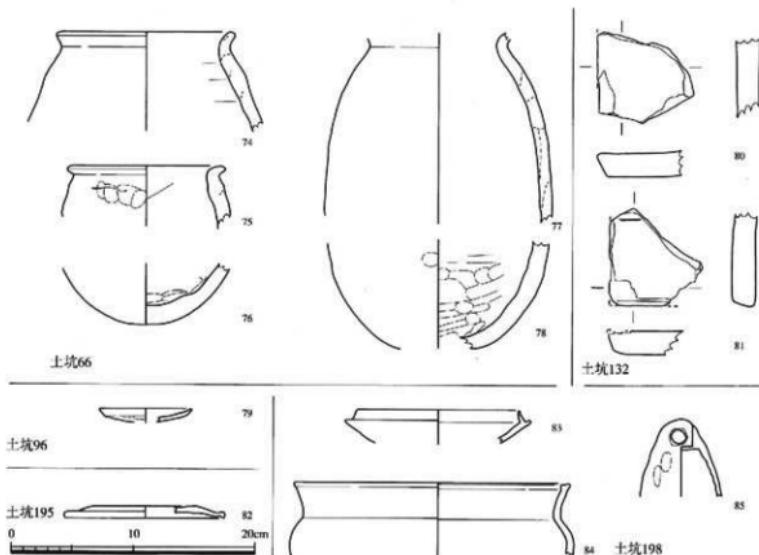
旧住宅棟とその埋設管などによって破壊擾乱はかなりの部分に及んでいた。機械で掘削する表土中からも遺物の出土が目立ち、埋設管部分に至っては包含層や遺構の擾乱によって遊離した遺物が回収された。図上復原できるものは必ずしも多くはないが、前記の包含層の内容を補う遺物であり、掲載することとした。

第5章　まとめ（第33・34図）

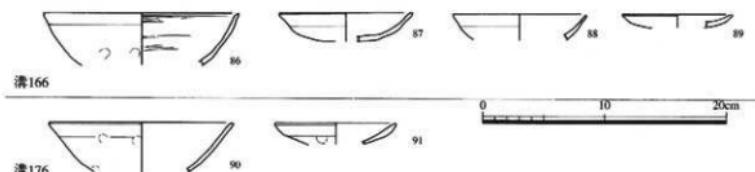
今回の調査地点は春木川と人津川の間の東西700mの幅をもって南東から北西にのびる段丘面の春木川右岸寄りである。同じ段丘上の大津川寄りには旧忠岡村が位置する。大阪湾に流れ込む河川間の段丘の開発が最も海に近づく地点で、浜街道である紀州街道はちょうどその個所を北東から南西へ横断する形をとる。



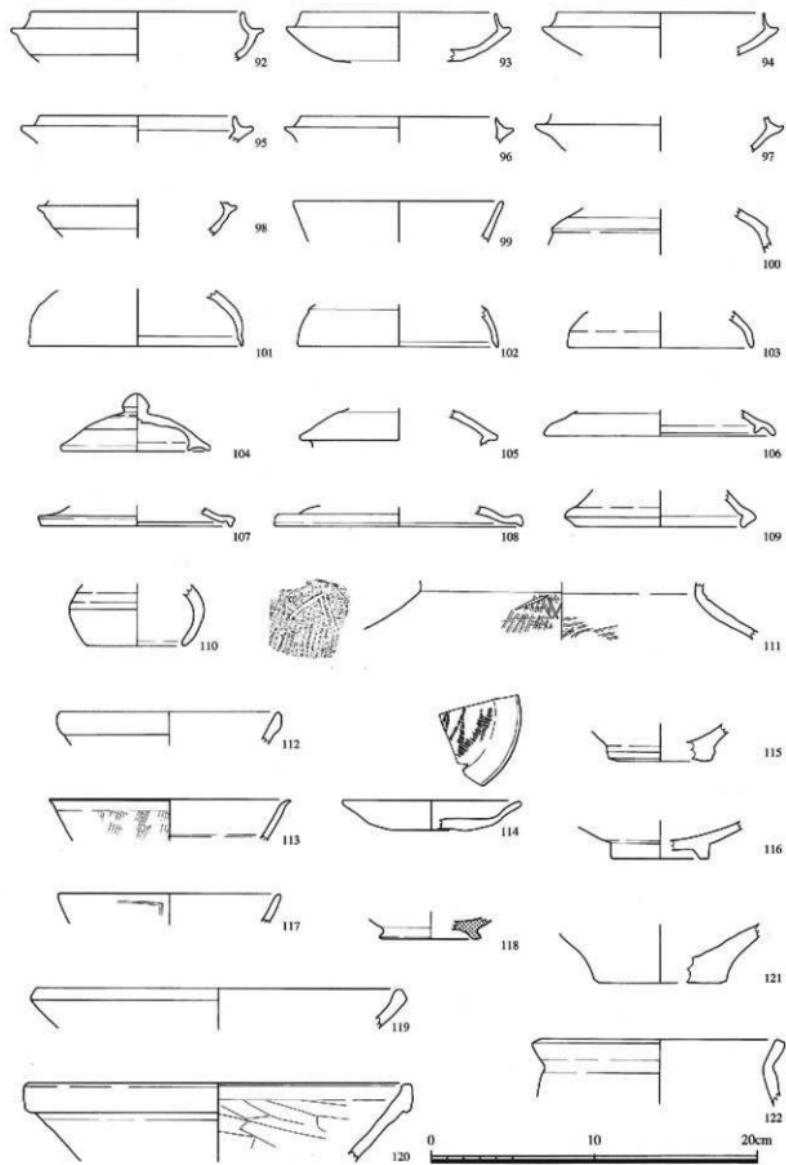
第21図 土坑3 出土板石図



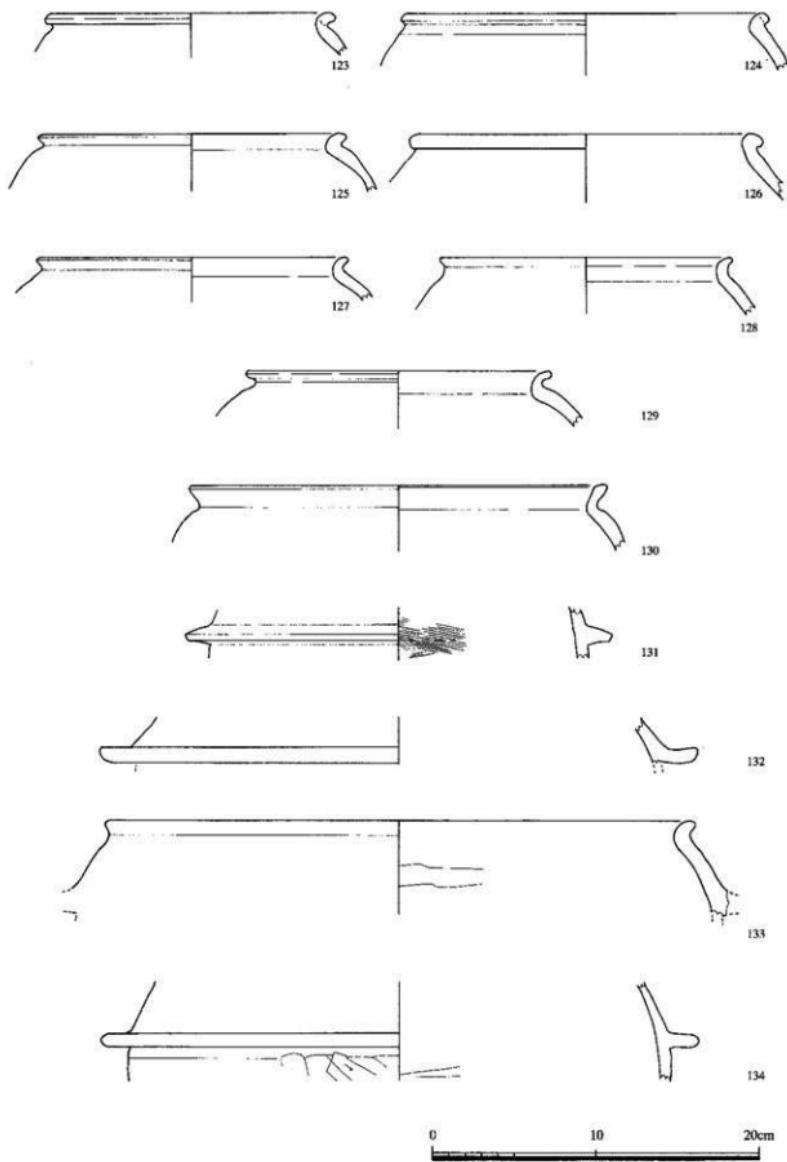
第22図 土坑出土遺物図



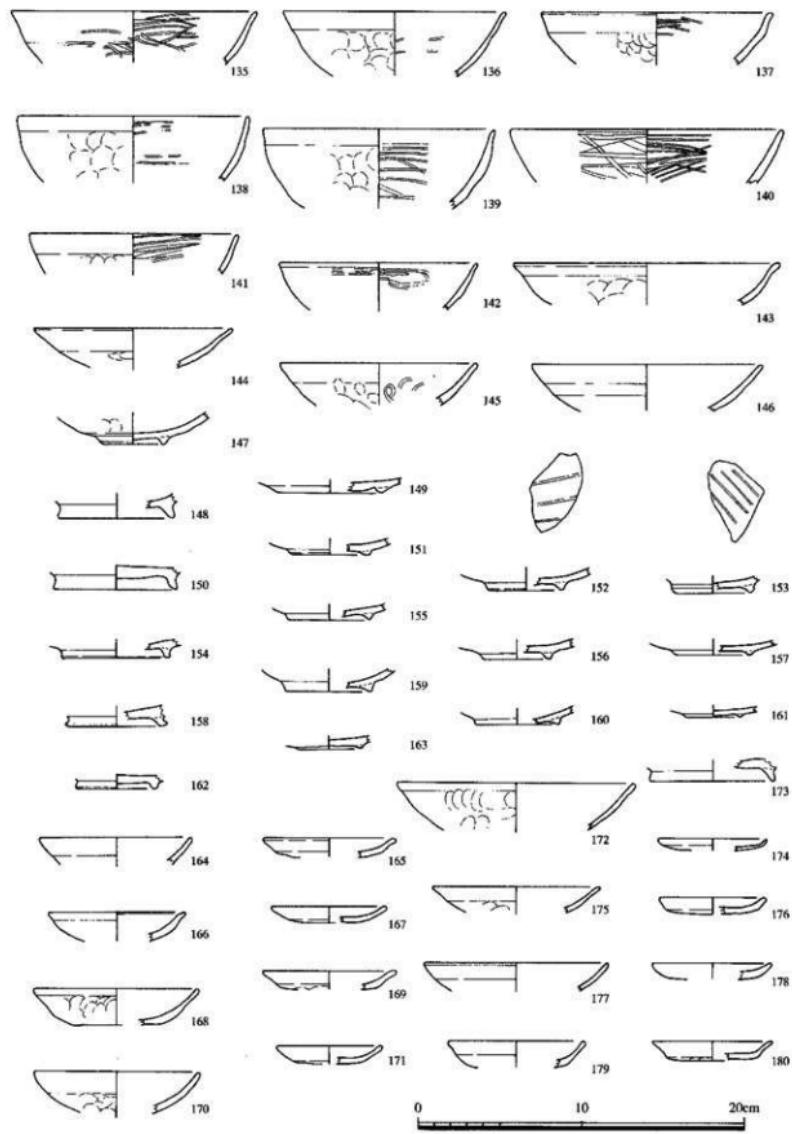
第23図 溝出土遺物図



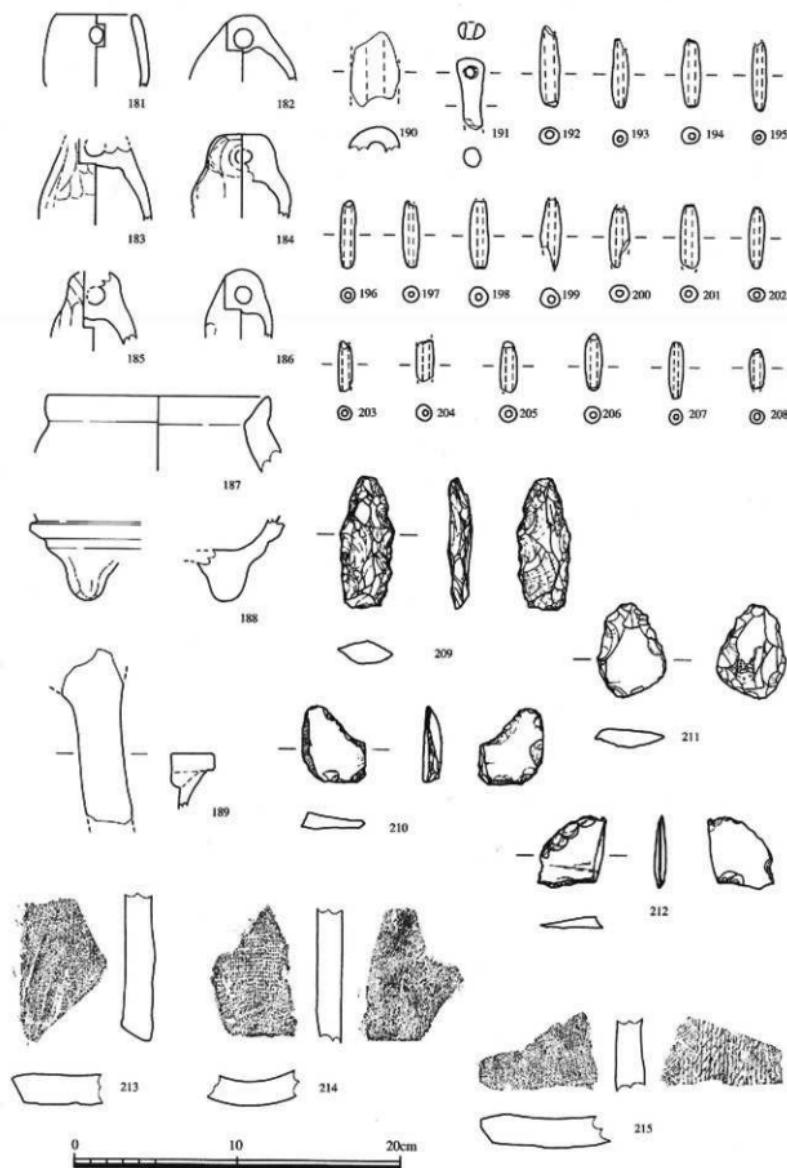
第24図 I区包含層出土遺物図(1)



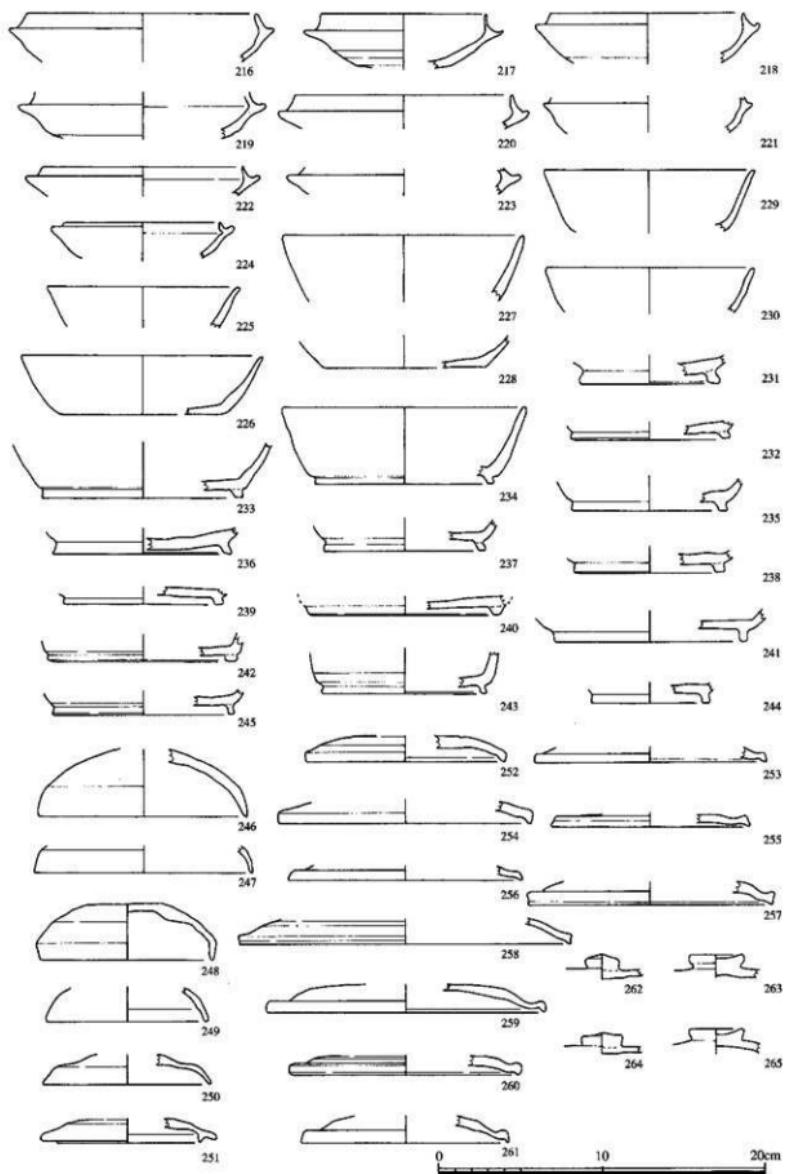
第25図 I区包含層出土遺物図(2)



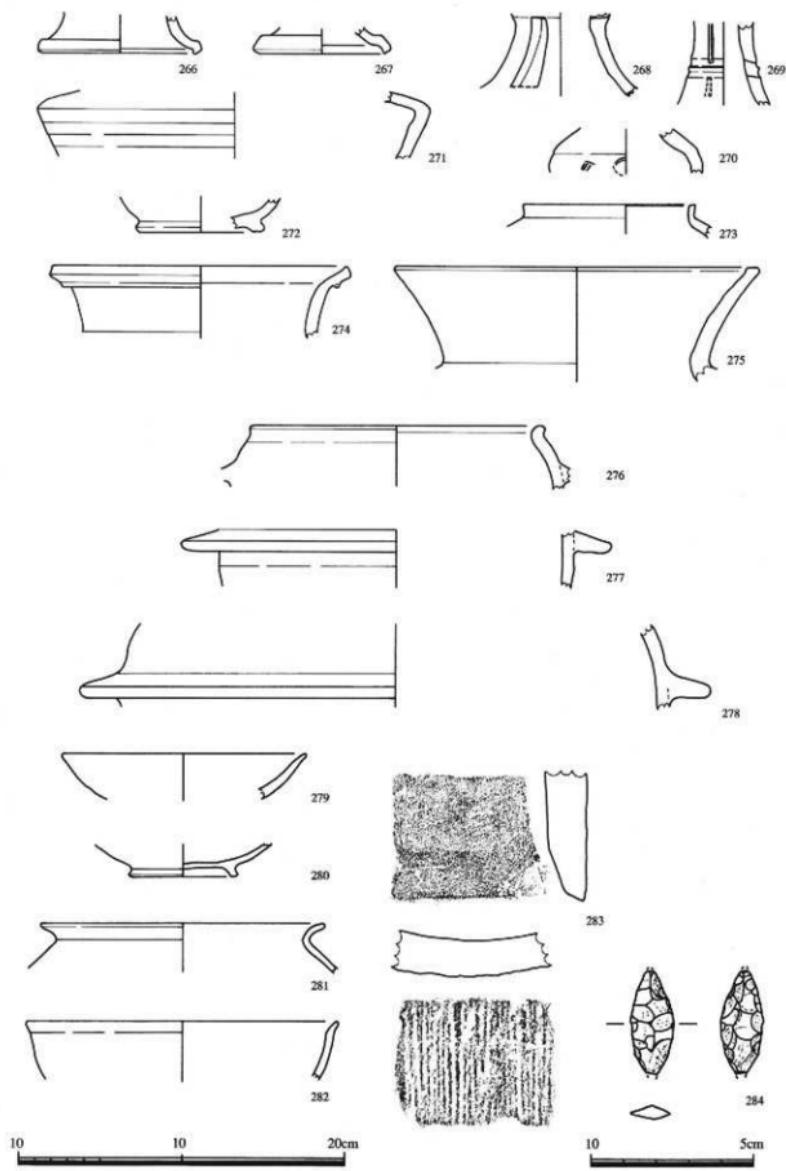
第26図 I区包含層出土遺物図 (3)



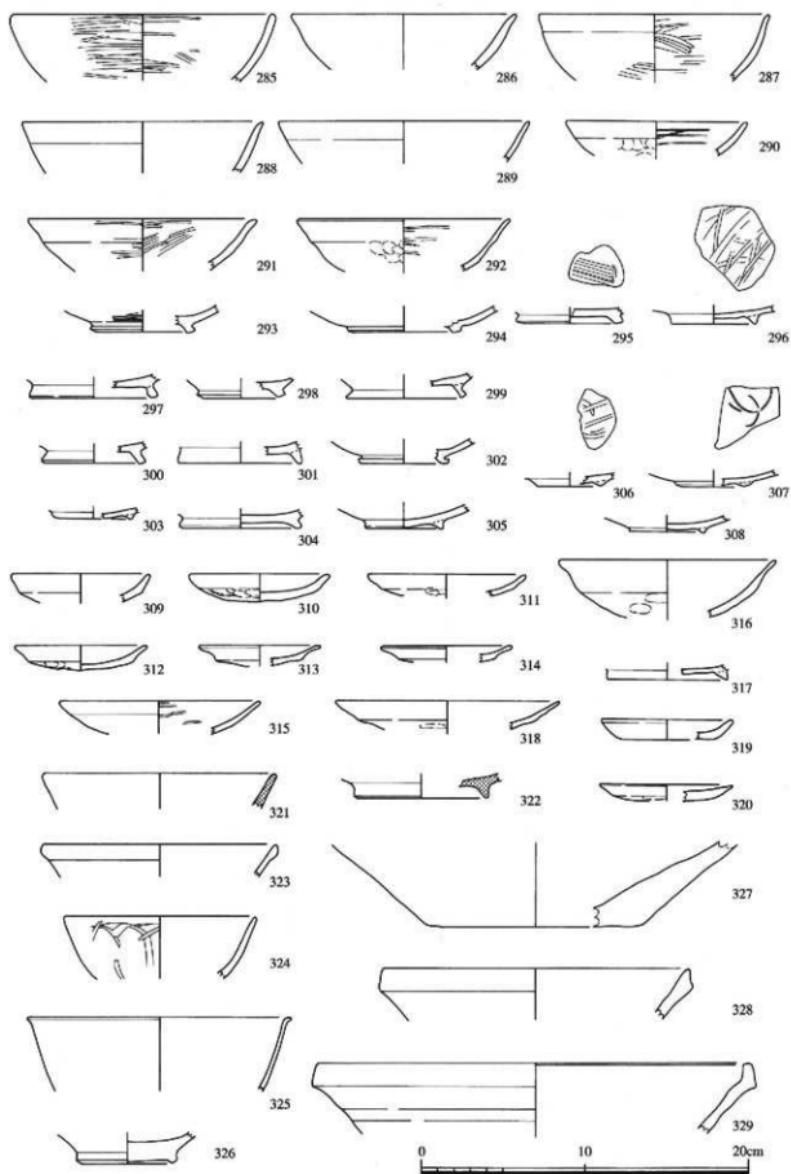
第27図 I区包含層出土遺物図(4)



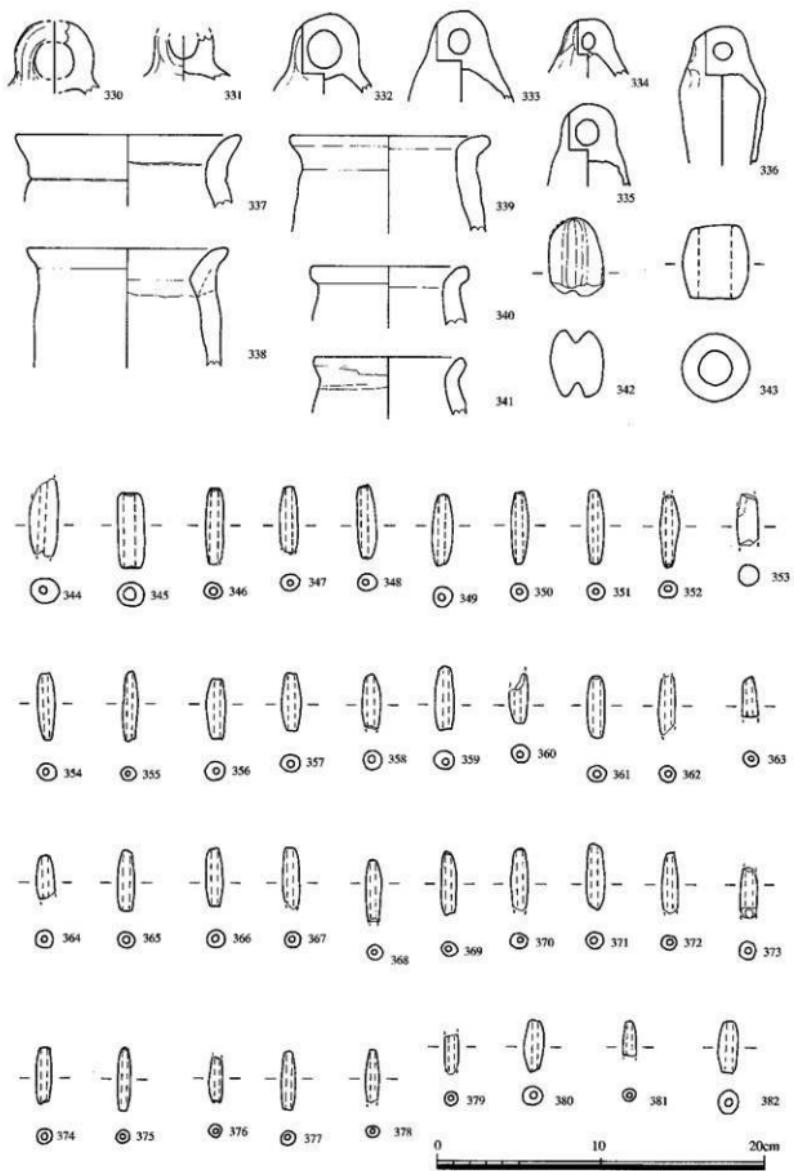
第28図 II区包含層出土遺物図(1)



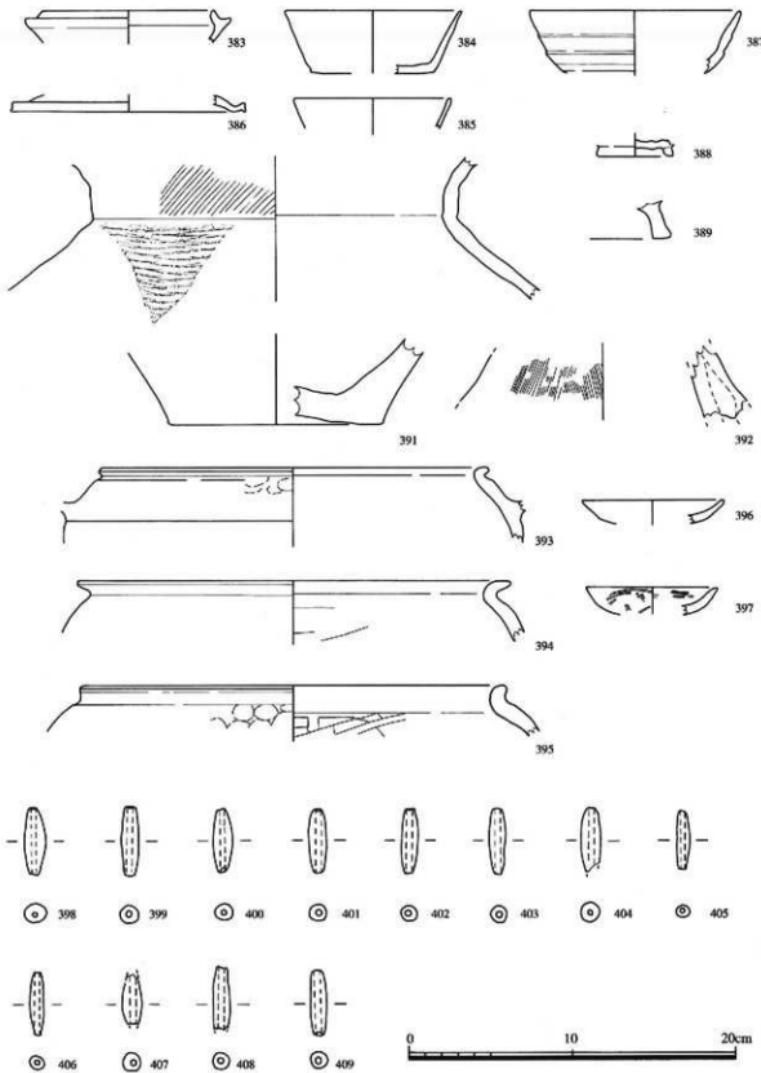
第29図 II区包含層出土遺物図 (2)



第30図 II区包含層出土遺物図 (3)



第31図 II区包含層出土遺物図(4)



第32図 II区表土搅乱土出土遺物図

土器

掲図番号	器種	出土個所	法量(cm)	特徴その他		時期
				口径	器高	
1	黒色土器碗	ビット12	16.6残高9.9	(外) 口縁部ヨコナタ、体部ユビオサエ (内) ナデ、ヘラミガキ	内風	12世紀
2	黑色土器碗	ビット12	13.2 残高4.1	(外) 口縁部ヨコナタ、体部ユビオサエ (内) ナデ、ヘラミガキ、内風	内風	12世紀
4	瓦器碗	ビット43	16.0 残高4.8	(外) 口縁部ヨコナタ、体部ユビオサエ (内) ナデ、内底部凹凸不規則	外縁ユビオサエのまま、尾上Ⅲ-3	13世紀前半
6	土器盤	ビット46	9.5 残高2.0	(外) 口縁部ヨコナタ(1段ナデ) (内) ナデ	丸底から口縁部が屈曲して外上方にひかる。	13世紀
7	土器盤	ビット48	9.8 残高1.9	(外) 口縁部ヨコナタ (内) ナデ	口縁端部やや外側しながらひらく。	14世紀
8	土器盤	ビット48	15.0 残高2.0	(外) 口縁部ヨコナタ (内) ナデ	中腹	
9	土器盤	ビット65	8.0 残高1.1	(外) ヨコナタ、口縁部ヨコナタ (内) ナデ	口縁部水平近く屈曲する「て」の字型	12世紀後半
10	土器盤	ビット71	14.8 残高3.6	(外) 口縁部ヨコナタ、底部ユビオサエ (内) ナデ	目	11世紀末~12世紀前半
11	瓦器碗	ビット73	14.6 残高5.5	(外) 口縁部ヨコナタ、体部ユビオサエ (内) ナデ、ヘラミガキ	内外底を溝に分割してヘラミガキする。尾上編第1-3-1-1	11世紀末~12世紀前半
12	瓦器盤全体	ビット75	11.0	(外) 平行タヌキ (内) ナデ	斜上縁部み上げ、ユビオサエ残る	
13	黒色土器碗	ビット74	15.2 残高3.5	(外) 口縁部ヨコナタ、体部ユビオサエ (内) ヘラミガキ(内) ナデ、ヘラミガキ	内風	12世紀
14	土器盤	ビット74	10.0 残高1.05	(外) 口縁部ヨコナタ、底部ユビオサエ (内) ナデ	内風	13世紀
15	土器盤	ビット75	8.4 残高1.7	(外) 口縁部ヨコナタ、底部ユビオサエ (内) ナデ	内風	14世紀前半
16	土器盤	ビット75	8.7 残高1.5	(外) 口縁部ヨコナタ(1段ナデ) (内) ナデ	内風	14世紀前半
17	土器盤	ビット77	9.2 残高1.3	(外) 口縁部ヨコナタ、底部ユビオサエ (内) ナデ	内風	13世紀
18	土器盤	ビット77	10.6 残高1.7	(外) 口縁部ヨコナタ、底部ユビオサエ (内) ナデ	内風	13世紀
19	土器盤側面	ビット94	—	(外) 口縁部ヨコナタ (内) ナデ	中腹	
20	瓦器盤	ビット94	—	(外) 口縁部ヨコナタ (内) ナデ	中腹	
21	土器盤	ビット100	8.9 残高1.5	(外) 口縁部ヨコナタ、底部ユビオサエ (内) ナデ	内風	13世紀
22	瓦器盤	ビット103	16.0 残高1.6	(外) 口縁部ヨコナタ (内) ナデ	内風に分割して穂かいヘラミガキ。内腹にヘラミガキ。	12世紀
24	瓦器盤	ビット171	15.4 残高4.2	(外) 口縁部ヨコナタ その他の特徴不明	内風込みで丸いセンターフロウ。尾上Ⅱ-1~3	13世紀後半
25	瓦器盤	ビット171	15.6 残4.4	(外) 口縁部ヨコナタ その他の特徴不明	体部円筒結合部あり。高く立てる三脚高台。尾上Ⅱ-3~4	11世紀末~12世紀中
26	瓦器盤底部	ビット171	15.0 残高4.0	(外) 高内ヨコナタ、底部ナデ (内) ナデ	安定した踏ん張る高台。尾上Ⅱ-2~3	13世紀中
27	瓦器盤	ビット172	15.0 残高4.2	調整不明		13世紀代
28	瓦器盤	ビット172	14.0 残高5.2	(外) 口縁部ヨコナタ、体部ユビオサエ	体部外周ユビオサエのまま。尾上Ⅲ-3~N/2	13世紀前半~中
29	瓦器盤	ビット172	13.0 残高4.5	調整不明		13世紀代
30	瓦器皿底部	ビット172	10.0 残高1.0	(外) 高内ヨコナタ、底部ナデ (内) ナデ	低いふんばる高台。尾上Ⅱ	12世紀後半~13世紀前半
31	土器盤側面	ビット172	9.6 残高1.6	(外) ナデ (内) ナデ		12世紀代
32	瓦器盤	舟戸2	16.3 残5.9	(外) 口縁部ヨコナタ、体部ユビオサエ (内) ナデ	内外面を縦に分割してヘラミガキする。横く立てる高台。尾上Ⅲ-1~1	11世紀末~12世紀前半
33	瓦器盤	舟戸2	15.3 残5.6	(外) 口縁部ヨコナタ、体部ユビオサエ (内) ナデ	内外面を縦にヘラミガキし、分断性強。丸い孔跡の平行ミガキ。鍛ん値も高台。尾上Ⅲ-1~B/1	11世紀末~12世紀前半
34	瓦器盤	舟戸2第1-3番	14.5 残5.25	調整不明	尾上Ⅲ-1~3	12世紀前半~最半
35	瓦器盤	舟2-3秋土屋	16.0 残高5.0	(外) 口縁部ヨコナタ、体部ユビオサエ (内) ナデ	内外面を縦にヘラミガキするが分割性不明。尾上Ⅲ-1~B/1	11世紀末~12世紀前半
36	瓦器盤	舟2-2	15.3 残高5.25	(外) 口縁部ヨコナタ、体部ユビオサエ (内) ナデ	内外面を縦に分割してヘラミガキ。尾上Ⅲ-1~B/1	11世紀末~12世紀前半
37	黒色土器碗	舟2-2	—	(外) 体部ヨコサエ、底部ナデ (内) ナデ	内外面を縦にヘラミガキ。尾上Ⅲ-1~B/1	11世紀末~12世紀前半
38	瓦器皿底部	舟2-2	—	(外) 歪曲ナデ (内) ナデ	歪込みにヘラミガキ亂方向に密に並ねる。低い高台。尾上Ⅱ-2~3	12世紀中
39	瓦器盤	舟2-2第1-2番	13.2 残高4.2	(外) 口縁部ヨコナタ、体部ユビオサエ (内) ナデ	内外面に低いヘラミガキ。尾上Ⅱ-2~3	12世紀中
40	土器盤	舟2-2	14.4 残6.6	(外) 口縁部ヨコナタ、体部ユビオサエ (内) ナデ		11世紀末~12世紀前半
41	土器盤	舟2-2	15.6 残4.5	(外) 口縁部ヨコナタ、体部ユビオサエ (内) ナデ		11世紀末~12世紀前半
42	土器盤	舟2-2	9.7 残高1.2	(外) 口縁部ヨコナタ、底部ユビオサエ (内) ナデ		13世紀
43	土器盤	舟2-2	8.8 残2.4	(外) 口縁部ヨコナタ、底部ユビオサエ (内) ナデ		13世紀
44	土器盤	舟2-2第1-2番	9.0 残高1.25	(外) 口縁部ヨコナタ、底部ユビオサエ (内) ナデ		13世紀
46	瓦器盤底部	舟2-2	底注残高 15.0 10.90	(外) 平行タヌキ、粗いナデ (内) ナデ、直線軸脚付台	中腹	

47	直面露眞門脚部	井戸2	23.2	(外) 口縁部ヨコナテ、体部ユビオサエ (内) ナダ	端面上下に基盤 直面にヘラミガキするが、外側の分割性は不明確。内形の直角。見込みに複雑な平行ミガキ。尾上I-3-I-3	12世紀初
48	瓦面部	井戸123	16.0 5.9	(外) 口縁部ヨコナテ、体部ユビオサエ (内) ナダ	内面直角のヘラミガキする。ふんはる筋力。尾上I-3-I-3	12世紀初
49	瓦面部	井戸123	15.8 5.4	(外) 口縁部ヨコナテ、体部ユビオサエ (内) ナダ	内面直角のヘラミガキする。ふんはる筋力。尾上I-3-I-3	12世紀初
50	瓦面部	井戸123第1~4層	15.4 5.6	(外) 口縁部ヨコナテ、体部ユビオサエ (内) ナダ	内面直角のヘラミガキ、分割性残す。尾上I-3-I-1	12世紀初
51	瓦面部	井戸123第1~4層	15.8 5.6 4.5	(外) 口縁部ヨコナテ、体部ユビオサエ (内) ナダ	内面直角のヘラミガキで級間目立ち、外側にユビオサエ筋、外側上半ヘラミガキ。尾上I-3-I-1	12世紀初
52	瓦面部	井戸123第1~4層	14.4 5.6 4.25	(外) 口縁部ヨコナテ、体部ユビオサエ (内) ナダ	内面直角のヘラミガキで級間目立ち、外側にユビオサエ筋。尾上I-3-I-1	12世紀初
53	瓦面部底層	井戸123		(外) ナダ	見込みと体部との凹凸つづき、瓦方向にヘラミガキを密に織むる。安定した筋みある直角。尾上I-3-I-1	12世紀初
54	瓦面部底層	井戸123		(外) ナダ	見込みに瓦方向にヘラミガキを密に織むる。筋みは太く丸ん張る。尾上I-3-I-1	12世紀初
55	瓦面部底層	井戸123第1~4層		(外) ナダ (内) ナダ	見込みに瓦方向にヘラミガキを密に織むる。尾上I-3-I-1	12世紀初
56	瓦面部底層	井戸123第1~4層		(外) ナダ 調査不明	古新瓦。尾上I-3-I-1	11世紀末~12世紀初
57	瓦面部底層	井戸123第1~4層		調査不明	安定した直角。尾上I-3-I-1	12世紀
58	瓦面部底層	井戸123第1~4層		調査不明	安定した直い高台。尾上I-3-I-1	12世紀
59	瓦面部底層	井戸123第1~4層		(外) 体部ユビオサエ+ミガキ (内) ナダ	見込み式ヘラミガキを平行に密に織むる。走らした筋み。尾上I-3-I-3	11世紀末~12世紀
60	瓦面部底層	井戸123第1~4層		式部瓦底層	古白石瓦に白土砂利底層	12世紀
61	瓦面部	井戸123第17層	15.7 5.5	(外) 口縁部ヨコナテ、体部ユビオサエ (内) ナダ	内面直角の直角にヘラミガキするが分割性不明確。見込みに複雑な平行ミガキ。尾上I-3-I-1	11世紀末~12世紀前半
62	瓦面部	井戸123	残高4.1	体部スピオラニ	内面直角の直角にヘラミガキするが分割性不明確。尾上I-3-I-1	11世紀末~12世紀前半
63	瓦面部底層	井戸123		(外) ナダ (内) ナダ	高く安定した厚みのある直角。	12世紀前半
64	瓦面部底層	井戸123		(外) ナダ (内) ナダ	安定した高い厚みのある直角。	12世紀前半
65	瓦面部底層	井戸123		(外) ナダ (内) ナダ	三角高台。	12世紀前半
66	瓦面部	井戸123			安定した躍ん張る厚みのある直角。	12世紀前半
71	土御番組	井戸123	10.0 残高1.5	(外) 口縁部ヨコナテ、瓦部ユビオサエ (内) ヨコナダ、ナダ	口縁部直木平近付曲す「て」の字手形の直角。	12世紀後半
72	土御番組	井戸123	9.5 残高1.4	(外) 口縁部ヨコナテ、瓦部ユビオサエ (内) ヨコナダ、ナダ	口縁部直木平近付曲す「て」の字手形の直角。	12世紀後半
73	土御番組	井戸123	12.7 残高0.0	(外) 口縁部ヨコナテ、体部ヘラケタリ (内) ヨコナダ、ナダ	側面のヨコナダ強く、外反する口縁部直木をなす。内面に直角仕仕。	11世紀?
79	土御番組	上塙96	7.7 残高1.2	(外) 口縁部ヨコナテ、瓦部ユビオサエ (内) ヨコナダ、ナダ	水平に近い大井深、兩面下方へ彎曲、段段をなす。階級II-3。	12世紀
82	直面露脊筋	上塙195	13.0 残高0.9	(外) 同軸ナダ (内) 同軸ナダ	横く内側して立ち上がる口縁端部。陶色II-3。	8世紀中一後半
83	直面露脊筋	上塙198	16.0 残高2.7	(外) 同軸ナダ (内) 同軸ナダ	斜めに織むく筋み。	8世紀末
84	直面露脊筋	上塙198	21.2 残高6.0	(外) 同軸ナダ (内) 同軸ナダ	斜めに織むく筋み。	7世紀末~8世紀初
86	瓦面部	窓166	15.8 残高4.5	(外) 口縁部ヨコナテ、体部ユビオサエ (内) ナダ	外側にユビオサエのまま。底上I-3	12世紀前半
87	土御番組	窓166	11.0 残高19.5	(外) 口縁部ヨコナテ、底部ユビヒチテ (内) ヨコナダ、ナダ	外側上半部ミガキ、以下ユビオサエのままで。底上I-3	中唐
88	瓦面部	窓166	11.0 残高2.3	(外) 口縁部ヨコナテ、底部調整不明 (内) ヨコナダ、瓦部調整不明	丸みのある底部から外上方にのびるU字形筋。筋幅がよく動かす。	11世紀
89	土御番組	窓166	9.0 残高1.1	(外) ヨコナダ (内) ヨコナダ	丸みのある底部から海くつまみあけるU字形筋。	中唐
90	瓦面部	窓176	10.0 残高4.1	(外) 口縁部ヨコナテ、体部ユビオサエ (内) 同軸ナダ	外側上半部弱いミガキ、体部ユビオサエのままで。底上I-3	12世紀前半
91	土御番組	窓176	9.0 残高1.8	(外) 口縁部ヨコナテ、底部ユビヒチテ (内) ヨコナダ、ナダ	口縁端部は下記で記述する。	11世紀
92	直面露脊筋・身管	官吉原7区	11.8 残高3.0	(外) 口縁部ヨコナダ、底部調整不器 (内) 同軸ナダ	立ち上がりよく内側し、底部よい。陶色II-3。	6世紀中~後半
93	直面露脊筋・身管	官吉原2区	11.7 残高3.0	(外) 口縁部ヨコナダ、底部調整不器 (内) 同軸ナダ	立ち上がりよく内側する。陶色II-3。	6世紀末
94	直面露脊筋・身管	官吉原4区	12.4 残高2.8	(外) 同軸ナダ (内) 同軸ナダ	立ち上がりよく内側する。陶色II-3。	6世紀末
95	直面露脊筋	官吉原4区	11.8 残高1.6	(外) 同軸ナダ (内) 同軸ナダ	立ち上がりよく内側する。陶色II-3。	6世紀末
96	直面露脊筋	官吉原4区	11.8 残高1.6	(外) 同軸ナダ (内) 同軸ナダ	立ち上がりよく内側する。陶色II-3。	6世紀末
97	直面露脊筋	官吉原7区	残高2.2	(外) 同軸ナダ (内) 同軸ナダ	立ち上がりよく内側する。陶色II-3-1。	6世紀中~末
98	直面露脊筋	官吉原4区	残高2.2	(外) 同軸ナダ、底部調整タグリ (内) 同軸ナダ	立ち上がりよく内側する。陶色II-3-1。	6世紀中~末
99	直面露脊筋	官吉原4区	12.6 残高2.5	(外) 同軸ナダ (内) 同軸ナダ	歩るやかに外にするL字端部。陶色IV。	7世紀末~8世紀初
100	直面露脊筋	官吉原4区	残高2.8	(外) 大井深と直角ケツリ、L字端部調整ナタ (内) 同軸ナダ	大井深とL字端部を界する棒は細く長い。陶色II-4-5。	5世紀末~6世紀初
101	直面露脊筋	官吉原4区	12.8 残高3.4	(外) 同軸ナダ (内) 同軸ナダ	大井深とL字端部を界する棒の舌苔。L字端部内側に内折する段。陶色II-3。	7世紀後半

102	酒泉郡柳原	包吉澤6区	12.0 無高2.5	(外) 同軸ナガ (内) 同軸ナガ	尖端部と口縁部を有する錐の形鉄化。口 6世紀中
103	酒泉郡柳原	包吉澤11区	11.5 無高2.5	(外) 同軸ナガ (内) 同軸ナガ	尖端部と口縁部を有する錐見られず。口 6世紀前半
104	酒泉郡酒	包吉澤4区	8.5 無高2.5	(外) つまみ同軸ナガ、大井部ヘラケス リ。口縁部切欠きナガ (内) 同軸ナガ・一定方向ナガ	尖端部と口縁部を有する段なく丸く終わる。口 6世紀前半
105	酒泉郡酒	包吉澤7区	残高2.2	(外) つまみ同軸ナガ、大井部ヘラケス リ、U字縫合同軸ナガ (内) 同軸ナガ	内面のかえり尖く口縁部より下方に 7世紀前半
106	酒泉郡酒	包吉澤6区	13.8 無高2.5	(外) 同軸ナガ (内) 同軸ナガ	内面に短いかえりがつく。口 7世紀中
107	酒泉郡酒	包吉澤6区	11.4 無高1.2	(外) 同軸ナガ (内) 同軸ナガ	口縁部前方へ屈曲させ段をなす。南面 8世紀後半
108	酒泉郡酒	包吉澤10区	15.6 無高1.2	(外) 同軸ナガ (内) 同軸ナガ	口縁部より下方へ屈曲させ段をなす。南面 8世紀後半
109	酒泉郡高林御所	包吉澤3区	残高2.3	(外) 同軸ナガ (内) 同軸ナガ	端部下方内側へ屈曲させる。南北 一 6世紀前~7世紀後半
110	酒泉郡酒	包吉澤7区	残高3.4	(外) 同軸ナガ (内) 同軸ナガ	体盤上部にヘラ記号。
111	酒泉郡酒	包吉澤7区	残高4.0	(外) 同軸ナガ (内) 同軸ナガ	體盤下部にヘラ記号。
112	白堀町口跡	包吉澤11区	13.5 無高2.0	玉縁部	腹門南系白堀町口1aタイプ。 12世紀前半
113	白堀町口跡	包吉澤6区	14.2 無高2.5	口縁部を薄く引き出す扁平化。口縁部 既施錆。外周部絞り。	13世紀第一四半期
114	青龍山	包吉澤6区	10.2 無高1.5	鋸歯部と外周部に切欠き、側面をジグザグ文 様。企施錆跡。縫合記。	12世紀中~14世紀中
115	白堀町口跡	包吉澤9区	残高2.3	底部外周部に施錆。	13世紀1四半期
116	青龍後述	包吉澤6区	残高2.4	鉢土記。	中世
117	青龍口跡	包吉澤4区	13.5 無高1.8	口縁部外面両面文。	鹿児島青龍絵画文書。C三別。 15世紀中
118	黒色十唇模造	包吉澤7区	残高11.4	(外) リコナガ (内) 高型アヌ	鉢底。
119	復惣草十律	包吉澤2区	22.0 無高2.4	(外) 同軸ナガ (内) 同軸ナガ	口縁部端がほぼ内側に終わる小型鉢 12世紀中頃
120	復惣質鉢	包吉澤6区	22.8 無高2.4	(外) 口縁部リコナガ、体盤切軸ナガ、 口縁部端が上に張り出する小型鉢 (内) ナガ	口縁部端が上に張り出する小型鉢 14世紀
121	秀牛・上総守	包吉澤6区	残高7.2	鉢底を直角にむしり内側黒色、断面底白 色の二層底。	井生
122	上総守	包吉澤6区	14.0 無高4.5	(外) リコナガ	口縁部「く」野路に回曲する縫合 7世紀?
123	上総守羽田口跡	包吉澤6区	19.0 無高2.6	(外) リコナガ (内) ユコナガ	口縁部端が直角に引ける羽茎 14世紀後半
124	上総守羽田口跡	包吉澤6区	21.6 無高2.5	(外) 口縁部リコナガ。体盤ヒビオナエ (内) ユコナガ	口縁部端が直角に引ける羽茎 14世紀中
125	上総守羽田口跡	包吉澤6区	18.0 無高2.6	(外) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ (内) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ	口縁部端が直角に引ける羽茎 14世紀後半
126	上総守羽田口跡	包吉澤10区	20.0 無高4.0	(外) 口縁部リコナガ、体盤ナダ (内) 口縁部リコナガ、体盤ナダ	口縁部端が直角に引ける羽茎 14世紀後半
127	上総守羽田口跡	包吉澤7区	18.4 無高2.7	(外) 口縁部リコナガ	口縁部端が直角に引ける羽茎 14世紀後半
128	上総守羽田口跡	包吉澤6区	17.2 無高3.5	(外) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ (内) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ	口縁部端が直角に引ける羽茎 14世紀後半
129	上総守羽田口跡	包吉澤6区	18.0 無高3.4	(外) 口縁部リコナガ	口縁部端が直角に引ける羽茎 14世紀後半
130	上総守羽田口跡	包吉澤6区	25.0 無高4.1	(外) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ (内) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ	口縁部端が直角に引ける羽茎 14世紀後半
131	上総守羽田口跡	包吉澤7区	鉢底高3.1	(外) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ (内) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ	穂長い水滴づく平底。 15世紀?
132	上総守羽田口跡	包吉澤7区	20.4	(外) ハメ	
133	上総守羽田口跡	包吉澤7区	30.0	(内) ナダ	内縫合する口縁部に水平の縫がつく 14世紀後半
134	上総守羽田口跡	包吉澤6区	33.0 無高5.8	(外) 口縁部ナダ、側部リコナガ、体盤ヒビオナエ (内) ハメ	内縫合部短く折り曲げる羽茎 14世紀後半
135	又添物	包吉澤9区	36.0	(外) ナダ	外縫合する口縁部に水平の縫がつく 13世紀前半
136	又添物	包吉澤9区	14.0 無高2.2	(外) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ 十ハメミガキ	外縫合部に粗いハメミガキ。外縫にユビオ サエ底。底上Ⅲ
137	又添物	包吉澤9区	13.5 無高4.0	(外) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ 十ハメミガキ	内縫合部に粗いハメミガキ。外縫にユビオ サエ底。底上Ⅲ
138	又添物	包吉澤7区	13.5 無高3.2	(外) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ 十ハメミガキ	内縫合部に粗いハメミガキ。外縫にユビオ サエ底。底上Ⅲ
139	又添物	包吉澤6区	14.0 無高4.0	(外) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ 十ハメミガキ	内縫合部に粗いハメミガキ。外縫にユビオ サエ底。底上Ⅲ
140	又添物	包吉澤6区	16.0 無高3.3	(外) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ ヘラミガキ (内) ナダ	内縫合部に粗いハメミガキ。厚みのある縫 13世紀前半
141	又添物	包吉澤2区	12.0 無高2.5	(外) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ (内) ナダ	内縫合部に粗いハメミガキ。外縫にユビオ サエ底。底上Ⅲ
142	又添物	包吉澤6区	12.0 無高2.8	(外) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ ヘラミガキ (内) ナダ	内縫合部に粗いハメミガキ。外縫にユビオ サエ底。底上Ⅲ
143	又添物	包吉澤6区	16.0 無高2.5	(外) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ (内) 断筋不明	内縫合部に粗いハメミガキ。外縫にユビオ サエ底のみ。底上Ⅲ
144	又添物	包吉澤6区	11.0 無高2.4	(外) 口縁部リコナガ、体盤ヒビオナエ (内) 断筋不明	内縫合部に粗いハメミガキ。底上Ⅲ-2

145	瓦部模	古谷層10区	11.4	残高2.6	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ユビオサエ (内) ナダ	外縁ユビオサエ、内面側に2カギ。尾上Ⅳ-2-3	13世紀後半
146	瓦部模	古谷層11区	15.8	残高2.85	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部網状不規 (内) ナダ	尾上Ⅱ-3	13世紀後半
147	瓦部模底部	古谷層10区	15.8	残高2.9	(外) ユビオサエ (内) ナダ+ヘラミガキ	三角高台。見込み平行ミガキ。尾上Ⅲ-3-1-2	13世紀中-13世紀後半
148	瓦部模底部	古谷層10区	15.8	残高1.5	(外) 略底部ヨコナゲ (内) ナダ+ヘラミガキ	底くぼみのある安定した高台。見込みに太く粗い平行ミガキ。尾上Ⅲ-3-1-2	12世紀後半-13世紀初半
149	瓦部模底部	古谷層10区	15.8	残高0.9	(外) 体部ユビオサエ、高台ナダ (内) ハリミガキ	退化した高台。尾上Ⅲ-3-1-2	13世紀中-13世紀後半
150	瓦部模底部	古谷層10区	15.8	残高1.4	(外) 略底部 (内) ナダ	厚みのある安定した踏み張る高台。尾上Ⅲ-3-1-2	12世紀後半-13世紀初半
151	瓦部模底部	古谷層10区	15.8	残高1.0	(外) ユビオサエ+ナダ (内) ナダ+ヘラミガキ	退化した高台。見込みに太く粗い平行ミガキ。尾上Ⅲ-3-1-2	13世紀中-13世紀後半
152	瓦部模底部	古谷層10区	15.8	残高0.9	(外) ユビオサエ+ナダ (内) ナダ	厚みのある踏み張る高台。尾上Ⅲ-3-1-2	13世紀中-13世紀後半
153	瓦部模底部	古谷層10区	15.8	残高0.4	(外) 略底部 (内) ナダ	一角高台。見込み細く細い平行ミガキ。尾上Ⅲ-3-1-2	13世紀中-13世紀後半
154	瓦部模底部	古谷層10区	15.8	残高1.1	(外) ナダ	比較的高い高台。尾上Ⅲ-3-1-2	12世紀後半-13世紀初半
155	瓦部模底部	古谷層6区	15.8	残高2.7	(外) 体部網状不規、底部ナダ (内) 略底部	低い三角高台。尾上Ⅲ-3-1-2	13世紀中-13世紀後半
156	瓦部模底部	古谷層5区	15.8	残高1.2	(外) ユビオサエ+ナダ (内) ナダ	低い逆三角高台。見込み細く細い平行ミガキ。尾上Ⅲ-3-1-2	13世紀中-13世紀後半
157	瓦部模底部	古谷層5区	15.8	残高0.9	(外) 略底部 (内) 略底部	退化した高台。見込み細く粗いライセンミガキ。尾上Ⅲ-3-1-2	13世紀中-13世紀後半
158	瓦部模底部	古谷層10区	15.8	残高1.5	(外) ナダ (内) 略底部 (内) 略底部	底くぼみのある丸みのある高台。尾上Ⅲ-3-1-2	12世紀後半-13世紀初半
159	瓦部模底部	古谷層6区	15.8	残高1.4	(外) 略底部 (内) 略底部不規、底部ナダ	厚みのある三角高台。尾上Ⅲ-3-1-2	13世紀中-13世紀後半
160	瓦部模底部	古谷層6区	15.8	残高1.1	(外) 略底部 (内) ヨコナゲ (内) ナダ	退化した高台。尾上Ⅲ-3-1-2	13世紀中-13世紀後半
161	瓦部模底部	古谷層6区	15.8	残高0.7	(外) 1級 (内) 略底部 (内) ナダ	細い柱が並ぶ左右の刃状の化した高台。見込み太く粗いミガキ。尾上Ⅲ-3-1-2	13世紀中-13世紀後半
162	瓦部模底部	古谷層6区	15.8	残高0.5	(外) 略底部ヨコナゲ、底部ナダ (内) 略底部	厚底の高台。見込み細く細い平行ミガキ。尾上Ⅲ-3-1-2	13世紀中-13世紀後半
163	瓦部模底部	古谷層6区	15.8	残高0.7	(外) 略底部 (内) ナダ	退化した高台。尾上Ⅲ-3-1-2	13世紀中-13世紀後半
164	瓦部模	古谷層6区	9.3	残高1.6	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ユビオサエ+ナダ (内) ナダ	中央	
165	瓦部模	古谷層7区	7.2	残高1.2	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ユビオサエ+ナダ (内) 略底部	厚い壁吹き口縁部外側。	13世紀
166	瓦部模	古谷層8区	8.2	残高1.75	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ユビオサエ+ナダ (内) 略底部不規	にのびる口縫跡。	13世紀
167	瓦部模	古谷層8区	6.6	残高1.0	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ユビオサエ+ナダ (内) 略底部不規	平底から口縫部を曲げて外上方にのびる口縫部で、溝を丸く納める。粗く太いミガキ。	13世紀後半
168	瓦部模	古谷層9区	10.0	残高2.2	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ユビオサエ+ナダ (内) 不規	体部外側ユビオサエで、高台付せず、退化した縫から頭への移行形態。	13世紀末-14世紀初
169	瓦部模	古谷層9区	8.0	残高1.1	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ユビオサエ+ナダ (内) 略底部	丸みのある底部との境に縫を残し外上方にのびる口縫部。	13世紀末-14世紀初
170	瓦部模	古谷層9区	9.8	残高2.5	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ユビオサエ+ナダ (内) 略底部	丸く納める。N-3-1-4	13世紀後半
171	瓦部模	古谷層9区	6.4	残高1.1	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ユビオサエ+ナダ (内) 略底部	体部外側ユビオサエで、高台付せず、退化した縫から頭への移行形態。N-4	13世紀末-14世紀初
172	瓦部模	古谷層9区	14.2	残高2.8	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ユビオサエ+ナダ (内) 略底部	丸く納める。N-3-1-4	13世紀後半
173	瓦部模底部	古谷層9区	7.4	残高1.5	(外) 高台ヨコナゲ、底部ナダ (内) ナダ	厚みのある丸みのある安定した踏み張る高台。尾上Ⅲ-3-1-2	12世紀後半-13世紀初半
174	土師器皿	古谷層7区	6.6	残高0.7	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ナダ (内) ナダ	厚底。	13世紀
175	土师器皿	古谷層7区	10.1	残高1.6	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ユビオサエ+ナダ (内) 略底部	厚底。	13世紀
176	土师器皿	古谷層7区	6.5	残高1.0	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ユビオサエ+ナダ (内) 略底部	体部外側ユビオサエ。退化した縫から頭への移行形態。N-4	13世紀
177	土师器皿	古谷層7区	11.1	残高1.7	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ユビオサエ+ナダ (内) 略底部	への移行形態。N-4	13世紀
178	土师器皿	古谷層10区	7.5		(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ナダ (内) ナダ	厚みのある器壁。	13世紀
179	土师器皿	古谷層10区	8.6	残高1.6	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ナダ (内) ナダ	厚みのある底部に横幅丸く終わる口縫部。	14世紀
180	土师器皿	古谷層10区	7.2	残高1.1	(外) 口縁部ヨコナゲ、底部ユビオサエ (内) ナダ	厚みのある底部から外反弧味に立ち上がる口縫部。	13世紀
181	瓦部模底部	古谷層9区				中既	
182	瓦部模底部	古谷層9区				中既	
216	瓦部模身舟	古谷層10区	14.0	残高2.95	(外) 回転ナダ (内) 回転ナダ	立ち上がり細く内側する。南邑Ⅲ-3-1-2	6世紀後半一本
217	瓦部模身舟	古谷層10区	10.0	残高3.3	(外) 口縁部横斜ナダ、体部回転ハケナリ (内) 回転ナダ	立ち上がり細く内側する。南邑Ⅲ-3-1-2	6世紀後半一本

218	須恵器舟身	古奈縄13~15 区	11.5 狹幅3.0	(外) 口縁部斜面ナ、体側回転ヘラケズリ (内) 回転ナダ	立ち上がり近く内側する。陶色Ⅱ~3 5	8世紀後半~末
219	須恵器舟身	古奈縄26区	15.0 狹幅2.9	(外) 口縁部斜面ナ、体側回転ヘラケズリ (内) 回転ナダ	立ち上がり近く内側する。陶色Ⅱ~3 5	8世紀末
220	須恵器舟身	古奈縄12区	13.0 狹幅2.1	(外) 口縁部斜面ナ (内) 回転ナダ	立ち上がり近く内側する。陶色Ⅱ~3 5	8世紀末
221	須恵器舟身	古奈縄14区	12.8 狹幅2.2	(外) 口縁部斜面ナ (内) 回転ナダ	立ち上がり近く内側する。陶色Ⅱ~3 5	8世紀末
222	須恵器舟身	古奈縄12区	12.2 狹幅1.8	(外) 口縁部斜面ナ (内) 回転ナダ	立ち上がり近く内側する。陶色Ⅱ~3 5	8世紀末
223	須恵器舟身	古奈縄25区	14.2 狹幅1.7	(外) 口縁部斜面ナ (内) 回転ナダ	立ち上がり近く内側する。陶色Ⅱ~3 5	8世紀後半~末
224	須恵器舟身	古奈縄18区	9.5 狹幅2.2	(外) 口縁部斜面ナ (内) 回転ナダ	口縁部端の立ち上がりの浜継続。陶色Ⅲ~4 E~6	7世紀初
225	須恵器舟身	古奈縄26区	11.6 狹幅2.5	(外) 口縁部斜面ナ (内) 回転ナダ	邊「ハ」の字形にゆるやかに外反する口 縁部。陶色Ⅱ~3	7世紀末~8世紀初
226	須恵器舟身	古奈縄23区	7.5 狹幅3.0	(外) 口縁部斜面ナ (内) 回転ナダ	外反する口縁部。陶色Ⅱ~3	8世紀中~後半
227	須恵器舟身	古奈縄 ?	14.4 狹幅4.1	(外) 口縁部斜面ナ (内) 回転ナダ	ゆるやかに外反する口縁部。陶色Ⅱ~3	7世紀末~8世紀末
228	須恵器舟身	古奈縄26区 底径9.6 狹幅1.9	底径9.6 狹幅1.9	(外) 体側回転ナ、底部ナダ	陶色Ⅱ~4	8世紀末
229	須恵器舟身	古奈縄19区	12.8 狹幅3.0	(外) 体側回転ナ (内) 回転ナダ	邊「ハ」の字形にゆるやかに外反する口 縁部。陶色Ⅱ~3	7世紀末~8世紀中
230	須恵器舟身	古奈縄19区	12.6 狹幅2.8	(外) 体側回転ナ (内) 回転ナダ	外反する口縁部。陶色Ⅱ~3~2	7世紀末~8世紀中
231	須恵器舟身	古奈縄18区 底径16.4 狹幅1.7	底径16.4 狹幅1.7	(外) 両側回転ナ、底部ナダ (内) ナダ	「ハ」の字形に高台がつく。陶色Ⅱ~3~2	8世紀初~後半
232	須恵器舟身	古奈縄26区 底径16.6 狹幅1.6	底径16.6 狹幅1.6	(外) 両側回転ナ (内) 回転ナダ	「ハ」の字形に高台がつく。陶色Ⅱ~3~2	8世紀初~後半
233	須恵器舟身	古奈縄15区 底径15.8 狹幅3.3	底径15.8 狹幅3.3	(外) 両側回転ナ、底部ナダ (内) 回転ナダ	「ハ」の字形に高台がつく。陶色Ⅱ~3~2	8世紀初~後半
234	須恵器舟身	古奈縄25区 底径14.4 狹幅4.7	底径14.4 狹幅4.7	(外) 回転ナダ (内) 回転ナダ	「ハ」の字形に高台がつく。陶色Ⅱ~3~2	8世紀初~後半
235	須恵器舟身	古奈縄23区 底径19.2 狹幅2.0	底径19.2 狹幅2.0	(外) 回転ナダ (内) 回転ナダ	「ハ」の字形に高台がつく。陶色Ⅱ~3~2	8世紀初~後半
236	須恵器舟身	古奈縄23区 底径18.1 狹幅1.6	底径18.1 狹幅1.6	(外) 回転ナダ (内) 回転ナダ	「ハ」の字形に高台がつく。陶色Ⅱ~3~2	8世紀初~後半
237	須恵器舟身	古奈縄20区 底径19.4 狹幅1.9	底径19.4 狹幅1.9	(外) 回転ナダ (内) 回転ナダ	「ハ」の字形に高台がつく。陶色Ⅱ~3~2	8世紀初~後半
238	須恵器舟身	古奈縄22区 底径19.0 狹幅1.3	底径19.0 狹幅1.3	(外) 回転ナダ (内) 回転ナダ	「ハ」の字形に高台がつく。陶色Ⅱ~3~2	8世紀初~後半
239	須恵器舟身	古奈縄25区 底径9.0 狹幅1.1	底径9.0 狹幅1.1	(外) 口縁部斜面ナ、底部ナダ (内) 回転ナダ	「ハ」の字形の高台外端面につく。陶色Ⅲ~4~2	8世紀初~後半
240	須恵器舟身	古奈縄17区 底径16.6 狹幅1.1	底径16.6 狹幅1.1	(外) 口縁部斜面ナ、底部ナダ (内) ナダ	「ハ」の字形の高台外端面につく。陶色Ⅲ~4~2	8世紀初~後半
241	須恵器舟身	古奈縄25区 底径16.2 狹幅1.0	底径16.2 狹幅1.0	(外) 回転ナダ (内) 回転ナダ	邊矢する高台外端面につく。陶色Ⅲ~4~2	8世紀初~後半
242	須恵器舟身	古奈縄26区 底径16.1 狹幅1.7	底径16.1 狹幅1.7	(外) 回転ナダ (内) 回転ナダ	邊矢する高台外端面につく。陶色Ⅲ~4~2	8世紀初~後半
243	須恵器舟身	古奈縄25区 底径19.9 狹幅3.5	底径19.9 狹幅3.5	(外) 体側回転ヘラケズリ、高台部斜面ナ (内) 回転ナダ	立矢する高台外端面につく。陶色Ⅲ~4~2	8世紀初~後半
244	須恵器舟身	古奈縄26区 底径7.0 狹幅0.8	底径7.0 狹幅0.8	(外) 同上ナダ (内) 回転ナダ	立矢する高台外端面につく。陶色Ⅲ~4~2	8世紀初~後半
245	須恵器舟身	古奈縄26区 底径16.6 狹幅1.6	底径16.6 狹幅1.6	(外) 同上ナダ (内) 回転ナダ	立矢する高台外端面につく。陶色Ⅲ~4~2	8世紀初~後半
246	須恵器舟身	古奈縄25区 底径12.6 狹幅1.6	底径12.6 狹幅1.6	(外) 大井部回転ヘラケズリ+回転ナダ (内) 回転ナダ	大井部からの縫は縦省略してほとんど消失。 口縁部の内側の内側する段は残がるう じて記述される。陶色Ⅱ~3~4	6世紀中~後 半
247	須恵器舟身	古奈縄18区 底径13.2 狹幅1.6	底径13.2 狹幅1.6	(外) 大井部回転ヘラケズリ+回転ナダ (内) 回転ナダ	口縁部の内側の内側する段は残がるう じて記述される。陶色Ⅱ~3~4	6世紀後半~末
248	須恵器舟身	古奈縄26区 底径10.4 狹幅3.5	底径10.4 狹幅3.5	(外) 大井部未調査+回転ヘラケズリ+回 転ナダ (内) 回転ナダ	大井部が丸みをもつ小型の器。陶色Ⅱ~6	7世紀初
249	須恵器舟身	古奈縄23区 底径9.8 狹幅2.1	底径9.8 狹幅2.1	(外) 回転ナダ (内) 回転ナダ	口縁部丸みをもつ。陶色Ⅲ~5~6	6世紀末~7世紀初
250	須恵器舟身	古奈縄12区 底径10.6 狹幅1.9	底径10.6 狹幅1.9	(外) 大井部回転ヘラケズリ+回転ナダ (内) 回転ナダ	口縁部の内側の内側する段はなくなり、 多く残る。陶色Ⅱ~5	6世紀末
251	須恵器舟身	古奈縄14区 底径8.5 狹幅1.7	底径8.5 狹幅1.7	(外) 大井部回転ヘラケズリ+回転ナダ (内) 回転ナダ	口縁部の内側のカーブは繊細よりも下方に のびる。	7世紀初~半
252	須恵器舟身	古奈縄14区 底径12.6 狹幅1.6	底径12.6 狹幅1.6	(外) 大井部ナダ+回転ナダ (内) 回転ナダ+ナダ	口縁部はゆるやかに内方へ回曲する。	8世紀初~中
253	須恵器舟身	古奈縄23区 底径9.3 狹幅0.9	底径9.3 狹幅0.9	(外) 回転ナダ (内) 回転ナダ	縫隙で調査して縫をなす。Ⅲ~3~4	8世紀初~末
254	須恵器舟身	古奈縄26区 底径15.5 狹幅1.5	底径15.5 狹幅1.5	(外) 回転ナダ (内) 回転ナダ	口縁部はゆるやかに内方へ回曲する。	8世紀初~中
255	須恵器舟身	古奈縄12区 底径12.0 狹幅0.7	底径12.0 狹幅0.7	(外) 大井部ナダ+回転ナダ (内) 回転ナダ	縫隙で調査して縫をなす。Ⅲ~3~4	8世紀初~末
256	須恵器舟身	古奈縄12区 底径14.0 狹幅0.8	底径14.0 狹幅0.8	(外) 回転ナダ (内) 回転ナダ	縫隙で調査して縫をなす。Ⅲ~3~4	8世紀初~末
257	須恵器舟身	古奈縄26区 底径14.4 狹幅1.6	底径14.4 狹幅1.6	(外) 回転ナダ (内) 回転ナダ	縫隙で調査して縫をなす。Ⅲ~3~4	8世紀初~末
258	須恵器舟身	古奈縄12区 底径19.5 狹幅1.55	底径19.5 狹幅1.55	(外) 大井部回転ヘラケズリ+回転ナダ (内) 回転ナダ	口縁部はゆるやかに内方へ回曲する。	8世紀初~中
259	須恵器舟身	古奈縄26区 底径16.6 狹幅1.7	底径16.6 狹幅1.7	(外) 大井部回転ヘラケズリ+回転ナダ (内) 回転ナダ	Z字のカーブを呈し、縫隙が下方に残 る。陶色Ⅲ~3~4	8世紀初~中
260	須恵器舟身	古奈縄25区 底径13.6 狹幅1.1	底径13.6 狹幅1.1	(外) 大井部回転ヘラケズリ+回転ナダ (内) 回転ナダ	Z字のカーブを呈し、縫隙が下方に残 る。陶色Ⅲ~3~4	8世紀初~中
261	須恵器舟身	古奈縄25区 底径12.5 狹幅1.8	底径12.5 狹幅1.8	(外) 回転ナダ (内) 回転ナダ	Z字のカーブを呈し、縫隙が下方に残 る。陶色Ⅲ~3~4	8世紀初~中

262	須磨村林業	須磨層14区		残高1.5 (外) 開拓ナダ (内) 回転ナダ	やや低い位置つまり。南北Ⅱ-3 (外) 開拓ナダ (内) 回転ナダ	7世紀後半
263	須磨村林業	須磨層14区		残高1.45 (外) 開拓ナダ (内) 回転ナダ	標準的な範囲つまり。南北Ⅱ-4	8世紀末
264	須磨村林業	須磨層14区		残高1.3 (外) 開拓ナダ (内) 回転ナダ	やや低い位置つまり。南北Ⅱ-3 (外) 開拓ナダ (内) 回転ナダ	7世紀後半
265	須磨村林業	須磨層14区			標準的な範囲つまり。南北Ⅱ-4	8世紀末
266	須磨村林業	須磨層14区	底径0.9	残高2.3 (外) 開拓ナダ (内) 回転ナダ	端部外方に向直し、下方に曲がるが段はみられない。南北Ⅰ-5	6世紀初
267	須磨村林業	須磨層14区	底径1.7	残高1.6 (外) 開拓ナダ (内) 回転ナダ	端部下方に細曲、段をなす。南北Ⅱ-6	7世紀初
268	須磨村林業	須磨層14区		残高4.45 (外) 開拓ナダ (内) 回転ナダ	1段階の長方形連かし窓。南北Ⅰ-3-5	5世紀後半-6世紀初
269	須磨村林業	須磨層14区		残高5.1 (外) 開拓ナダ (内) 回転ナダ	長方形透かし窓を二方斜に段を配する。南北Ⅰ-6	6世紀前半-末
270	須磨村林業	須磨層14区		残高2.75 (外) 開拓ナダ (内) 回転ナダ	律動的透かし窓の界隈化線、一種刺繡文 (上) 段る。開口Ⅱ	6世紀前半-7世紀初
271	須磨村林業	須磨層14区	底径4.1	体形 太根 24.2 (外) 開拓ナダ (内) 回転ナダ	肩の張り意。南北Ⅱ-1	7世紀末-8世紀初
272	須磨村林業	須磨層20区	底径4.9	残高2.1 (外) 高台側開拓ナダ、底部斜削ケズリ (内) 回転ナダ	平らに丸い輪郭の頂に丸い字形の凹内を付す短縫窓。南北Ⅱ-2	8世紀前半-中
273	須磨村林業	須磨層20区	16.4	残高1.4 (外) 開拓ナダ (内) 回転ナダ	丸くくっする丸縫窓。南北Ⅱ-3-4	8世紀前半-8世紀末
274	須磨村林業	須磨層20区	17.7	残高4.3 (外) 開拓ナダ (内) 回転ナダ	外壁する口縫隙が底部から外方へ屈曲し、表面方向に凹字がある。南北Ⅱ-1-2	6世紀前半-中
275	須磨村林業	須磨層20区	21.4	残高6.2 (外) 開拓ナダ (内) 回転ナダ	外壁する口縫隙が口に面をなす。南北Ⅱ-3-4	7世紀末-8世紀後
276	須磨村林業	須磨層21区	17.4	残高3.7 (外) ミコナデ (内) ミコナデ	口縫隙部短く折り曲げる羽茎	14世紀
277	須磨村林業	須磨層20区	20.0	残高3.5 (外) ミコナデ、体形ケズリ (内) 調整不規	傾く水平の脚つる羽茎。	16世紀?
278	須磨村林業	須磨層20区	26.0	残高4.1 (外) ミコナデ (内) 調整不規	内縫する口縫隙に水平の筋がつく。	14世紀後半
279	須磨村林業	須磨層17区	11.6	残高2.7 (外) ミコナデ (内) ナダ	(上) ミコナデ (下) ナダ	
280	瓦器鉢	須磨層14区	底径6.8	残高2.0 (外) 体形コナダ+高台部コナダテイ式 (内) ナダ	比較的高い高台。尾上Ⅱ-3-4	12世紀後半-13世紀前半
281	瓦器鉢?	須磨層14区	17.3	残高3.0 (外) 口縫隙コナダ? (内) ナダ		
282	瓦器鉢	須磨層15区	19.0	残高2.7 (外) 口縫隙コナダ? (内) ナダ	端部近く外反する。	中後
283	瓦器鉢	須磨層15区	15.6	残高4.1 (外) 口縫隙コナダ? (内) ナダ	厚みのある底盤。底蓋破損不十分。丸みのある底盤。	中後
284	瓦器鉢	須磨層15区	15.6	残高3.4 (外) 口縫隙コナダ? (内) 調整4回	厚みのある底盤。	中後
285	瓦器鉢	須磨層15区	15.9	残高4.1 (外) 口縫隙コナダ+体形ナダ (内) 調整4回	内外部を窓にヘタミガキ。底蓋破損不十分。	中後
286	瓦器鉢	須磨層15区	14.4	残高3.2 (外) 口縫隙コナダ+体形ナダ (内) ナダ	口縫隙部内面に洗刷状のもの残る。	中後
287	瓦器鉢	須磨層15区	15.2	残高3.3 (外) 口縫隙コナダ (内) ナダ		中後
288	瓦器鉢	須磨層15区	16.6	残高2.1 (外) 口縫隙コナダ (内) ナダ	内縫相いヘタミガキ。体部外側ユビオサ	13世紀前半
289	瓦器鉢	須磨層15区	16.6	残高2.1 (外) 口縫隙コナダ (内) ナダ	そのままで。尾上Ⅱ-3	
290	瓦器鉢	須磨層15区	16.6	残高3.2 (外) 口縫隙コナダ (内) ナダ	外側部ヘタミガキ。厚い唇部。尾上Ⅱ-3-4	12世紀後半-13世紀前半
291	瓦器鉢	須磨層15区	17.0	残高3.2 (外) 口縫隙コナダ+体形ユビオサ (内) ナダ	内縫相いヘタミガキ。厚い唇部。尾上Ⅱ-3-4	12世紀後半-13世紀前半
292	瓦器鉢	須磨層15区	17.7	残高3.2 (外) 口縫隙コナダ+体形ユビオサ (内) ナダ	内縫相いヘタミガキ。体部外側ユビオサのままで。尾上Ⅱ-3	13世紀前半
293	瓦器鉢	須磨層15区	18.6	残高1.75 (外) 体形コナダ (内) 調整4回	外側1.5cm。比較的高い高台。尾上Ⅱ-3-4	12世紀後半-13世紀前半
294	瓦器鉢	須磨層15区	19.7	残高1.7 (外) 体形コナダ (内) 調整4回	厚みのある高台。高内底ナダ	12世紀後半-13世紀前半
295	瓦器鉢	須磨層15区	20.0	残高1.0 (外) ナダ	洗刷込みに厚い唇。尾上Ⅱ-3-4	12世紀後半-13世紀前半
296	瓦器鉢	須磨層15区	20.0	残高0.8 (外) 高内底コナダ? (内) ナダ	内縫相いヘタミガキ。厚い唇部。尾上Ⅱ-3-4	12世紀後半-13世紀前半
297	瓦器鉢	須磨層15区	20.2	残高1.4 (外) 高内底コナダ、底蓋コビオサ (内) ナダ	厚みのある安定した高台。尾上Ⅱ-3-4	12世紀後半-13世紀前半
298	瓦器鉢	須磨層15区	20.5	残高1.0 (外) 高内底コナダ、底蓋ナダ (内) ナダ	太く安定した路筋張る高台。尾上Ⅱ-3-4	12世紀後半-13世紀前半
299	瓦器鉢	須磨層15・16	20.6	残高1.4 (外) 高内底コナダ、底蓋ナダ (内) 調整4回	高内底安定した路筋張る。見込みに太い平行1.5cm。尾上Ⅱ-3-4-III-1-2	12世紀後半-13世紀前半
300	瓦器鉢	須磨層15区	20.6	残高1.5 (外) 高内底コナダ、底蓋ナダ (内) 調整4回	厚みのある安定した高台。尾上Ⅱ-3-4	12世紀後半-13世紀前半
301	瓦器鉢	須磨層15区	20.7	残高1.3 (外) 高内底コナダ、底蓋ナダ (内) 調整4回	厚みのある安定した高台。尾上Ⅱ-3-4	12世紀後半-13世紀前半
302	瓦器鉢	須磨層15区	20.9	残高1.05 (外) 調整4回	厚みのある安定した高台。尾上Ⅱ-3-4	12世紀後半-13世紀前半
303	瓦器鉢	須磨層15区	20.9	残高0.7 (外) 高内底コナダ、底蓋ナダ (内) 調整4回	低い進化した高台。尾上Ⅱ-3-4	13世紀中-13世紀後半
304	瓦器鉢	須磨層15区	21.0	残高0.2 (外) 高内底コナダ、底蓋ナダ (内) ナダ	厚みのある安定した高台。尾上Ⅱ-3-4	12世紀後半-13世紀前半
305	瓦器鉢	須磨層21区	21.6	残高1.2 (外) 高内底コナダ、底蓋ナダ (内) 調整4回	三角高台。	中後
306	瓦器鉢	須磨層21区	21.7	残高0.85 (外) 高内底コナダ、底蓋ナダ (内) ナダ	低い三角高台。尾上Ⅱ-3-4-IV-2	13世紀中-13世紀後半
307	瓦器鉢	須磨層21・13	21.8	残高1.1 (外) 高内底コナダ、底蓋ナダ (内) ナダ	進化した高台。	13世紀中-13世紀後半

308	火薬物武形	包含層22区	底35.0 岩高0.8	(外) 高立ヨコナダ、底部ナデ (内) ナデ	輪郭線の構造を残す高台。見込みにいく 長いランキンギダ	13世紀中～13世紀後半
309	瓦器皿	包含層21区	底35.0 岩高1.7	(外) リ縁部ヨコナダ、底部ナビオラヌ (内) ナデ	手筋から屈曲して外上方にひびる北朝的 手筋の器。見込みにいく長い平行ミガキ	中世
310	瓦器皿	包含層18区	6.5 岩高1.7	(外) リ縁部ヨコナダ、底部ユビオラヌ (内) ヨコナダ	手筋から屈曲して外上方にひびる北朝的 手筋の器。見込みにいく長い平行ミガキ	中世
311	瓦器皿	包含層11区	9.0 岩高16.3	(外) リ縁部ヨコナダ、底部ユビオラヌ (内) ヨコナダ	底部が口縁部までならかにのひび。指 印丸く押す。	13世紀後半
312	瓦器皿	包含層21区	7.5 岩高1.5	(外) リ縁部ヨコナダ、底部ユビオラヌ (内) ヨコナダ	丸みのある底盤から底部から外反する形 でのひび。底盤との境に指を吹き。	中世
313	瓦器皿	包含層18区	7.5 岩高15.2	(外) 口縁部ヨコナダ、底部ユビオラヌ (内) ヨコナダ	深い窓型。丸みのある底盤から口縁部が 外反する形でのひび。底盤との境に指を 吹き。	14世紀
314	瓦器皿	包含層12区	7.5 岩高1.0	(外) 口縁部ヨコナダ、底部ユビオラヌ (内) ヨコナダ	外側ユビオラヌのまま、内面粗いミガキ	14世紀
315	丸器皿	包含層19区	12.0 岩高2.0	(外) ヨコナダ不規 (内) ヨコナダ不規	外側ユビオラヌのまま、内面粗いミガキ	14世紀
316	土師器皿	包含層16区	13.0 岩高3.5	(外) 口縁部ヨコナダ、底部ユビオラヌ (内) ヨコナダ	1段ナデ	中世
317	瓦器皿底部	包含層16区	底35.7 岩高0.9	(外) 高立ヨコナダ、底部ナデ (内) ナデ		中世
318	瓦器皿	包含層18区	13.0 岩高1.7	(外) リ縁部ヨコナダ、底部ユビオラヌ (内) ヨコナダ	内面ユビオラヌのまま、内面粗いミガキ	中世
319	土師器皿	包含層15区	7.5 岩高1.3	(外) ヨコナダ (内) ヨコナダ		中世
320	土師器皿	包含層19区	8.0 岩高1.8	(外) リ縁部ヨコナダ、底部ユビオラヌ (内) ヨコナダ	深い底盤から外斜方にひびる口縁部	中世
321	黑色土師碗	包含層16区	14.0 岩高2.2	(外) 調整小明 (内) ヨコナダ	両面	
322	瓦器皿底部	包含層20区	底37.7 岩高1.1	(外) 高石部分ヨコナダ (内) ヨコナダ不規	準みのある安定した丸底張の高台	中世
323	白粗陶口縁厚	包含層17区	14.0 岩高2.0		腹門底窓系口縫機口laタイプ。	12世紀前半
324	青粗陶	包含層13区	7.5 岩高3.8	(外) 黄褐色地、内面無文。灰白色の頑密な 胎上。	放射状に加筆を入れた後、胎形に先丸り の加筆を入れる裏文。裏面底窓系口縫 機底窓外にするV字または複数の窓。	14世紀後半～15世紀前
325	白粗陶	包含層23区	8.0 岩高1.4		腹門底窓系白粗陶口縫机口2型。	12世紀後半
326	白粗陶底部	包含層20区	底35.4 岩高1.9		腹門底窓系白粗陶口縫机口2型。	13世紀第1四半期
327	土師質食器	包含層14区	底35.6 岩高5.1 13.0	(外) 深壁不明 (内) ヨコナダ不規		
328	瓦器皿	包含層26区	15.0 岩高3.1	(外) ヨコナダ (内) ヨコナダ	口縁強度が下に直張する跡	12世紀末～13世紀初
329	瓦器皿	包含層22区	26.0 岩高4.3	(外) ヨコナダ (内) ヨコナダ	外反する口縁部が上方へ強く起張する 出口(?) 容量低め。	12世紀中～後半
330	瓦器皿身	22区 表土層	10.0 岩高1.9	(外) ヨコナダ (内) ヨコナダ	立ち上がり近く内張する。南函Ⅰ-3 5。	6世紀後半～末
331	瓦器皿身	26区 滅失	10.0 岩高3.8	(外) ヨコナダ (内) ヨコナダ	強付岩。斜上方へまっすぐひびる口縁 部。南函Ⅳ-4	8世紀末
332	瓦器皿身	22区 表土層	9.0 岩高1.9	(外) ヨコナダ (内) ヨコナダ		
333	瓦器皿	26区 滅失	14.0 岩高1.0	(外) 滅失ナダ (内) 滅失ナダ	方状のカーブを呈し、端部が下方に屈 曲。南函Ⅳ-3	8世紀中～後
334	瓦器皿身	22区 表土層	12.0 岩高3.8	(外) 口縁部ヨコナダ、体部ヘラケズリ (内) 滅失ナダ	外反する浅い斜が外面に凸傾。南函Ⅲ-1 -2	6世紀前半～中
335	瓦器皿身	22区 表土層	9.0 岩高1.9	(外) 滅失ナダ (内) 滅失ナダ		
336	瓦器皿	26区 滅失	14.0 岩高1.0	(外) 滅失ナダ (内) 滅失ナダ	方状のカーブを呈し、端部が下方に屈 曲。南函Ⅳ-3	8世紀中～後
337	瓦器皿身	22区 表土層	12.0 岩高3.8	(外) 口縁部ヨコナダ、体部ヘラケズリ (内) 滅失ナダ	外反する浅い斜が外面に凸傾。南函Ⅲ-1 -2	6世紀前半～中
338	瓦器皿底部	22区 表土層	底4.4 岩高0.9	(外) 滅失ナダ (内) 滅失ナダ	自然転写表	
339	瓦器皿底部	22区 表土層	底5.5 岩高2.3	(外) 滅失ナダ (内) 滅失ナダ		
340	瓦器皿底部	22区 表土層	底8.8	(外) 体部ヨコナダナデナケズリ (内) ヨコナダナデナデナケズリ	内面自然転写表。口縁部外面平行タキ	12世紀後半
341	瓦器皿	22区 滅失	底9.4	(外) 滅失ナダ不完全ヨコナダ (内) ヨコナダナキス	のり壁(?) ヨコナダ、京都志雲 内面自然転写表	
342	形象埴輪	22区 滅失	15.0	(外) 滅失ナダ (内) ナデ	前面に接合痕	
343	上部羽茎	22区 滅失	23.0 岩高4.6	(外) 口縁部ヨコナダ (内) 口縁部ヨコナダ	口縁部強く割り曲げる羽茎	14世紀後半
344	上部羽茎	22区 表土層	25.0 岩高3.7	(外) 口縁部ヨコナダ、体部ユビオラヌ ナデ	口縁部強く割り曲げる羽茎	14世紀後半
345	上部羽茎	22区 表土層	8.0 岩高3.1	(外) 口縁部ヨコナダ (内) ヨコナダ	口縁部強く割り曲げる羽茎	14世紀後半
346	丸器皿	22区 表土層	8.0 岩高1.45	(外) 口縁部ヨコナダ、底部ユビオラヌ ナデ (内) ケズリ	底部からやや丸をもって口縁部までな ど	14世紀
347	丸器皿	26区 滅失	8.0 岩高1.7	(外) 口縁部ヨコナダ (内) ナデ	だらかにつづく、端部をよく飾める。 内外葉を直へたりとガモイ底盤からやや丸 みをもって口縁部までならかにつづく。端部をねぐ飾れる。	14世紀

土錐

探査番号	材質	出土上個所	法量 (cm・g)				残存状態	備考
			長さ	最大径	孔径	重量		
62	土師質	井戸123	6.4	4.1	2.1	74.5		大型管状土錐・弥生
63	土師質	井戸123	6.7	4.2	2.0	68.4		大型管状土錐・弥生
190	土師質	台含層6区	4.6	3.1	1.1	15.7		大型管状土錐・弥生
191	土師質	台含層6区	4.3	1.7	0.6	7.9		両端有孔土錐・古墳
192	土師質	台含層6区	4.8	1.2	0.45~0.50	4.0	ほぼ完形	小型管状土錐・中世
193	土師質	台含層6区	3.2	1.1	0.35	3.6	ほぼ完形	小型管状土錐・中世
194	土師質	台含層6区	4.3	1.25	0.4	4.3	完形	小型管状土錐・中世
195	土師質	台含層11区	4.3	0.85	0.3~0.35	2.5	ほぼ完形	小型管状土錐・中世
196	土師質	台含層6区	4.2	0.95	0.35	3.8	完形	小型管状土錐・中世
197	土師質	台含層6区	4.3	1.6	0.3	3.9		小型管状土錐・中世
198	土師質	台含層6区	4.3	1.8	0.4	5.9	ほぼ完形	小型管状土錐・中世
199	土師質	台含層10区	4.4	1.1	0.3	4.1		小型管状土錐・中世
200	土師質	台含層6区	3.7	1.2	0.4	3.5		小型管状土錐・中世
201	土師質	台含層6区	3.9	1.3	0.35	4.2		小型管状土錐・中世
202	土師質	台含層10区	3.8	0.9	0.3	2.5	完形	小型管状土錐・中世
203	土師質	台含層6区	3.0	0.9	0.35~0.4	1.6		小型管状土錐・中世
204	土師質	台含層6区	2.6	1.0	0.35~0.4	2.4		小型管状土錐・中世
205	土師質	台含層6区	3.1	1.05	0.4~0.45	2.4	ほぼ完形	小型管状土錐・中世
206	土師質	台含層6区	3.5	1.15	0.4~0.45	2.7	ほぼ完形	小型管状土錐・中世
207	土師質	台含層11区	3.5	0.9	0.3	1.8	完形	小型管状土錐・中世
208	土師質	台含層10区	2.3	0.9	0.35	1.4		小型管状土錐・中世
342	土師質	台含層23区	4.8	4.1	—	51.7		小型管状土錐・中世
343	土師質	台含層21区	4.6	4.1	2.0	67.3	ほぼ完形	小型管状土錐・中世
344	土師質	台含層21区	4.7	1.7	0.4	13.1		小型管状土錐・中世
345	瓦質	台含層26区	4.7	1.65	0.8	11.3	完形	小型管状土錐・中世
346	土師質	台含層15区	4.7	1.2	0.5~0.6	4.3	ほぼ完形	小型管状土錐・中世
347	土師質	台含層12~13区	4.2	1.1	0.4	4.5		小型管状土錐・中世
348	土師質	台含層12区	4.45	1.1	0.4	5.8	完形	小型管状土錐・中世
349	土師質	台含層21区	4.3	1.25	0.45	5.4	完形	小型管状土錐・中世
350	土師質	台含層22区	4.3	1.1	0.4	4.9	完形	小型管状土錐・中世
351	土師質	台含層23区	4.5	1.0	0.35~0.4	4.2	完形	小型管状土錐・中世
352	土師質	台含層22区	4.3	1.1	0.4	4.2	ほぼ完形	小型管状土錐・中世
353	土師質	台含層22区	3.3	1.2	—	5.6	丸はつぶれています	小型管状土錐・中世
354	土師質	台含層21区	4.1	1.95	0.35	4.4	完形	小型管状土錐・中世
355	土師質	台含層21区	4.2	0.95	0.35	3.2	ほぼ完形	小型管状土錐・中世
356	土師質	台含層21区	3.7	1.1	0.4	4.6	完形	小型管状土錐・中世
357	土師質	台含層21区	3.6	1.2	0.4	3.4	ほぼ完形	小型管状土錐・中世
358	土師質	台含層12~13区	3.4	1.1	0.4	3.8		小型管状土錐・中世
359	土師質	台含層21区	4.0	1.2	0.35~0.4	5.0	完形	小型管状土錐・中世
360	土師質	台含層12~13区	3.1	1.2	0.35~0.4	3.1		小型管状土錐・中世
361	土師質	台含層21区	3.8	1.1	0.5	4.0	ほぼ完形	小型管状土錐・中世
362	土師質	台含層17区	3.6	1.05	0.35~0.4	3.3		小型管状土錐・中世
363	土師質	台含層21区	2.5	1.0	0.35	2.0		小型管状土錐・中世
364	土師質	台含層21区	2.65	1.1	0.35	2.6		小型管状土錐・中世
365	土師質	台含層21区	3.4	1.1	0.45~0.5	3.6	ほぼ完形	小型管状土錐・中世
366	土師質	台含層21区	3.6	1.1	0.4	3.5	完形	小型管状土錐・中世
367	土師質	台含層21区	3.8	1.0	0.35~0.4	3.1		小型管状土錐・中世
368	土師質	台含層21区	3.6	0.95	0.3	2.7		小型管状土錐・中世
369	土師質	台含層17区	3.6	0.95	0.3~0.35	3.2	ほぼ完形	小型管状土錐・中世
370	土師質	台含層21区	3.7	1.05	0.35	3.0		小型管状土錐・中世
371	土師質	台含層12~13区	4.1	1.1	0.4~0.5	4.6	ほぼ完形	小型管状土錐・中世
372	土師質	台含層26区	3.8	1.0	0.3~0.35	3.1		小型管状土錐・中世
373	土師質	台含層15区	3.1	1.1	0.4	2.7		小型管状土錐・中世

374	土師質	台合層21区	3.45	0.96	0.35~0.4	2.6 ぼぼ形	小型管状土鍤・中世
375	土師質	台合層21区	2.35	0.85	0.35	1.4	小型管状土鍤・中世
376	土師質	台合層23区	2.5	0.85	0.35	1.4	小型管状土鍤・中世
377	土師質	台合層14区	3.5	0.85	0.35	2.2 泡形	小型管状土鍤・中世
378	土師質	台合層23区	3.3	0.85	0.3	1.9	小型管状土鍤・中世
379	土師質	台合層23区	3.8	0.9	0.3	2.4 ぼぼ泡形	小型管状土鍤・中世
380	土師質	台合層14区	3.2	1.2	0.35	4.2 泡形	小型管状土鍤・中世
381	土師質	台合層12~13区	2.2	0.8	0.3	1.2	小型管状土鍤・中世
382	土師質	台合層12~13区	3.2	1.35	0.4	3.2 泡形	小型管状土鍤・中世
386	土師質	複瓦表上層26区	4.2	1.35	0.35	5.0 泡形	小型管状土鍤・中~近世
389	土師質	複瓦表上層26区	4.3	1.1	0.4	4.7 泡形	小型管状土鍤・中~近世
400	土の質	耕土層22区	4.0	1.2	0.35	4.6 ぼぼ泡形	小型管状土鍤・中~近世
401	土師質	耕土層22区	4.0	1.05	0.4	4.1 泡形	小型管状土鍤・中~近世
402	土師質	耕土層22区	4.1	1.05	0.4	4.0 ぼぼ泡形	小型管状土鍤・中~近世
403	土師質	耕土層22区	4.05	1.05	0.35~0.4	4.2 泡形	小型管状土鍤・中~近世
404	土師質	複瓦表土層22区	3.5	1.1	0.35~0.4	4.2	小型管状土鍤・中~近世
405	土師質	複瓦表土層26区	3.5	0.8	0.35	2.6 ぼぼ泡形	小型管状土鍤・中~近世
406	土の質	耕土層22区	3.8	0.9	0.3	2.4 ぼぼ泡形	小型管状土鍤・中~近世
407	土師質	耕土層22区	3.0	1.25	0.35~0.4	4.1	小型管状土鍤・中~近世
408	土師質	耕土層22区	3.95	1.1	0.4	3.7	小型管状土鍤・中~近世
409	土師質	複瓦表土層11区	4.1	1.05	0.4	4.0	小型管状土鍤・中~近世

鉢器

捕団番号	材質	出土個所	(cm)		残存状態	備 考
			口径	残存高		
3	土師質	ビット18	12.4	6.8	焼成やや不良	泡形真柄壺・中世
5	土師質	ビット43	13.6	4.2	焼成やや不良	泡形真柄壺・中世
23	土師質	ビット126		6.4	焼成やや不良	泡形真柄壺・中世
45	土の質	井戸2	14.0	4.3	焼成形真柄壺・中世	
74	土師質	土括66	13.4	8.2	焼成形真柄壺・中世	
75	土師質	土括66	12.0	5.2	焼成形真柄壺・中世	
76	土師質	土括66		5.1	焼成形真柄壺・中世	
77	土師質	土括66		15.6	焼成形真柄壺・中世	
78	土師質	土括66		8.9	焼成形真柄壺・中世	
85	銀容器	上層198		6.4	焼成不良	銀形真柄壺・古墳後期以降
110	銀容器	包合層7区	6.0	3.8		コップ形真柄壺・今中~古墳前
181	土師質	台合層5区	4.8	4.4	焼成やや不良	鉢形真柄壺・古墳後期以降
182	土師器	台合層7区		4.0		鉢形真柄壺・古墳後期以降
183	銀容器	包合層5区		4.4		銀形真柄壺・古墳後期以降
184	銀容器	包合層10区		5.1		銀形真柄壺・古墳後期以降
185	銀容器	包合層5区		4.0		銀形真柄壺・古墳後期以降
186	銀容器	包合層7区		4.3		銀形真柄壺・古墳後期以降
187	土師質	包合層10区	13.2	3.5		泡形真柄壺
330	土師器	台合層26区		4.3		銀形真柄壺・古墳後期以降
331	土師器	台合層25区		2.7		銀形真柄壺・古墳後期以降
332	土師質	包合層26区		4.7	焼成やや不良	銀形真柄壺・古墳後期以降
333	土師器	包合層18区		5.6		銀形真柄壺・古墳後期以降
334	銀容器	包合層25区		3.5		銀形真柄壺・古墳後期以降
335	銀容器	包合層16区		5.0		銀形真柄壺・古墳後期以降
336	銀容器	包合層23区		8.4		銀形真柄壺・古墳後期以降
337	土師器	台合層27区	13.6	4.5		泡形真柄壺・中世
338	土師器	包合層18区	12.0	7.2		泡形真柄壺・中世
339	土師器	包合層16区	12.0	5.9		泡形真柄壺・中世
340	土師器	包合層17区	9.4	3.4		泡形真柄壺・中世
341	土師器	台合層27区	9.2	3.6		泡形真柄壺・中世

本調査地点では小規模な建物4・5を除き、その他の建物はすべて南西の調査区外へ及んでいた。区外へ及ぶ周辺の地籍を一覧すると十一ノ坪にあたるところに「古屋垣外」、十五ノ坪にあたるところには「出屋敷」がある。これ以外の地籍は「浜辺」、「浜出」、「コモ測」、「高測」など屋敷地の周辺といった感じである。これからみても今回検出された建物の位置は南東から北西に拡がる旧来の屋敷地と重複する形をとっていることがわかる。この地点での生活遺構としては少なくとも2基の井戸の出土遺物によって示されるように、11世紀末から12世紀前半あたりまでさかのぼれる可能性がある。建物は軸方向からみてN 40° -E前後のもの（建物1～5・柱列1）とN 50° -E前後のもの（建物6・柱列2）の大きく2群に分かれるが、廃絶は一部の遺物から13世紀頃と考えられるに過ぎない。

既に述べたように板石を立てた土坑3はこれら的生活遺構の西を限り、十ノ坪の1町四方を地割りに沿って区画した位置を占め、また南北方向からみるとちょうどこの位置がTP2.5mの変換点にも相当し、そこより北は海浜に連なる砂堆が山地となっている。よってこの板石を屋敷地のコーナーに据えられた区画石と考えたい。

このような地割りに従って営まれたらしい屋敷地の一画を和泉郡条里に照らしてみてみると、調査地点は主条里の施された範囲に含まれる。ここでは真北に対してN 42.5° -Eの方位が知られているから、それによってみれば検出された建物では建物1～5や柱列1がこの数値に近い。しかし別の1群は地割りに沿わないで、あるいは条里が全体的に整合する以前のある時期の方向にしたがった建物といえるかも知れない。また中世遺物を混入せず、須恵器のみを出土した土坑198も軸方向は主条里のそれとはずれている。したがって検出された建物の1群が少なくともこの主条里の地割りを踏襲し、1町四方の坪の中を区画して占地されたといえそうである。

これらの建物を営んだ人々の生業の一面は漁具に示される海浜依存型の生業形態である。しかし中世包含層に比較的多量の須恵器が含まれること、須恵器を出土した一部の土坑の存在からみると、やはり古代以来横尾川や牛滝川の流域の段丘面の開発が山手側から進められてきた結果、ついに海浜部へ達し、条里の区割りを敷延させてそこにムラを展開するようになった姿がまず想像される。調査区の北を通る紀州街道の発達もそれが前提にあったと思われる。

参考文献)

中世土器研究会編 「概説 中世の土器・陶磁器」1997年

藤永正明「和泉郡の条里型地割に関する問題点」

『大園遺跡発掘調査概報・Ⅶ』大阪府教育委員会 1982年

森浩一「飯蛸壺と須恵器生産の問題」「近畿古文化論叢」昭和38年

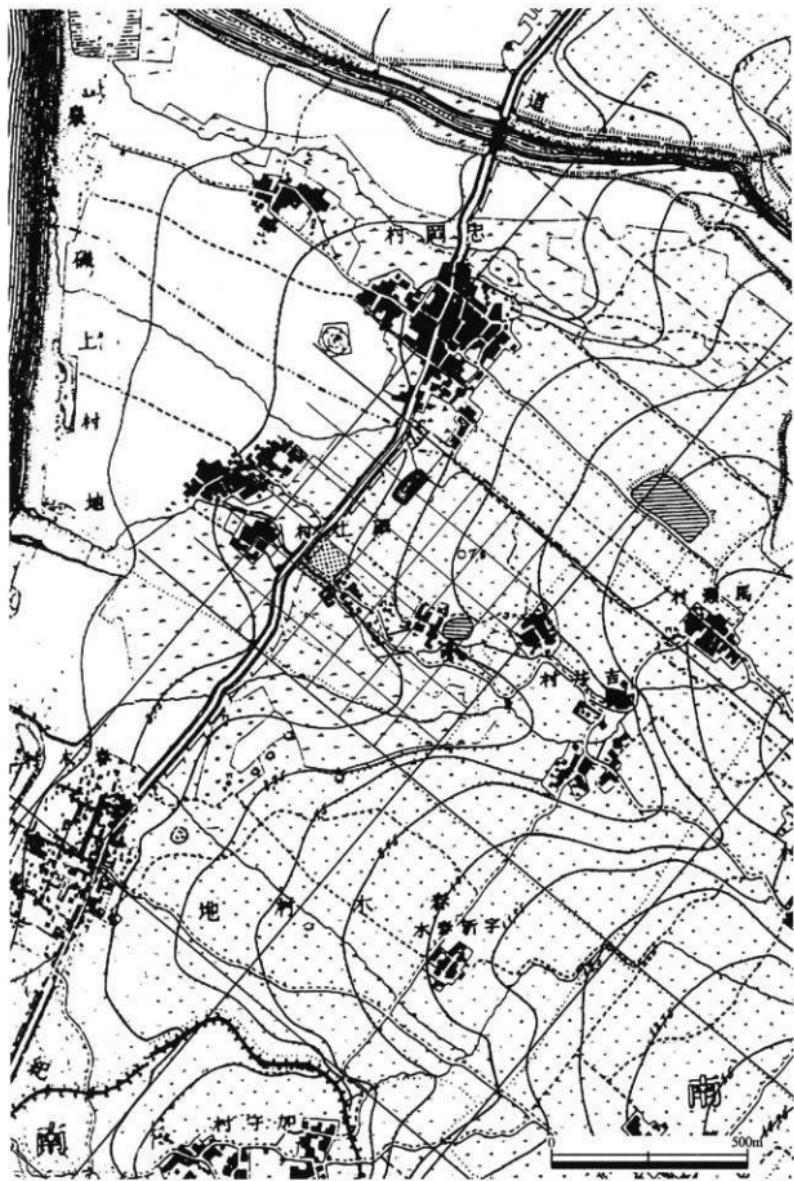
森浩一「漁業」「産業史」I(「体系日本史叢書」10)昭和42年

堅田直「春木八幡山遺跡の研究」岸和田市教育委員会 1965年

岸和田市教育委員会「吉井遺跡—都市計画道路忠岡吉井線建設に伴う発掘調査報告書」1998年



第33図 調査区周辺の字名



第34図 明治時代の調査区周辺の地形（編目トーン 調査地）
(大日本帝国陸地測量部 明治18年地図に加筆)

謝辞

調査にあたっては岸和田市教育委員会近藤利由氏、堺市埋蔵文化財センター森村健一氏、小谷城郷上館森村紀代氏よりご教示を給わった。また現地調査では島内洋二、進藤智美、松岡菊予、稻葉千容、南条直子、整理作業では奥野容子、井上能子、藏松聰美、川東貴子、二見雅子、小門邦代、八柄あさ子の諸氏のご努力をいただいた。記して以上の方々に心より感謝申し上げます。

報告書抄録

ふりがな	いそのかみじゅうのつぼいせき						
書名	磯之上十ノ坪遺跡						
副書名	府岩岸和田磯之上住宅建て替えに伴う発掘調査						
巻次							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	2001-4						
編著者名	枡本哲						
編集機関	大阪府教育委員会						
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351						
発行年月日	2002年3月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
いそのかみじゅう のつぼいせき 磯之上十ノ坪遺跡	きしわだしいそか みいっちょうめ198-1 ばんちほか 岸和田市磯上1丁目 198-1番地他	27202	189 34 29 00	135 23 35	2000年10 月～2001 年3月	3,038	府岩磯之上住 宅建て替え工 事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
磯之上十ノ坪遺跡	集落	鎌倉時代	掘立柱建物 ・井戸・溝	瓦器・壺壺・土鍤			

図 版



調査区全景（垂直写真）

調査区 南西部 建物群（南より）

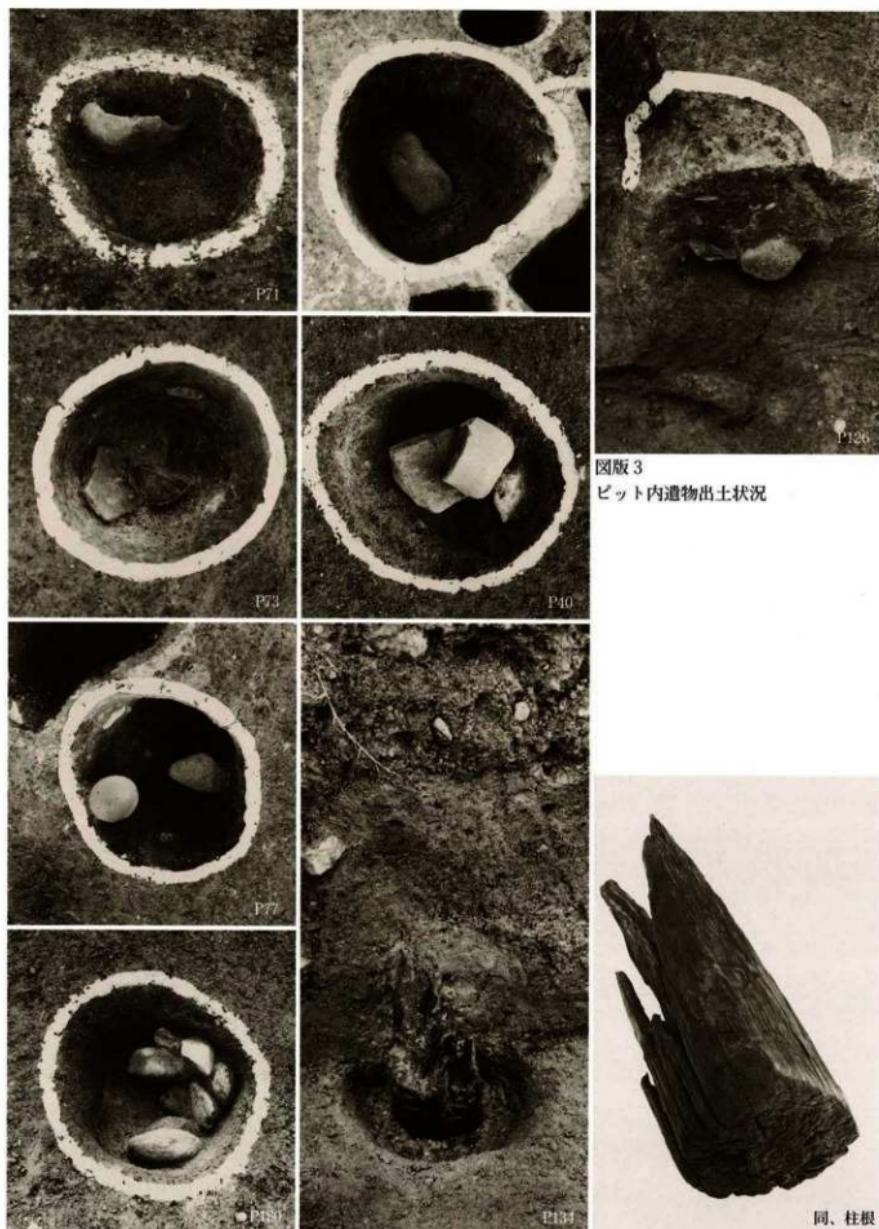


調査区 南西部 建物群（南東より）



調査区 南西部 建物群（北東より）





図版3
ピット内遺物出土状況

同、柱根

建物4・5・6
溝176周辺
(南西より)



建物4
溝176
周辺
(北東より)



溝176
細部
(南より)



井戸2

堆積状況 断面（南東より）



井戸2

遺物出土状況



井戸2

遺物出土状況

細部（南東より）



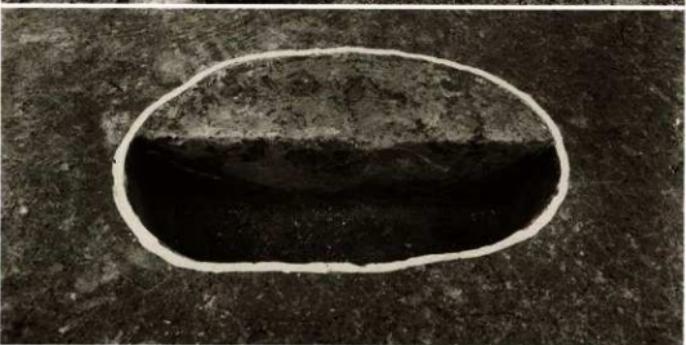
井戸 123 堆積状況断面
(南東より)



土坑 66 遺物出土状況
(東より)



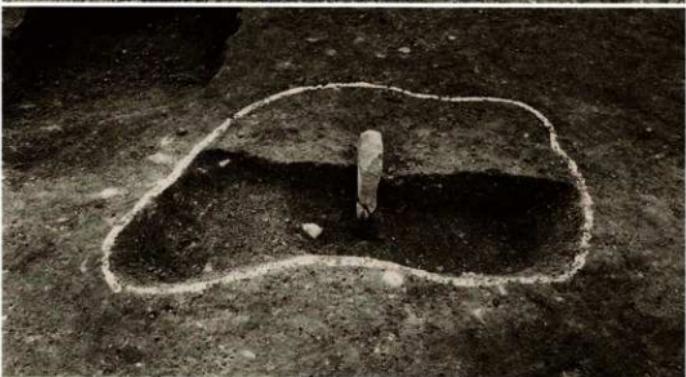
土坑 132 堆積状況断面
(南東より)



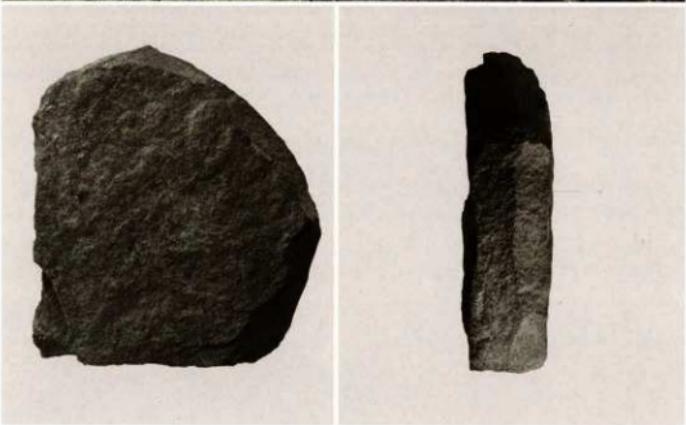
土坑3 検出状況（北より）



土坑3 堆積状況（南東より）



土坑3 出土 立石



調査区南部
溝 189 周辺 (南西より)



調査区南部土坑
198 周辺 (南東より)



溝 189 細部 (南西より)



調査区南部
溝 220・溝 222 周辺（北より）



調査区南部
土坑 198 周辺（東より）



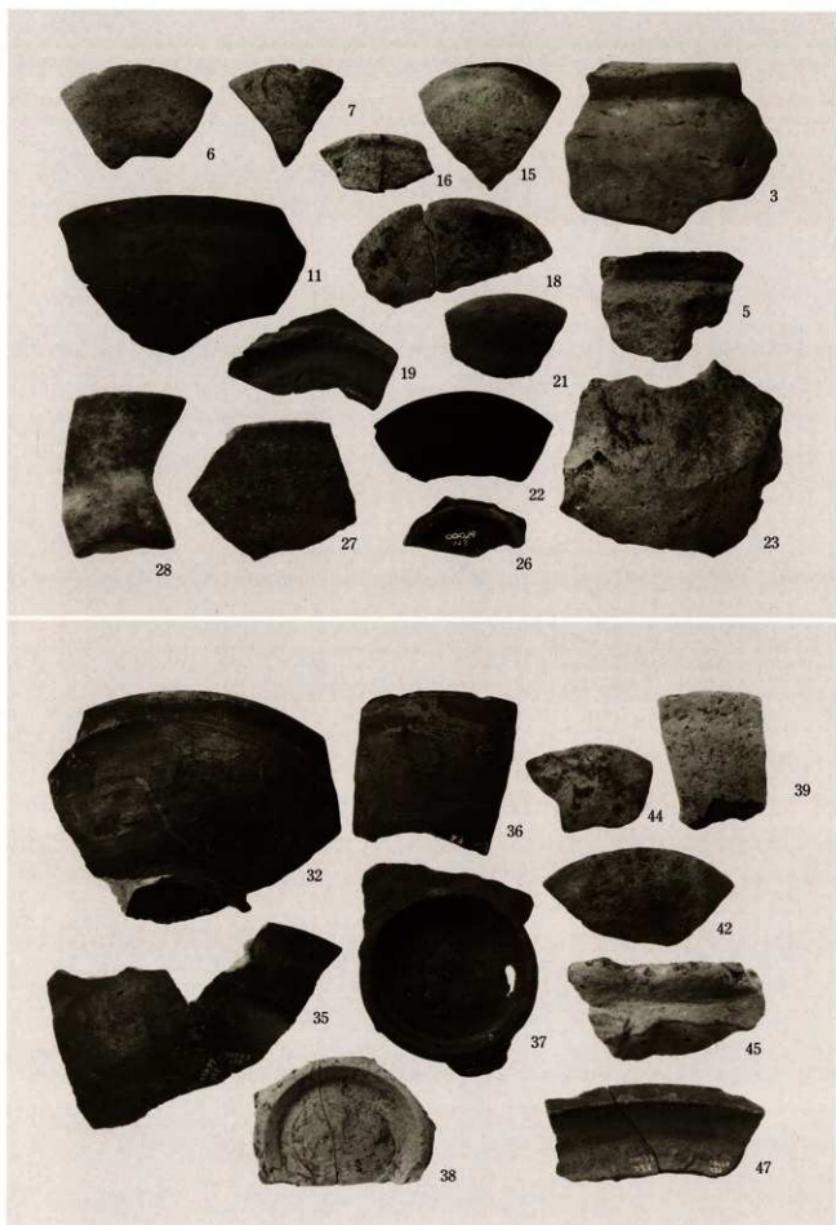
土坑 198 細部（北西より）



遺構出土遺物(1)



遺構出土遺物(2)



遺構出土遺物(3)



43



34



40



48



41



49



33



65

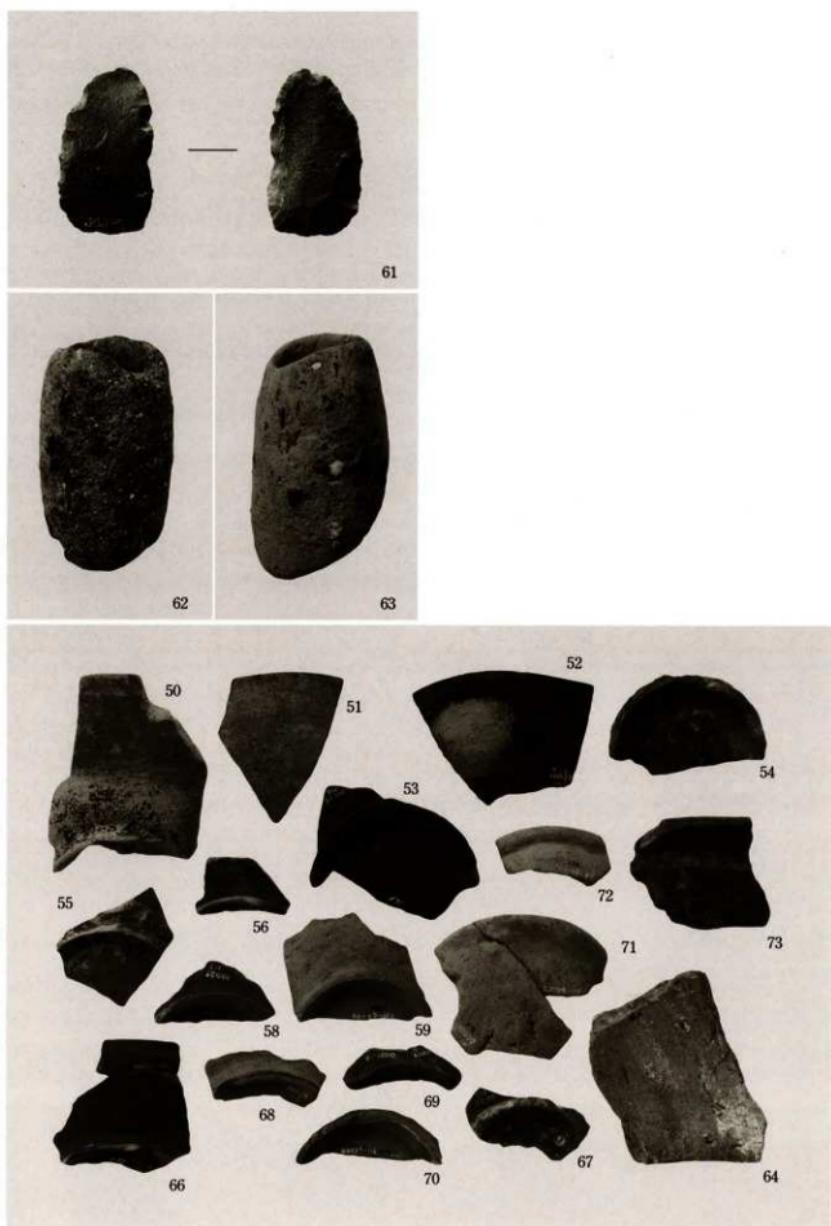


46



60

遺構出土遺物(4)



遺構出土遺物(5)



74



75



76



78



81



82



79



83



80



84

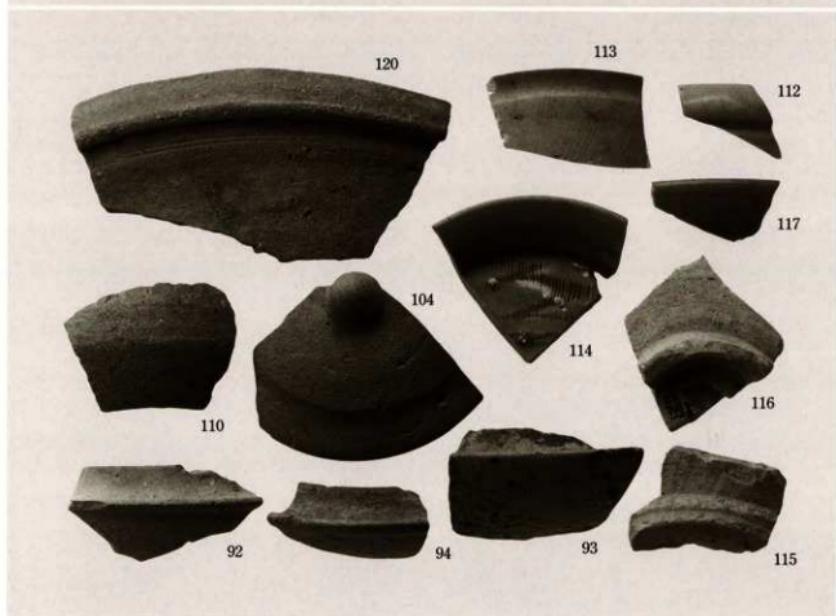


85

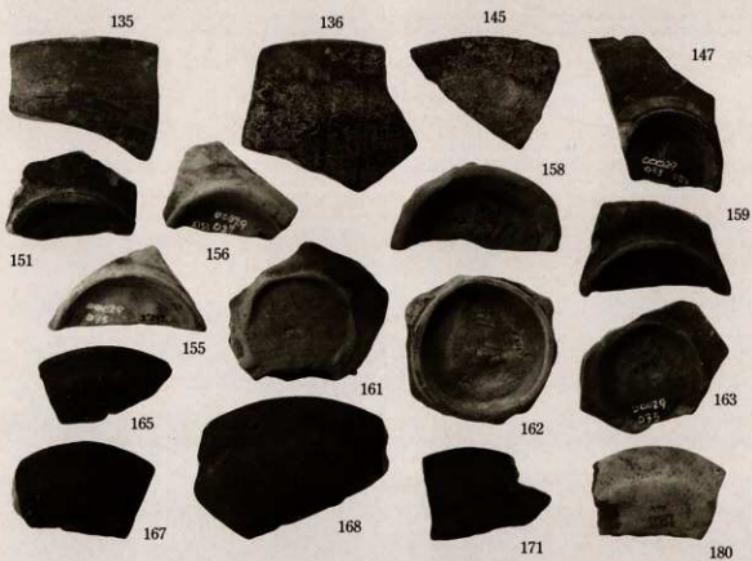
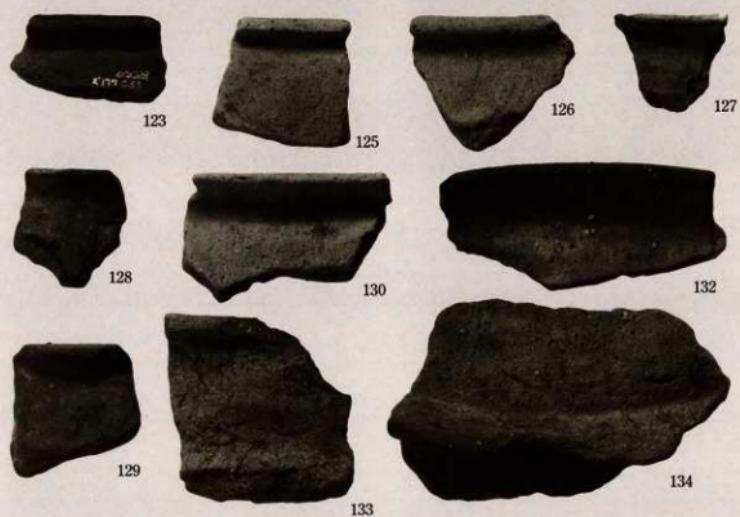
遺構出土遺物(6)

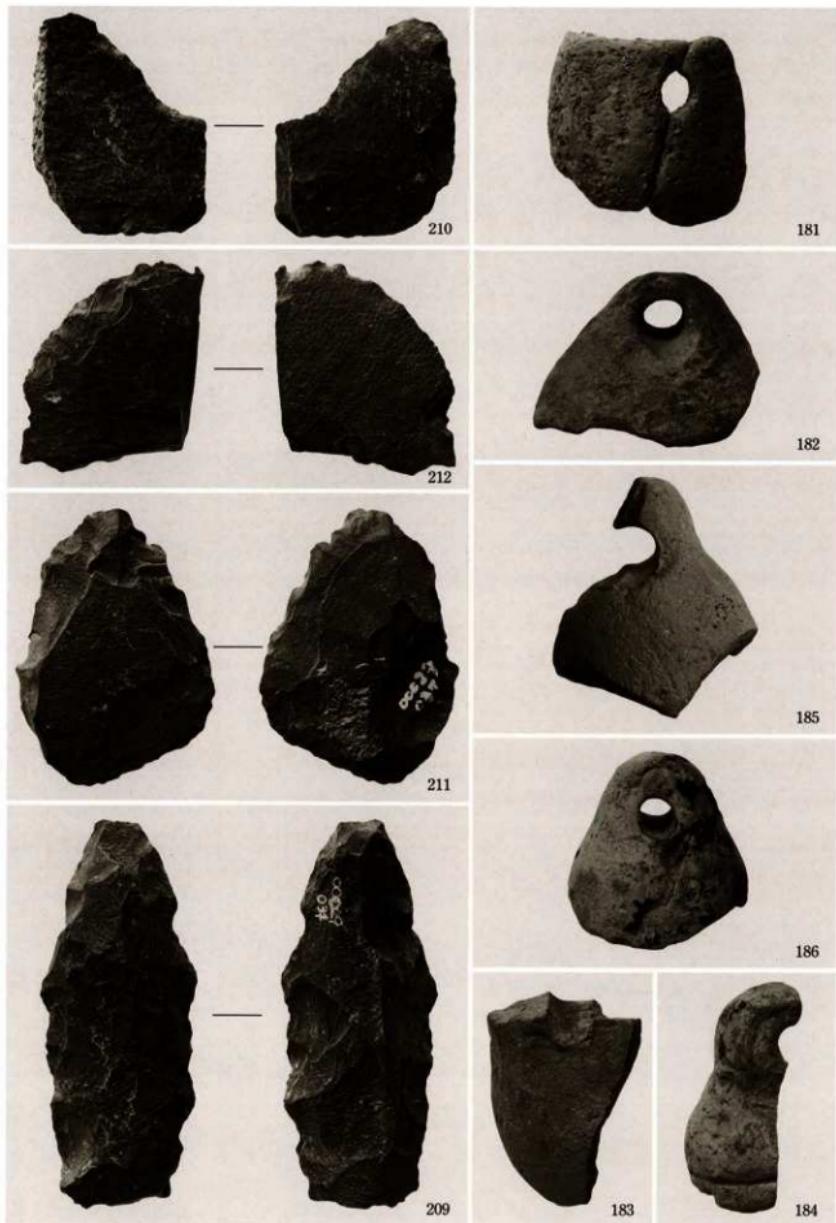


包含層出土遺物(1)

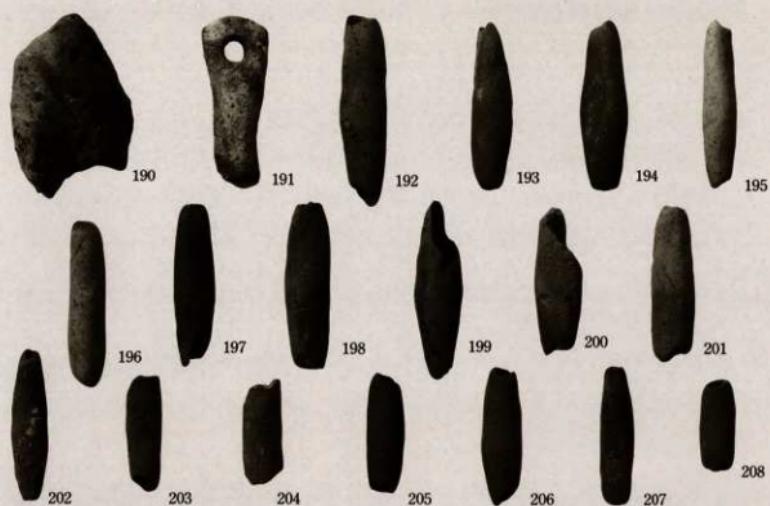


包含層出土遺物(2)

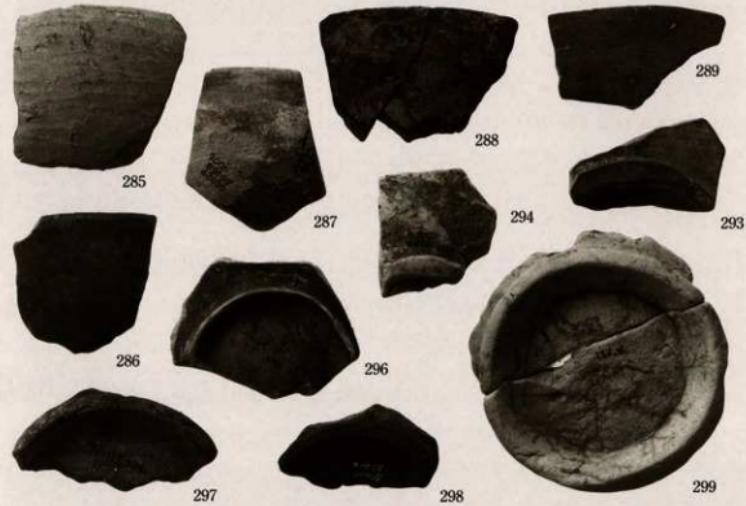
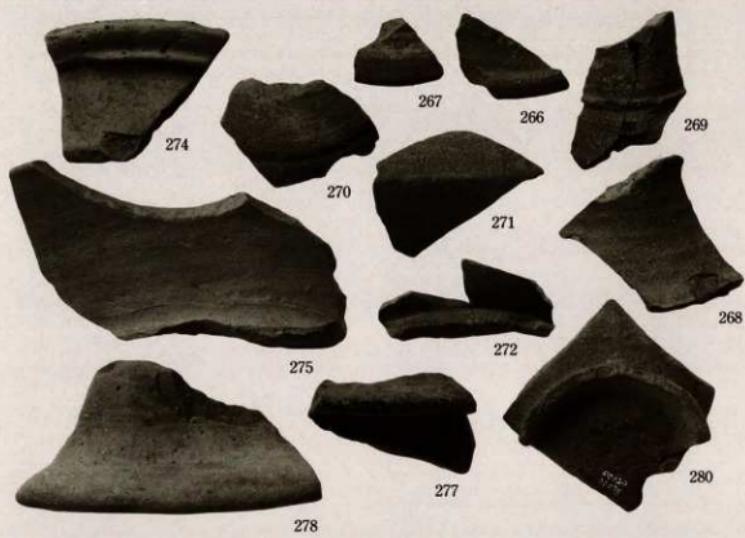


包含層出土遺物
(3)

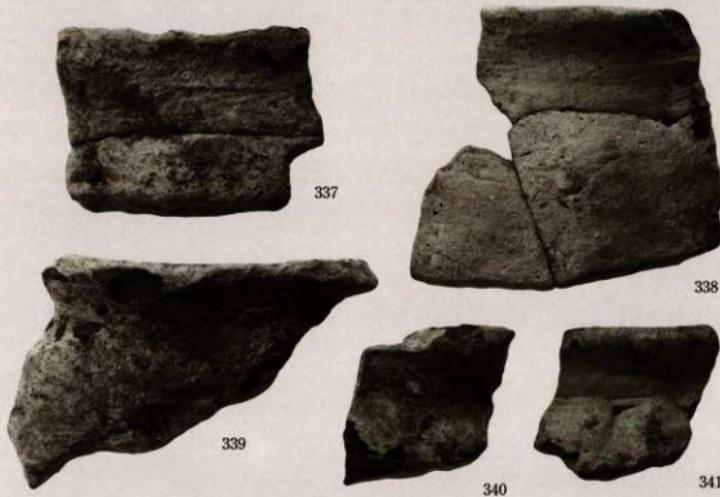
包含層出土遺物(4)



包含層出土遺物(5)



包含層出土遺物
(6)



包含層出土遺物(7)



284



248



335



331



336



333



332



398

399

400

401



402

403

404

405



406

407

408

409

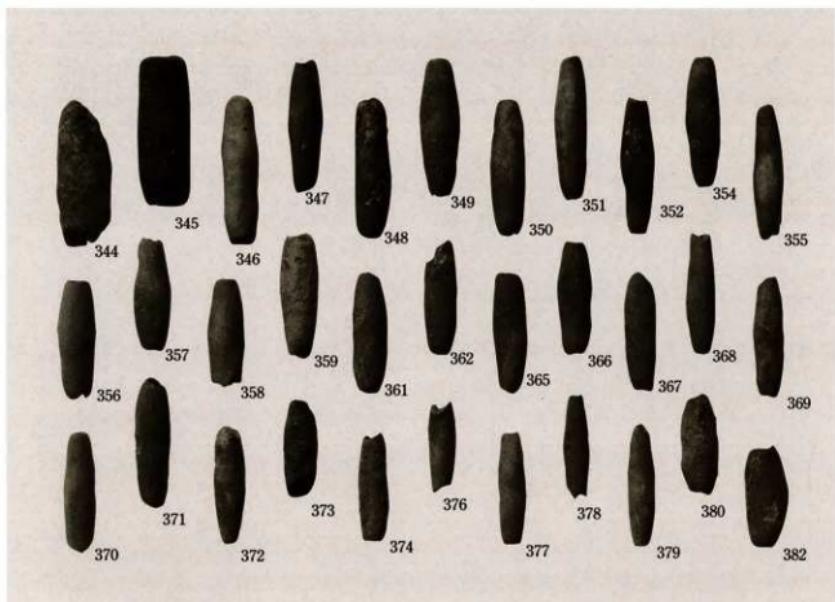


343



342

包含層出土遺物(8)・表土攪乱土出土遺物



磯之上十ノ坪遺跡発掘調査報告書
大阪府埋蔵文化財調査報告 2001-4

発行 大阪府教育委員会
〒 540-8571
大阪市中央区大手前 2 丁目
TEL 06-6941-0351

発行日 2002 年 3 月 29 日

印刷 鳳清印刷(株)
門真市柳田町 3 番 2 号
TEL 06-6902-7201



付図 検出構造全体図

